

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第171集

上  
の  
山  
遺  
跡  
Ⅲ

交野市

# 上 の 山 遺 跡 Ⅲ

一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇八年二月

財団法人  
大阪府文化財センター

2008年2月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第171集

交野市

# 上 の 山 遺 跡 Ⅲ

一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター





第5調査区 方形周溝墓1 (北から)



# 序 文

大阪府の東北部、交野市・枚方市に所在する上の山遺跡は、生駒山地から派生した広大な面積をもつ枚方丘陵の東端部に立地しています。遺跡の推定範囲の東側には磐船峡から淀川に流下する天野川があり、これが遺跡の形成と発展に大きな意味をもったものと考えられます。そして、遺跡を縦断するように東高野街道が南北に走り、ここが古くから地域の中のみでなく、広い世界とつながり、ヒトとモノが行きかう場所であったと推測されます。

このような地理的・歴史的世界の中にある上の山遺跡においては、平成15年度から行われた第二京阪道路建設予定地内の発掘調査により、多くの遺構・遺物が検出されました。この成果は旧石器時代から中世に及ぶ長期間の人々の暮らしと社会的な関係を知り、豊かな地域社会の姿を復元する貴重な材料になりつつあります。

今回、発掘調査の対象となりました一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備予定地は、第二京阪道路予定地と直行して北側へ延び、上の山遺跡を南北に縦断する形となっています。平成16年度には、第二京阪道路に接する地区の調査を実施し、その成果をすでに公表しております。本報告では、平成17・18・19年度に実施した調査の成果を掲載いたしました。

上の山遺跡の既往の調査成果の中でとりわけ注目されたのは、弥生時代中期の独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡であります。今回の調査では、この建物跡とほぼ同時期の卓越した規模をもつ方形周溝墓が検出できたことは、上の山遺跡に生きた人々の現実の生活のみならず、死後の世界における関係をも理解する可能性を開くことができたと考えます。このことは弥生時代の北河内の世界の中における上の山遺跡の位置と性格を考える上で貴重な成果であります。

さらに、遺跡の縁辺部で検出した縄文時代後期を中心とした時期の土坑群も、この地域の縄文時代の具体的な様相を知る上で、貴重な成果とすることができます。

以上のように今回の発掘調査では、多くの成果をえることができました。その報告を行った本書が広く活用され、地域の歴史像が少しでも豊かなものになりましたならば、たいへん嬉しく思います。

最後になりましたが、調査にあたり、多大なご協力を賜った大阪府枚方土木事務所、大阪府教育委員会、また地元の皆様に深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財調査にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2008年2月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正 好



# 例 言

1. 本書は、一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に伴って実施した上の山遺跡の発掘調査報告書である。調査地は大阪府交野市私部西4丁目に所在する。
2. 本調査は、大阪府枚方土木事務所から財団法人大阪府文化財センターが「一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査」として、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、平成17年度は、平成17年7月1日～平成18年3月20日の期間で委託を受け、現地調査は05-1調査区が平成17年10月7日～10月31日、05-2調査区が平成17年10月7日～平成18年2月28日の期間で実施した。平成18年度は、平成18年4月3日～平成19年2月28日の期間で委託を受け、現地調査（06-1調査区）は平成18年11月20日～平成19年1月15日の期間で実施した。平成19年度は、平成19年5月1日～平成20年2月29日の期間で委託を受け、現地調査（07-1調査区）は平成19年6月1日～11月30日の期間で実施した。現地調査終了後、整理作業を実施し平成19年度にすべての作業が終了した。
3. 発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。

〔平成17年度〕

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰、主査 上野貞子 [写真]、  
主幹兼調査第四係長 寺川史郎、主査 小林義孝、専門調査員 矢倉嘉人

〔平成18年度〕

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰、主査 上野貞子 [写真]、  
調査第三係長 小林義孝、専門調査員 日野祥子

〔平成19年度〕

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰、主査 上野貞子 [写真]、  
調査第一係長 小林義孝、技師 西川寿勝、専門調査員 日野祥子

本書作成に係わる整理作業は上記のほか、三好孝一、森井貞雄、吉田綾子、和田大作、松岡淳平、  
舘 邦典等の協力を得た。本書の編集は小林・吉田・日野がこれに当たった。本書の執筆分担は次に記  
す通りである。

第1章 小林、第2章 小林、第3章 小林・西川・日野 第4章 小林・和田・森井・舘 第5章 小  
林・日野・森井・舘 第6章 森井・舘 第7章 小林

4. 発掘調査の実施、遺物整理、報告書の作成にあたっては、大阪府教育委員会、交野市教育委員会、  
枚方市教育委員会、私部区自治会、交野グリーンマンション管理組合のほか、調査区周辺の土地所有  
者、地元住民のみなさまのご指導とご協力を賜った。
5. 本調査で出土した遺物、写真・図面類等調査資料、科学分析の成果は、財団法人大阪府文化財セン  
ターで保管している。



# 凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海水位（T.P.）からのプラス値である。
2. 本書で使用している座標は、世界測地系によって測量し、国土座標第Ⅵ座標系で示している。
3. 遺構実測図に付した方位はすべて座標北を示している。なお、座標北は磁北より東へ $6^{\circ} 40'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 11'$ 振れている。
4. 現地調査および遺物整理は『遺跡調査基本マニュアル〔暫定版〕』2003に準拠して行った。
5. 本書で使用した土壌色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2003年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は種類に関係なく検出順に付与し、種類の前に番号を表記した。ただし、複数の遺構からなるまとまりのある遺構は、遺構種類+同種遺構番号（例：掘立柱建物1）で表している。
7. 遺構番号については、各調査区ごとに整理し、遺物については、本報告に出現する順に通し番号を付した。

# 目 次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第2章 位置と環境	5
第3章 調査成果の概要	9
第1節 調査区の立地	9
第2節 第1調査区の成果	10
第3節 第2調査区の成果	10
第4節 第3調査区の成果	12
第5節 第4調査区の成果	13
第6節 第5調査区の成果	13
第7節 第6調査区の成果	14
第4章 縄文時代の土坑群の調査－第1調査区－	16
第1節 検出された遺構	16
第2節 縄文土器	24
第3節 弥生土器	29
第4節 縄文時代の石器	32
第5章 方形周溝墓の調査－第5調査区－	36
第1節 弥生時代の遺構	36
第2節 弥生土器	40
第3節 弥生時代の石器	43
第6章 上の山遺跡出土土器の胎土分析	44
第1節 蛍光X線分析	44
第2節 薄片観察分析	50
第3節 分析結果の検討	56
第7章 まとめ	67

# 挿 図 目 次

図1 調査地点位置図	1
図2 調査区の位置図	2
図3 地区割図	3
図4 上の山遺跡周辺の地形分類図	6

図5	周辺遺跡分布図	7
図6	調査区の地形環境	9
図7	第1・第2調査区平面図	11
図8	第3調査区平面図	12
図9	第4調査区平面図	13
図10	第5調査区断面模式図	13
図11	第5調査区平面図	14
図12	第6調査区平面図	15
図13	縄文時代土坑群平面図	17・18
図14	縄文時代埋甕遺構実測図	19
図15	縄文時代土坑実測図（1）	20
図16	縄文時代土坑実測図（2）	21
図17	段丘崖縁辺で検出された土坑群実測図	22
図18	縄文時代土坑群復元図	22
図19	74溝遺物出土状況実測図	23
図20	竪穴住居1実測図	23
図21	第1調査区出土の縄文土器（1）	24
図22	第1調査区出土の縄文土器（2）	25
図23	第1調査区出土の縄文土器（3）	29
図24	第1調査区出土の弥生土器（1）	30
図25	第1調査区出土の弥生土器（2）	31
図26	第1調査区出土の石器	33
図27	方形周溝墓1実測図	37
図28	方形周溝墓群実測図	38
図29	4溝土器出土状況実測図	38
図30	7土坑土器出土状況実測図	39
図31	第5調査区出土の弥生土器（1）	41
図32	第5調査区出土の弥生土器（2）	42
図33	第5調査区出土の石器	43

## 表 目 次

表1	第1調査区出土の縄文土器観察表（1）	27
表2	第1調査区出土の縄文土器観察表（2）	28
表3	第1調査区出土の弥生土器観察表	32
表4	第5調査区出土の弥生土器観察表	42
表5	蛍光X線分析試料一覧	45

表 6	蛍光X線分析結果（化学組成）	47
表 7	胎土分析試料一覧	49
表 8	薄片観察結果（1）	52
表 9	薄片観察結果（2）	53
表10	薄片観察結果（3）	54
表11	粒度平均化分布	57
表12	鉍物構成比（1）	58
表13	鉍物構成比（2）	59
表14	主要元素比率（1）	61
表15	主要元素比率（2）	62

## 図 版 目 次

巻頭図版	第 5 調査区	方形周溝墓 1（北から）
図版 1 遺構	第 1 調査区	北部全景（縄文時代土坑群）（垂直）
図版 2 遺構	1. 第 1 調査区	縄文土坑群全景（左：南から）（右：北東から）
	2. 第 1 調査区	からみた上の山遺跡の全景（左：南方を望む）（右：北方を望む）
図版 3 遺構	1. 第 1 調査区	縄文時代土坑群（南東から）
	2. 第 1 調査区	縄文時代土坑群（北から）
図版 4 遺構	1. 第 1 調査区	縄文時代土坑群と竪穴住居 1（東から）
	2. 第 1 調査区	縄文時代土坑群（東から）
図版 5 遺構	1. 第 1 調査区	縄文時代土坑群・41土坑周辺（西から）
	2. 第 1 調査区	縄文時代土坑群・41土坑周辺（北西から）
図版 6 遺構	1. 第 1 調査区	縄文時代土坑群・111土坑周辺（南東から）
	2. 第 1 調査区	78土坑周辺（南東から）
図版 7 遺構	1. 第 1 調査区	段丘縁辺で検出された縄文時代土坑（西から）
	2. 第 1 調査区	段丘縁辺で検出された縄文時代土坑（北西から）
図版 8 遺構	1. 第 1 調査区	43土坑・63土坑（埋甕遺構）（西から）
	2. 第 1 調査区	22土坑（南から）
図版 9 遺構	1. 第 1 調査区	172土坑（東から）
	2. 第 1 調査区	23土坑（左上）、43土坑（右上）、44土坑（左下）、53土坑（右下）
図版10 遺構	1. 第 1 調査区	41土坑（埋甕遺構）（西から）
	2. 第 1 調査区	竪穴住居 1（北から）
図版11 遺構	1. 第 1 調査区	74溝土器出土状況（南西から）
	2. 第 1 調査区	170溝（東から）
図版12 遺構	1. 第 5 調査区	方形周溝墓 1 全景（東から）
	2. 第 5 調査区	方形周溝墓 1 全景（垂直）

- 図版13 遺構 1. 第5調査区 方形周溝墓1全景（北西から）  
2. 第5調査区 方形周溝墓1全景（南西から）
- 図版14 遺構 第5調査区 方形周溝墓1 周溝（1溝）断面
- 図版15 遺構 1. 第5調査区 方形周溝墓群全景（北西から）  
2. 第5調査区 方形周溝墓群・5溝周辺（北から）
- 図版16 遺構 1. 第5調査区 方形周溝墓群・4溝周辺（北西から）  
2. 第5調査区 方形周溝墓群・4溝土器出土状況（南東から）
- 図版17 遺構 1. 第5調査区 調査区北部全景（南から）  
2. 第5調査区 7土坑土器出土状況（北から）
- 図版18 遺物 第1調査区出土 縄文土器
- 図版19 遺物 1. 第1調査区出土 縄文土器  
2. 第1調査区出土 縄文土器
- 図版20 遺物 1. 第1調査区出土 弥生土器  
2. 第1調査区出土 弥生土器
- 図版21 遺物 1. 第1調査区出土 石器（表面）  
2. 第1調査区出土 石器（裏面）
- 図版22 遺物 第5調査区出土 弥生土器
- 図版23 遺物 1. 第5調査区出土 弥生土器  
2. 第5調査区出土 石器

# 第1章 調査に至る経緯と調査方法

本調査は、大阪府枚方土木事務所が実施している一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る発掘調査である。調査地は交野市私部西4丁目地先に所在している。

上の山遺跡は、財団法人大阪府文化財センターが、平成12年度に国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所・西日本高速道路株式会社関西支社枚方土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内において茄子作遺跡確認調査を実施した際に、新規に発見した遺跡である。その後、当センターが平成15・16年度に実施した第二京阪道路建設に伴う発掘調査（上の山遺跡03-1、『上の山遺跡Ⅱ』として報告）では、旧石器時代から中世にいたる各時代の様々な遺構と遺物を検出している。

第二京阪道路建設予定地と同一の段丘上に延びる当該事業予定地のうち今回発掘調査を実施した範囲の試掘調査を大阪府教育委員会文化財保護課が実施し、この地区にも遺跡の範囲が及んでいることが確認された。この結果にもとづき大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、当センターが大阪府枚方土木事務所の委託を受け、平成17・18・19年度に発掘調査を実施し、引き続いて整理作業と報告書作成を行った。

本調査の調査名は、上の山遺跡05-1・05-2・06-1・07-1とし、地区割りは、財団法人大阪府文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル〔暫定版〕』2003に基づき、世界測地系によって測量した国土座標第Ⅵ座標系を基準として遺物の取り上げや遺構実測図の作成を行った。地区割りは図3の通りである。

発掘調査は盛土と近代耕作土層を機械で除去し、その後、人力による掘削を行った。また調査最終段



図1 調査地点位置図

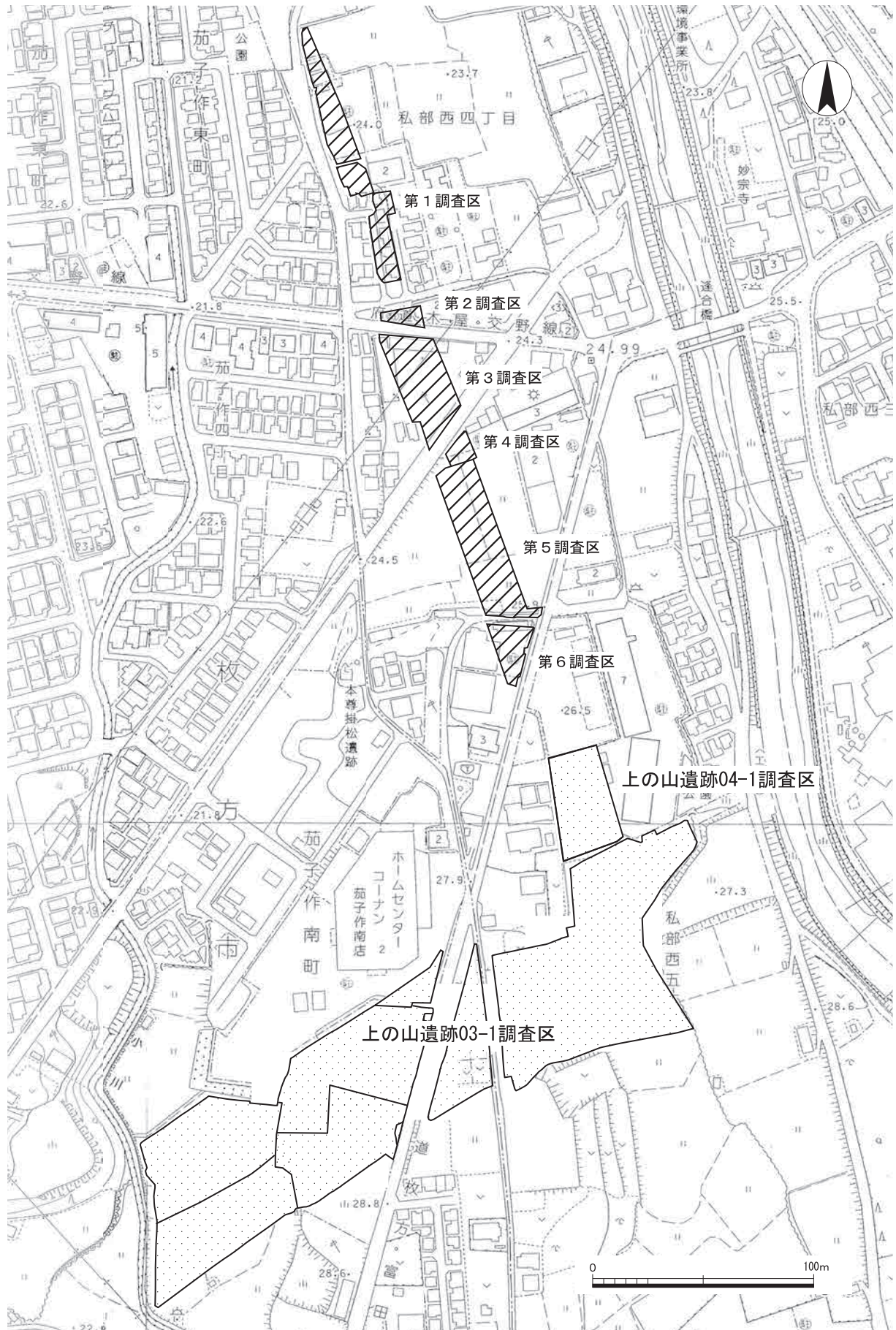
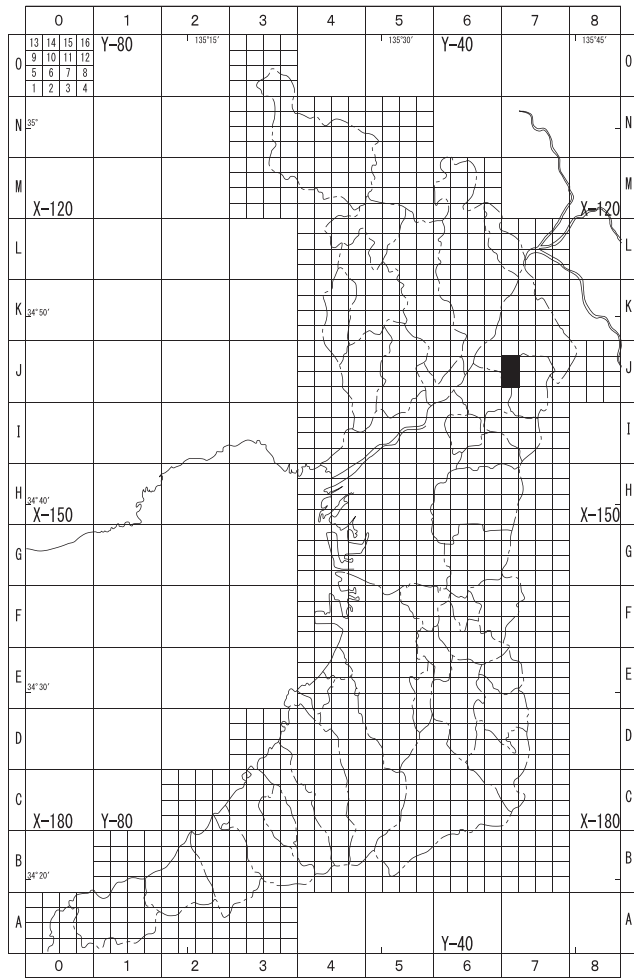
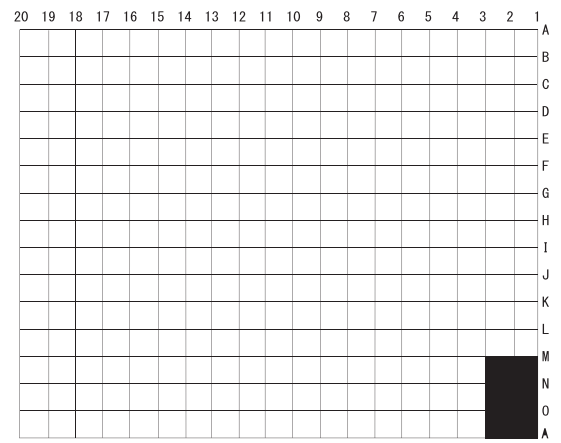


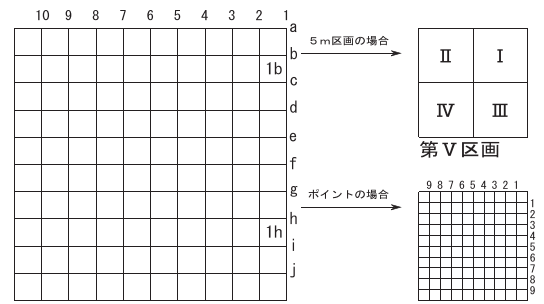
図2 調査区の位置図



第 I ・ II 区画



第 III 区画



第 IV 区画 区画名→右上（北東）隣のポイント

第 VI 区画

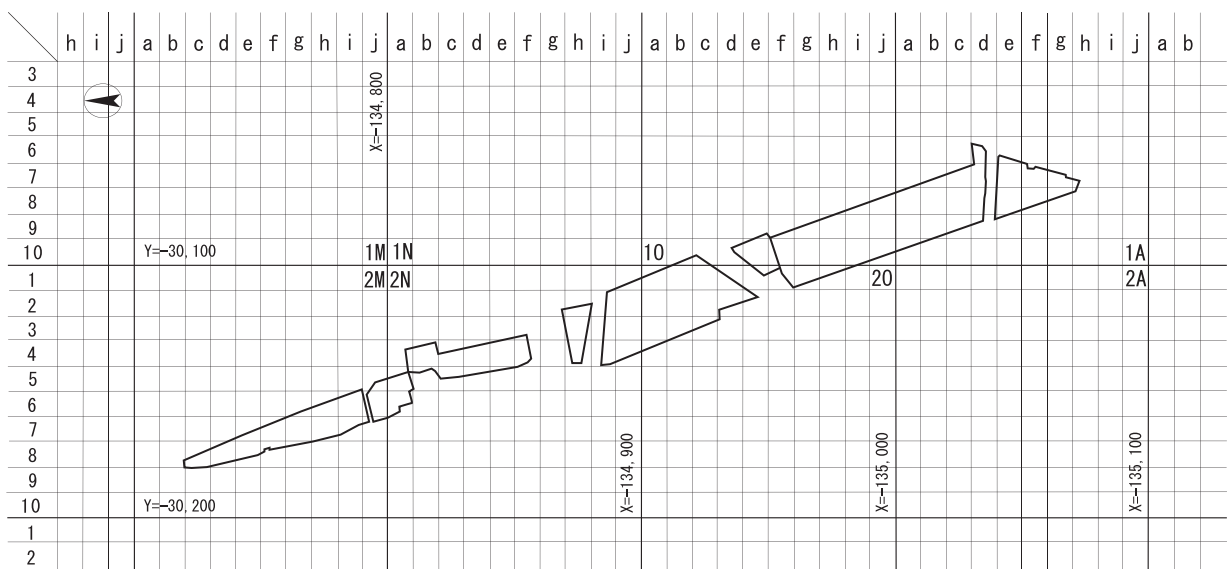


図 3 地区割図



階において、下層遺構確認のためトレンチを設定して掘り下げた。平面測量についてはトラッククレーンによる空中写真測量を1回実施し、縮尺が1/50・1/100の平面図を作成した。また、方形周溝墓、土坑などの個別の遺構平面図および断面図については1/10・1/20の図面を随時作成した。

また、当該の調査においては、調査時期と調査場所が錯綜しており、それによる混乱を防ぐため、北側の調査地点から南側に向かって報告することとした。それによって05-1を第5調査区、05-2を第1調査区、06-1を第2調査区、07-1を第3・第4・第6調査区とする。

## 第2章 位置と環境

上の山遺跡やその周辺においては、第二京阪道路建設予定地とそれに関連する確認調査・発掘調査を本センターにおいて1997年度から継続して実施しており、その成果はすでに『上の山遺跡Ⅰ』（2005年）、『上の山遺跡Ⅱ』（2006年）、『茄子作遺跡』（2007年）などとして発掘調査報告書を刊行している。上の山遺跡一帯の地形的・歴史的環境については、各報告書の「位置と環境」の章に克明に記されている。詳細はそれらを参照いただきたい。ここでは上の山遺跡の地形的・歴史的環境について、今回の調査成果と関連する点について整理する。

**地形環境** 上の山遺跡は大阪府の東北部、北河内地域に位置する交野市に所在し、磐船峡谷から淀川に向かって枚方丘陵の東端部を北西方向に流れる天野川の左岸に形成された段丘上に展開する。

天野川左岸の地形を微細にみると、遺跡の東側を限る天野川の自然堤防や氾濫原から、段丘崖によって画された低位段丘、中位段丘が展開し、段丘を侵食した開析谷・氾濫原が樹枝状にひろがる。このような地形環境の中に上の山遺跡は存在する。上の山遺跡は、中位段丘が独立丘陵状となる部分を中心にしてその周辺に形成された天野川を臨む低位段丘上に広がっている。

第二京阪道路予定地にかかる発掘調査は、天野川左岸の低位・中位段丘を東西に横断するように実施された（03-1調査区、『上の山遺跡Ⅱ』）。今回の調査区は、第二京阪道路予定地に直交し、低位段丘を南北に縦断するように設定されている。

**土坑群の時代（縄文時代）** 上の山遺跡における既往の調査において、旧石器時代と縄文時代の遺物、弥生時代から中世にいたる遺構・遺物が検出されており、この地において連綿と人々の生活が営まれたことを示している。

上の山遺跡の推定範囲の北部に位置する今回の調査区では、縄文時代後期を中心とする埋甕・土坑群と、弥生時代中期はじめ頃の大型方形周溝墓が検出され、上の山遺跡像を豊かなものにすることができた。

上の山遺跡が所在する交野市域には縄文時代早期の標識土器として著名な神宮寺式土器が出土した神宮寺遺跡が所在するが、市内西部に位置する天野川流域において、これまで縄文時代の顕著な遺跡は確認されていなかった。当センターが実施した枚方市茄子作遺跡の発掘調査などでは、遺構の検出はみられなかったが、縄文時代早期から晩期（滋賀里Ⅲ式）の土器片が出土している。早期はいわゆる繊維土器がみられ、中期は船元式の土器片、後期に比定される鉢片、晩期は滋賀里Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ式の土器が出土している。

上の山遺跡では、中位段丘の西側を走る開析谷内において縄文時代後期から晩期の土器（滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式）が面的な広がりをもって出土している。また低位段丘上においては縄文時代の落とし穴と考えられる土坑を検出した。このような縄文時代の遺構・遺物の検出状況の中で、第1調査区の調査成果を考えなければならない。

**方形周溝墓の時代（弥生時代）** 天野川流域における弥生文化の展開は、交野市私部南遺跡における第二京阪道路の予定地で弥生時代前期の竪穴住居が検出され、弥生時代のごく早い段階に弥生文化の受容が行われていたことが確認された（『私部南遺跡Ⅰ』2007年）。天野川周辺の枚方丘陵上には、弥生時代

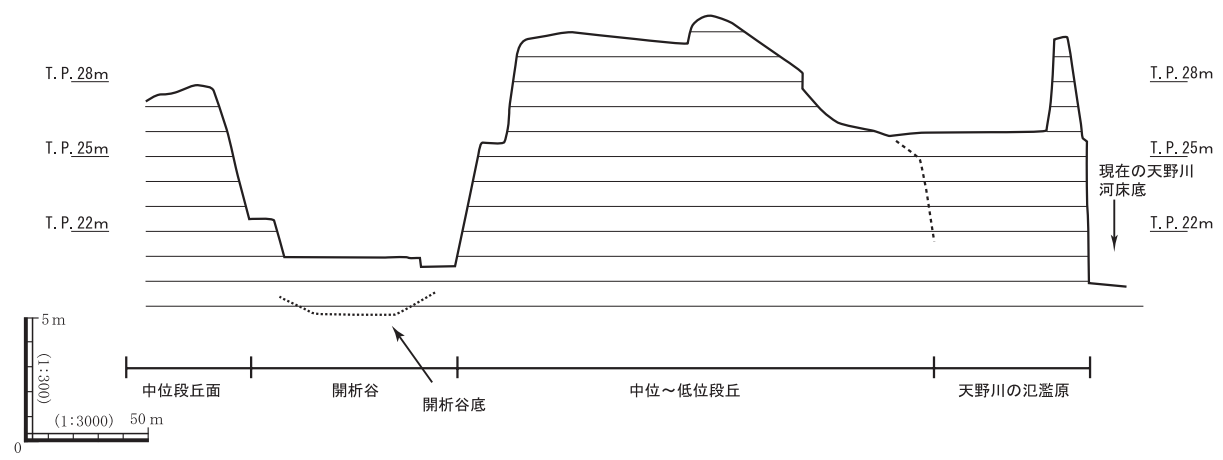
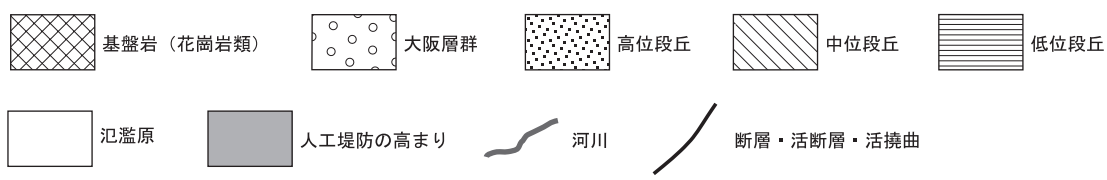
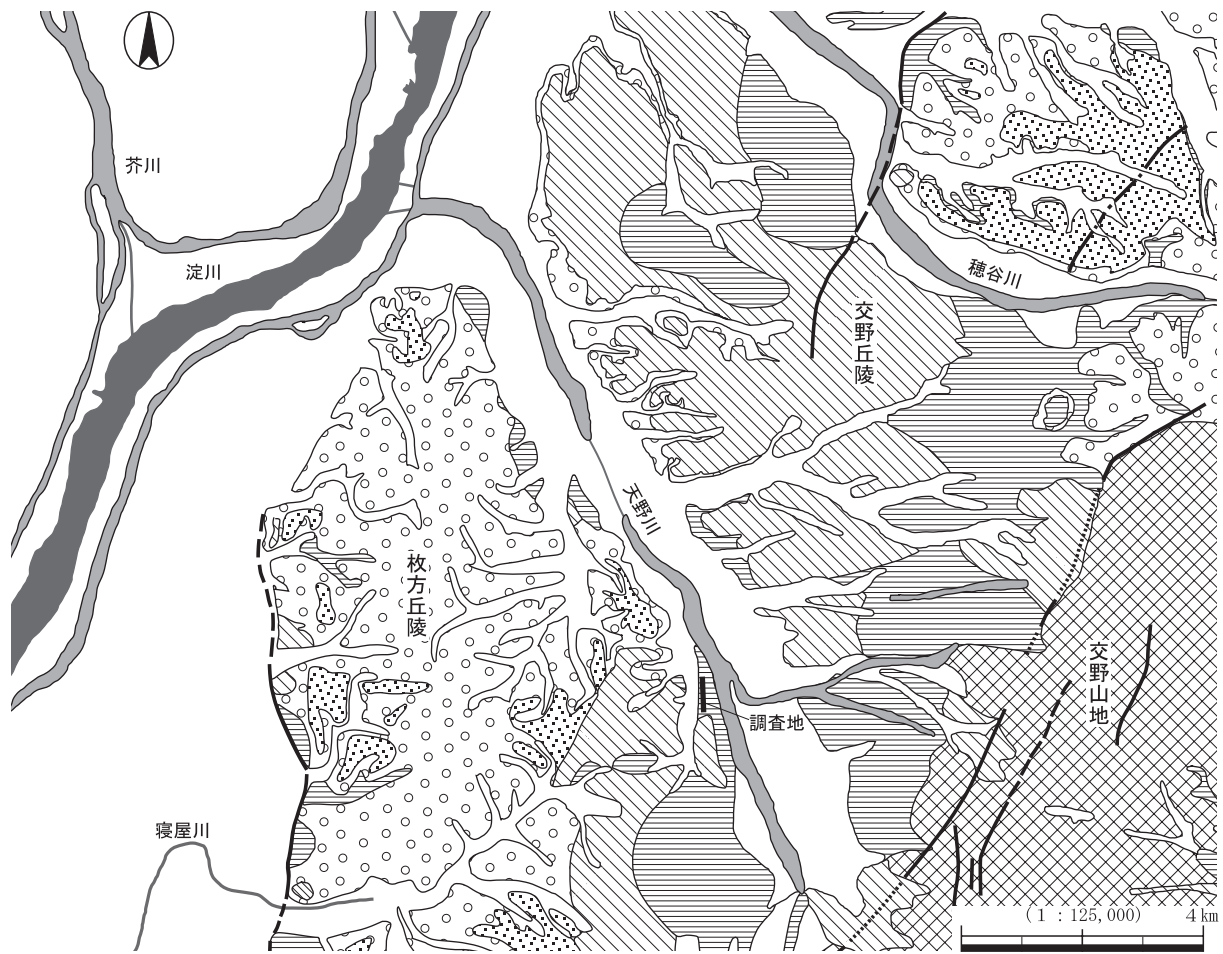


図4 上の山遺跡周辺の地形分類図



- |             |             |           |           |            |            |            |
|-------------|-------------|-----------|-----------|------------|------------|------------|
| 1 上の山遺跡     | 10 春日環濠集落遺跡 | 19 禁野車塚古墳 | 28 郡津梅塚   | 37 上私部遺跡   | 46 森古墳群    | 55 中山観音寺遺跡 |
| 2 山田池窯跡群    | 11 禁野本町遺跡   | 20 星丘遺跡   | 29 庵長宝寺   | 38 神宮寺遺跡   | 47 岡東遺跡    | 56 茄子作遺跡   |
| 3 出屋敷遺跡     | 12 白雉塚古墳    | 21 村野遺跡   | 30 私部城遺跡  | 39 今井遺跡    | 48 田宮遺跡    | 57 平池遺跡    |
| 4 甲斐田新町遺跡   | 13 禁野上野古墳   | 22 村野南遺跡  | 31 私部城跡   | 40 交野東車塚古墳 | 49 山之上天堂遺跡 | 58 大將軍塚古墳  |
| 5 出屋敷西遺跡    | 14 中宮ドンバ遺跡  | 23 郡津渋り遺跡 | 32 でがしろ遺跡 | 41 車塚古墳群   | 50 山之上遺跡   | 59 茄子作下浦遺跡 |
| 6 中宮・池之宮古墳群 | 15 百濟寺遺跡    | 24 ハセデ遺跡  | 33 私部南遺跡  | 42 寺村遺跡    | 51 藤田町遺跡   | 60 東香里南遺跡  |
| 7 野遺跡       | 16 百濟寺跡     | 25 交野郡衙跡  | 34 倉治遺跡   | 43 大畑古墳    | 52 藤田山遺跡   | 61 寝屋東遺跡   |
| 8 春日北野遺跡    | 17 中宮尼寺田遺跡  | 26 郡津大塚   | 35 焼垣内遺跡  | 44 須弥寺遺跡   | 53 藤田山古墳   | 62 坊領遺跡    |
| 9 春日北川遺跡    | 18 星丘西遺跡    | 27 郡津丸山古墳 | 36 有池遺跡   | 45 森遺跡     | 54 藤田土井山遺跡 | 63 東高野街道   |

図5 周辺遺跡分布図

中期以降の遺跡が群をなして分布している。枚方市星丘西遺跡は、弥生時代中期から後期に比定される竪穴住居群、方形周溝墓群、円形周溝墓、土器棺墓群、3条の大溝などが検出されている。また上の山遺跡から約1.5km北に所在する枚方市藤田山遺跡では弥生時代中期から後期にかけての30棟以上の竪穴住居や「V」字状に掘られた溝などが検出されている。一方上の山遺跡に西隣する茄子作遺跡でも、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居、方形周溝墓、土坑墓群が検出されている。

さらに上の山遺跡における03-1調査区をはじめとするこれまでの発掘調査では、弥生時代中期の竪穴住居跡などのほか独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡が検出され、この遺跡の性格が注目されてきた。

このような弥生時代の歴史的環境の中で今回検出された方形周溝墓の意味を総括したい。

### 第3章 調査成果の概要

#### 第1節 調査区の立地

今回の第1から第6までの調査区は、天野川が形成した段丘上に南北に連続している。第二京阪道路予定地が段丘を横断したのに対して、今回の調査区は遺跡の推定範囲を縦断するように設定されたためである。上の山遺跡が展開する低位段丘・中位段丘は、東側を天野川の川道とその氾濫原、西側を深い開析谷に挟まれている。西側の開析谷はすでに埋め立てられて宅地などになっているが、1961年に測量された大阪府発行の3000分の1地形図をみると、一帯は耕作地であり、土地の起伏もよく読み取ることができる。

第1調査区の西側に接して走る市道は近代以前の東高野街道に比定されているが、1961年の時点では段丘の縁を走っている。第1調査区付近では段丘面上と開析谷の底部とは3m前後の比高をもっており、埋め立てられる以前には、東高野街道は谷底の耕作地を望みながら段丘崖にそって設定されていたと想定される。第1調査区では縄文時代の遺構などが検出されたが、ここは天野川と開析谷の間の平坦な空間であり、いつの時代においても生活に適した環境を保持できる場所である。

第1調査区の南部は、開析谷が大きく東に入り込み、調査区の大部分が開析谷の中に入る。第2調査区も同様な立地で、段丘崖の一部を検出した。

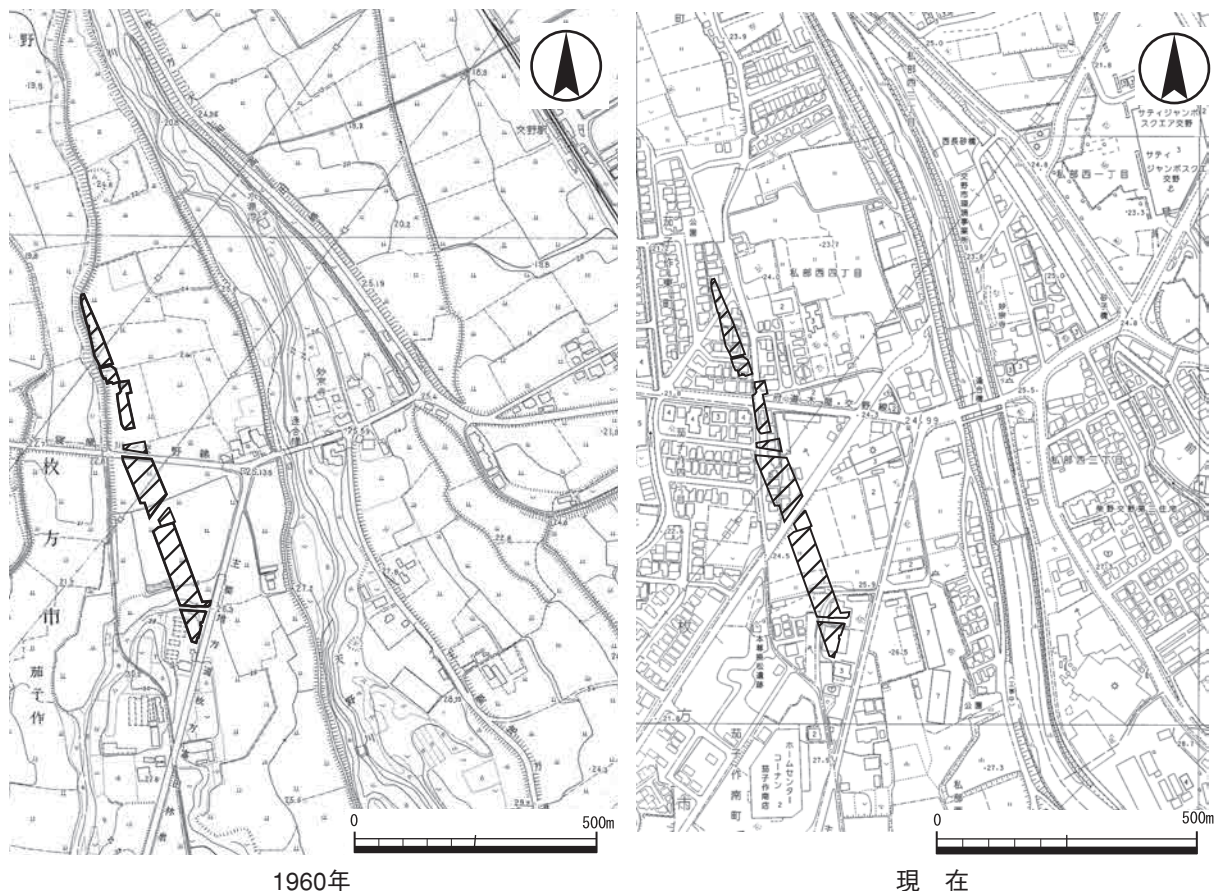


図6 調査区の地形環境

第3調査区では段丘崖は検出されなかったが、その近隣にあたる。弥生時代の遺構が検出された第4・第5調査区は段丘面上に広がるが、第5調査区の南部と第6調査区は中位段丘の段丘崖の直下に当る部分であり、湧水も多く、近世以降に耕地化することが確認できた。

今回の各調査区で検出された遺構・遺物の時期や性格は、微細な地形の差異に規定されていることは明らかである。

## 第2節 第1調査区の成果

低位段丘の縁辺部に当る。調査面積は1240㎡。調査区北部は段丘面上の縁辺にあたり、ここに形成された縄文時代を主とする遺構が検出された。調査区の中央部では多数の縄文時代の土坑や埋甕遺構など、最北部では弥生土器が出土した溝、また弥生時代後期以降のものと推定される竪穴住居なども検出された（詳細は第4章参照）。

これらの遺構が検出された段丘面上は、現耕作土などを除去すると直ちに地山である黄褐色系の粘土～シルト質土があらわれる。遺物を包含した土層はまったく認められなかった。これは周辺地を耕作地化するに際して、上部を削平して搬出し盛土として活用した結果であると推測される。

調査区南部は、段丘崖が東に入りこむため、基本的に開析谷の中に当る。開析谷の底部と段丘縁辺の地山面との比高は3mを越えており、この地区では急峻な段丘崖によって段丘面と開析谷が画されていた。

170溝 調査区北部では段丘崖に直交する幅5.0m前後、深さ2.5m前後を測る、断面形状が「U」字形の大規模な溝を検出した。底部にはわずかに砂層の堆積がみられ水が流れていたと考えられるが、恒常的な流量は小さい。この溝は両側から交互に5回ほどに分けて大量の土砂によって埋め戻されたと推測される。最下層から近世の所産と推定される陶磁器片が出土しており、この溝の掘削時期を示唆している。

この地点に、このような大規模な溝が掘削された意味については判断が難しい。この一帯は、段丘面上の南北に細長い平坦面であり、東側の天野川が形成した氾濫原と画する段丘崖まで、段丘面の幅は150m前後を測る。この溝の方向と形状から推測して、段丘面を断割って横断していた可能性が想定される。大阪府発行の3000分の1地形図（1961年に測量）によると天野川の河床は標高20m前後であり、西側の開析谷の底面もほぼ同じ標高をもつ。天野川から西側の開析谷に導水するための施設である可能性も否定できないが、溝の全体像が明確ではないので断定することは避けたい。ここに大規模な溝が造営されていたことを記録としてとどめる。

## 第3節 第2調査区の成果

段丘の縁辺部と開析谷に向かう段丘崖の斜面に当る。調査面積は165㎡。段丘の縁辺部は調査区北西部で検出され北東から南西方向に走る。第1調査区で検出された段丘崖の延長である。

段丘面上に当る調査区の大部分は後世に大きく削平を受け遺構は遺存しておらず、地山（橙色7.5YR6/8シルト質土）面の上には二次堆積層である褐色の砂質土（明褐色7.5YR5/6砂質土）と盛土が存在したのみである。

段丘崖斜面は緩やかに北西方向に傾斜し、調査区内の最深部は現地表面から約1.0m、段丘面からは

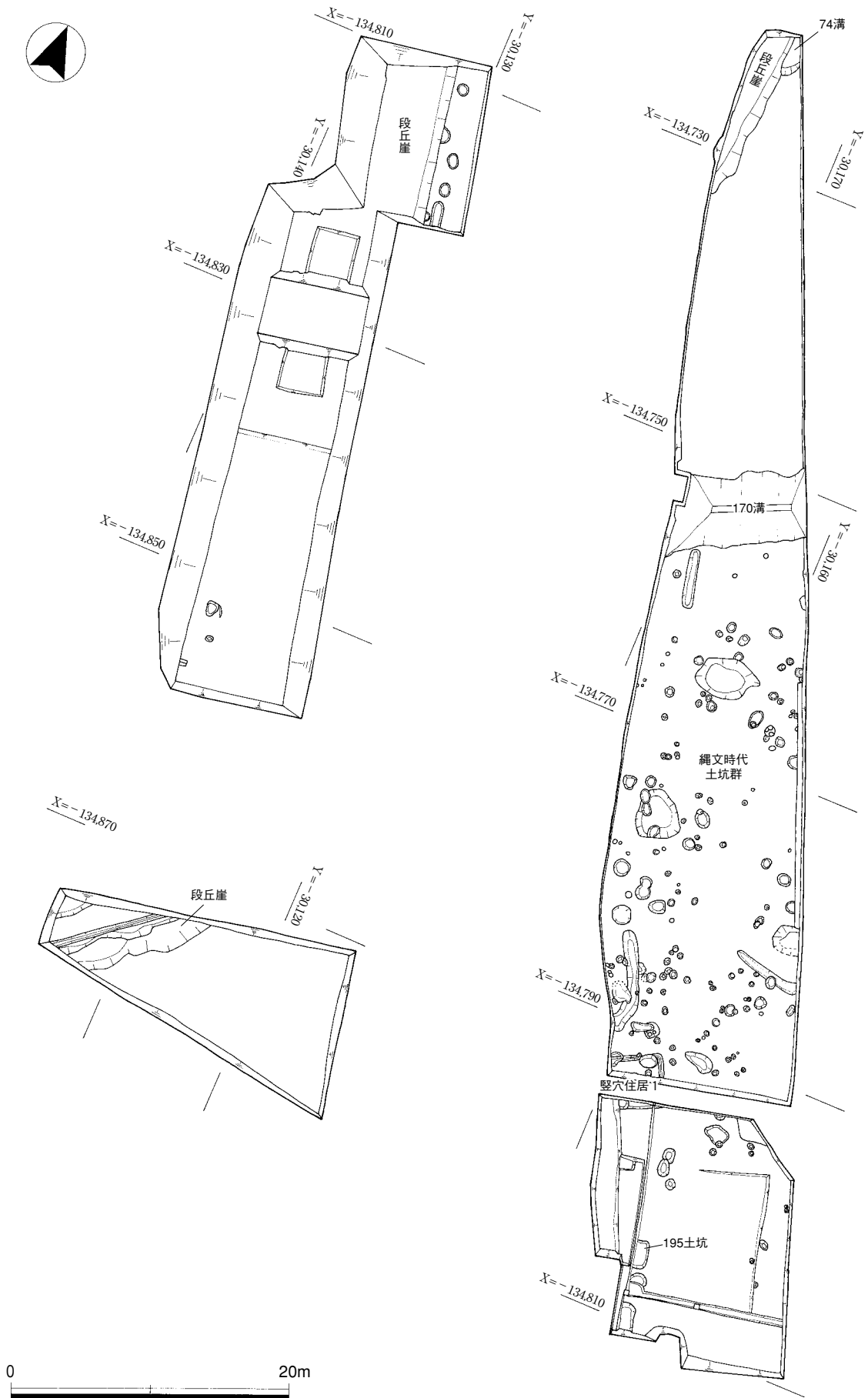


図7 第1・第2調査区平面図





図8 第3調査区平面図

約0.9mの深さをもつのみで、段丘崖の裾部は調査区外に存在すると考えられる。段丘崖は大きく3層に区分される褐色系の砂質土（上層より褐色7.5YR4/6礫混細砂質土、明黄褐色10YR6/6細砂質土、褐色10YR4/6細砂質土）によって埋められている。傾斜面の途中にはテラス状の平坦面や段丘崖の方向と平行して走る幅0.3～0.4mの溝などが検出された。溝は開析谷を埋め戻す過程において排水の目的で一時的に設置したものと考えられる。

開析谷を埋めた土層の状況が第1調査区南部で検出した開析谷埋土の状況とよく類似しており、ここを埋めて造成したのはいずれも近代以降のことと考えられる。

#### 第4節 第3調査区の結果

第3調査区は約1200㎡である。調査は現代の盛土、深さ約0.2mを機械で除去し、旧耕土を確認した。この耕土を除去する過程で、わずかに残る床土（遺物包含層）を部分的に検出した。旧耕土とあわせ、0.2mの厚みだった。耕土・床土を除去し、地山面に遺構検出をした。

地山上面は耕作とその後の建物基礎などで削平されており、安山岩のばいらんを大量に含むやわらかい赤褐色土が露出した。地山深層部分と考える。

調査区は方形の本体部と南側の三角形を呈する付属部分からなるが、本体部では北端に東西溝2条、東端に斜行溝1条と土坑6基を確認した。15溝・16溝は耕作に伴うものらしく、現道路に並行する。灰白色砂で埋まる。耕作の時期は明確でなく、遺物は出土しなかった。東端の溝、土坑は茶褐色粘土に覆われる。遺物は含まれず、性格はわからない。

付属部の遺構は直径0.2m程度の土坑3基と焼土を含む不定形な土坑1基などである。遺物は発見されていない。時期や性格は不明である。包含層中からは近世の陶磁器が少量発見され、耕作は近世か、それ以前に遡ると考える。遺構面の大半は地山が削平されていた。

## 第5節 第4調査区の成果

第4調査区は約100㎡である。調査は現代の盛り土、深さ約0.8mを機械で除去し、旧耕土を確認した。この耕土を除去する過程で、薄い床土（遺物包含層）を部分的に検出した。旧耕土とあわせ、0.1mの厚みがあった。耕土・床土を除去し、地山面に遺構検出した。北隅の一部は整地土層に覆われ、西端の一部は地山面が削平され、水田段差となっていた。

第4調査区では不定形の溝・土坑が検出されている。遺構は埋め土の違いで二種類に分けられる。まず、暗茶赤褐色土に覆われる遺構に22土坑・18溝・19溝・23土坑・24土坑・34土坑がある。18溝・19溝は17年度調査区の北端で確認された溝の延長である。周溝墓の一部かもしれない。遺物は弥生土器片3点のみである。他の土坑・溝は上層耕作土や床土

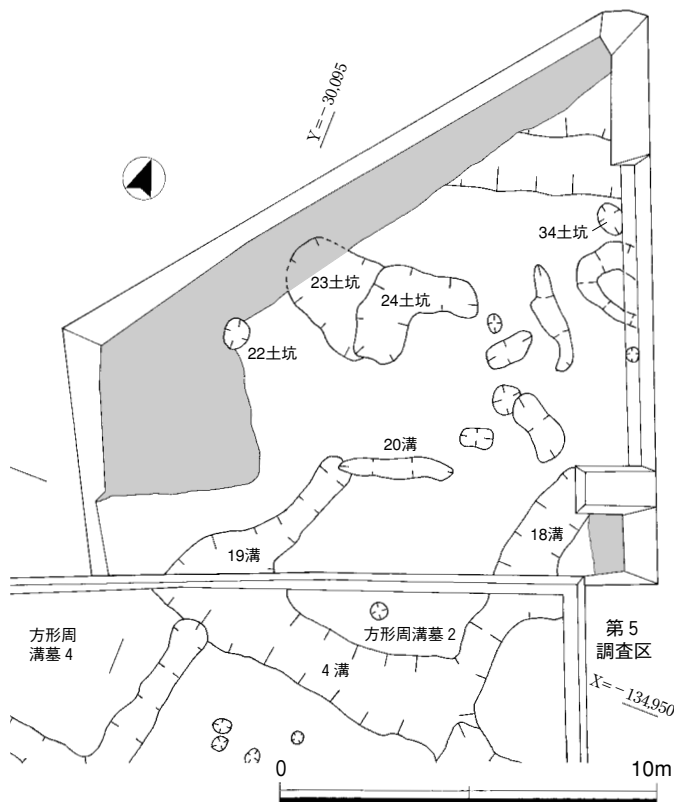


図9 第4調査区平面図

をふくみ、耕作時の踏み込みや土地の起伏に関するものとする。遺構中から遺物は発見されていない。

包含層中からは4点の弥生土器片と近世の陶磁器片が1点発見され、耕作は近世か、それ以前に遡ると考える。ただし、この地も遺構面表層は削平されていた。

## 第6節 第5調査区の成果

低位段丘面上に立地し、調査区北部を中心に方形周溝墓をはじめとする弥生時代の遺構を検出した。調査区南部は南側に広がる中位段丘の段丘崖の下に存在した湿地部に当る。ここを近世以降に耕作地として活用している。調査区の面積は1998㎡。

調査区北部は後世に大きく削平を受け、現耕作土直下がすでに地山面である黄褐色系の粘土～シルト質土である。検出された遺構は、大型の方形周溝墓1基、その北側で確認された溝群から6基前後の小

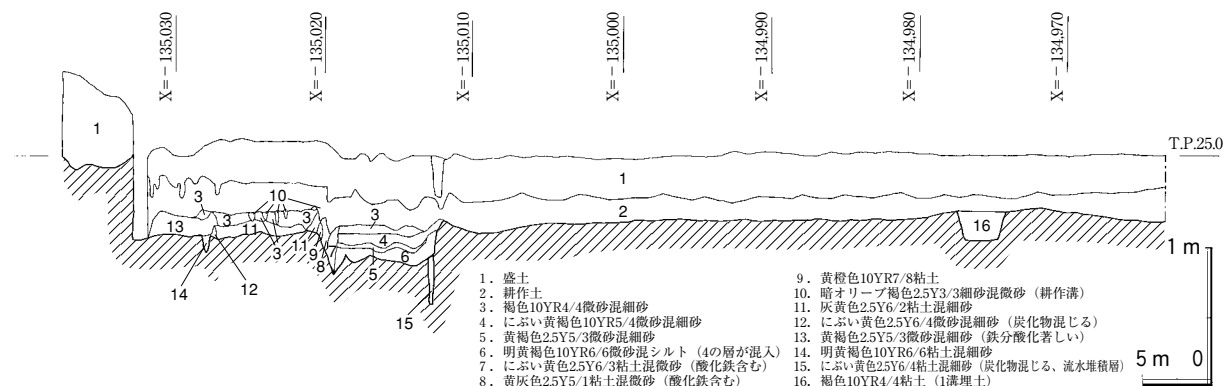


図10 第5調査区断面模式図

型の方形周溝墓が復元できる可能性がある。このほか溝、土坑、ピットなどが検出された。遺物は、弥生土器と石器の出土をみた。弥生土器は弥生時代第Ⅱ期に相当し、中期はじめのものである（詳細は第5章参照）。

調査区南部は、北部に比較してやや地山面の標高も低く、湧水が多くみられる湿潤な場所である。ここに何度かの客土を施し耕作地として活用している。客土のたびに耕作面が上昇し乾燥した耕作地の造成を目指したものと思われる。出土遺物から判断して近世以降に開発されたものと推測される。地山面上では幅0.2～0.3mを測る東西・南北方向に走る畦畔や灌漑のための素掘り井戸2基などが検出された。

### 第7節 第6調査区の成果

第6調査区は約450㎡である。掘削は現代の盛土、深さ約1.5mを機械で除去し、旧耕土を確認した。

この耕土を除去する過程で、薄い床土（遺物包含層）を検出した。旧耕土とあわせ、0.3mの厚みだった。

耕土・床土を除去し、地山面に遺構を検出をした。

遺構面は地山上の一面だけで、中世以降の南北溝1条と水田耕作の痕跡が確認された。水田開発の時期は明確でなく、南北溝・水田の埋没時期は近代以降に降る。水田は地山を削平して耕地化したらしく、地山の表層堆積物は失われていると考える。したがって、この地の中世以前の遺構も削平されたようだ。

発見された遺物は須恵器・土師器小

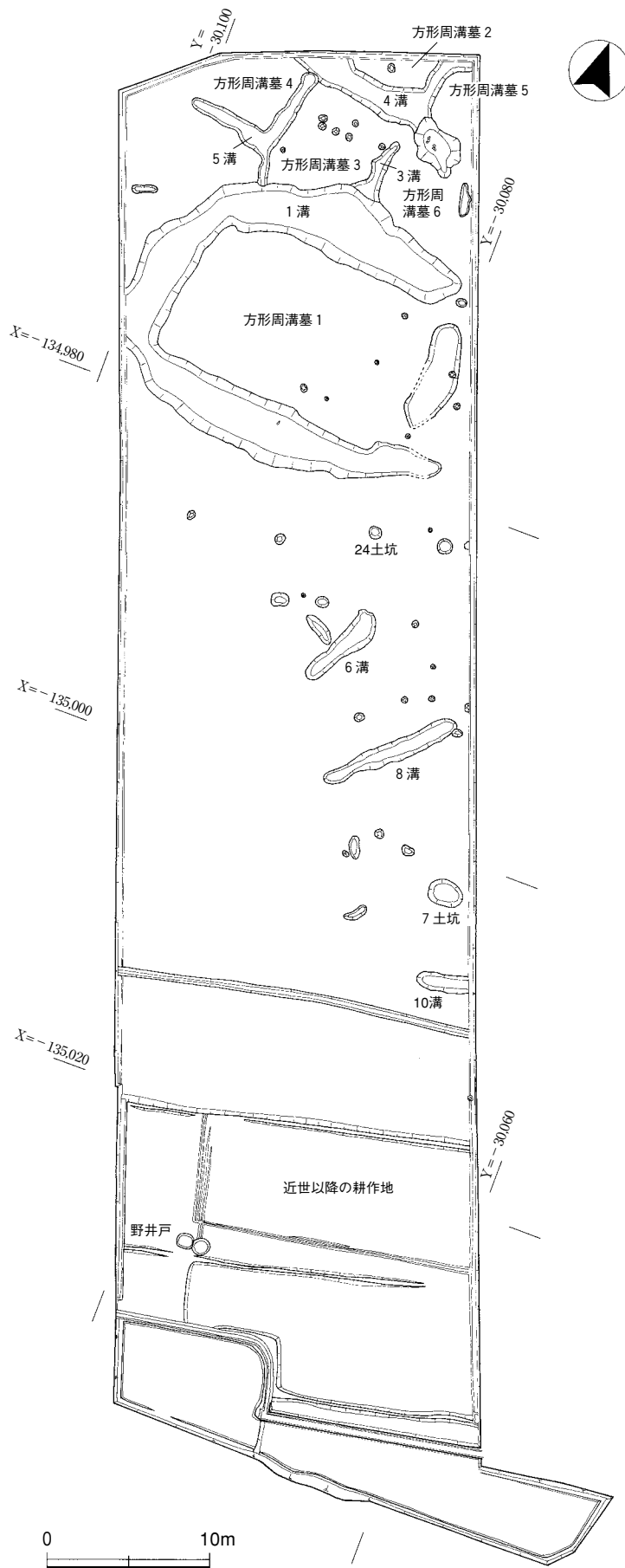


図11 第5調査区平面図

片と近代の陶磁器少量である。土器片は水田耕土に混入していたもので、近代の陶磁器は水田の廃絶時期をうかがうものである。

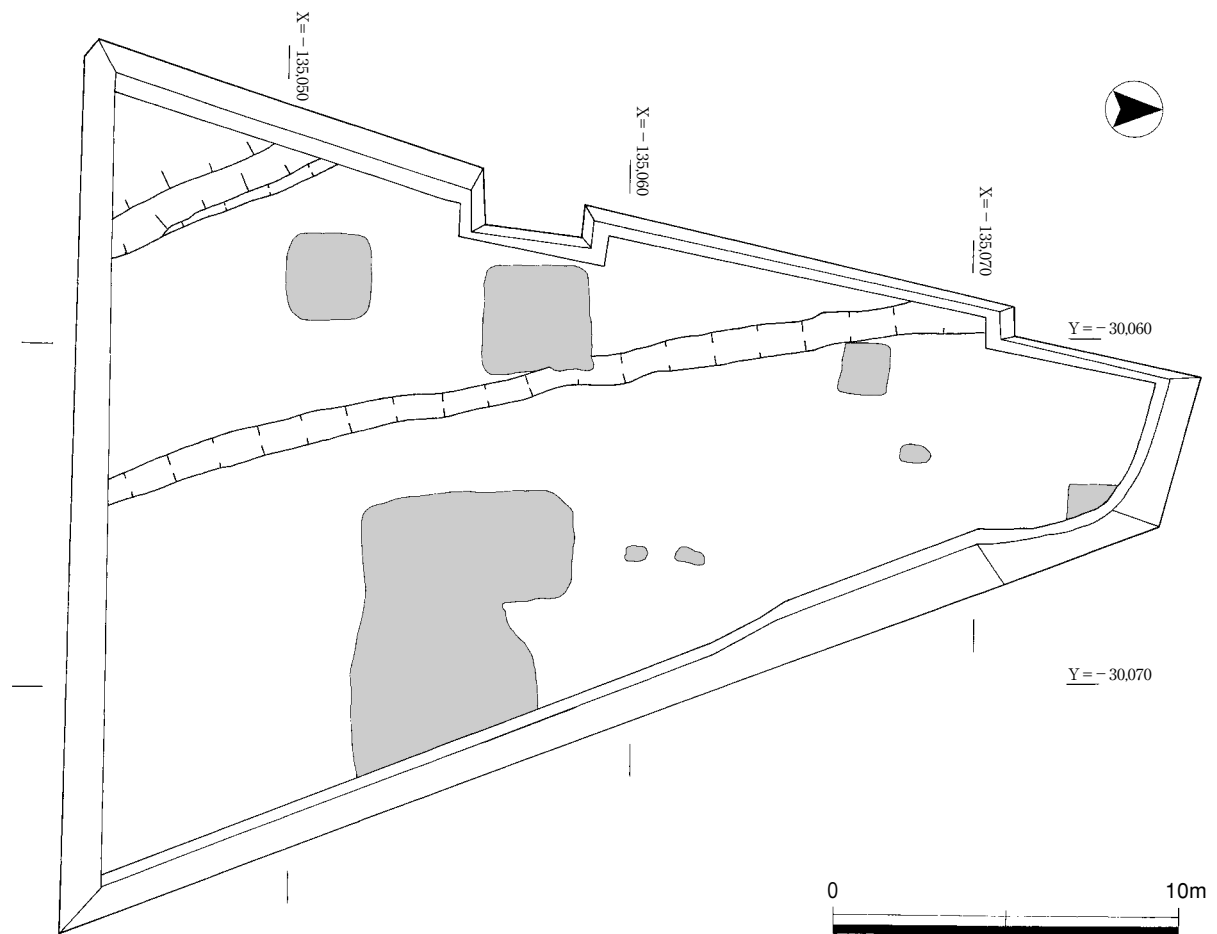


図12 第6調査区平面図

## 第4章 縄文時代の土坑群の調査－第1調査区－

### 第1節 検出された遺構

#### (1) 縄文時代の土坑群

第1調査区からは約200基を数える土坑・ピットなどをはじめとして溝や竪穴住居などが検出された。これらの遺構は、縄文時代を中心とし、いくつかは弥生時代とそれ以降に帰属するものである。

**埋甕遺構** 明確に縄文土器が据わった状態で3基の埋甕遺構が検出された。

63土坑は、縄文時代後期に比定される深鉢を北方向にやや傾けて据えている。その掘り方である円形の土坑は直径約0.39m、遺存している深さ約0.25mを測る。ほぼ土器の形状に合わせて掘削したものであり、土坑の底部と土器の間の埋土は、地山に類似した褐色系の粘質土である。

41土坑は、直径約0.75m、深さ約0.38mを測る円形土坑の中に北白川C式に比定される深鉢を西方向にやや傾斜させて据えていた。この土坑の内部からは、西部（直径約0.30m）と西北部（直径約0.33m）に一部重複した柱痕と推定されるピット（後述）が検出され、これを避けるように土器が配置されている。

50土坑は、直径約0.35m、遺存した深さ約0.10mを測る円形の中央から深鉢の底部が検出された。土器は北方向にやや傾斜させて据えられていた。土坑の埋土は、地山に類似した褐色系の粘質土である。

**土坑の形状** 第1調査区で検出された200基を数える縄文時代に帰属すると推定される土坑には、土坑内の堆積土が一層のみのものと、中央に円柱状を呈し周囲の土に比べて“黒っぽい”色調の土層が観察されるものが存在した。後者のものは掘立柱建物の柱穴にみられる柱の痕跡の形状によく類似しているものも含まれる。しかしこれらの土坑は直線的に配置されたものではなく、いわゆる掘立柱建物を構成するものとは考えられない。また柱痕跡と推定される土層が、土坑の底部にまで及ぶものと、土坑の底部に至らず途中でとまるものがある。これがここに樹立されていた柱の痕跡であるとする、柱を立てる方法、さらには機能にも一定の幅があったことをうかがわせるものである。

またその規模により、直径が0.3～0.4m前後のもの（小型）、直径0.5～0.7m前後のもの（中型）、さらに1.0m前後かそれを越えるもの（大型）の、大きく三つに分類することが可能である。

**典型的な形状を示す172土坑** 柱痕と推定される土層が観察された土坑の典型的な形状を示す遺構である。直径約0.80mを測る隅丸方形ともみえる土坑。深さ約0.54mを測る。遺構の北側に直径約0.32mを測る遺構の検出面から底部まで連続する円柱状の土層が検出された。この土層は黒褐色の粘質土であり、周囲の土は地山と類似した褐色の粘質土である。土坑内の堆積土の様相は、歴史時代の大型の掘立柱建物の柱穴を想像させるものである。

**小型の土坑** 4土坑は、直径約0.30m、深さ約0.15mを測る。遺構の東部に直径約0.15mの柱痕が観察される。120土坑は直径約0.25m、深さ約0.30mを測る。中央に直径約0.10mの柱痕が遺存していた。12土坑は、長径約0.50m、短径約0.40mを測り、楕円形を呈す。深さは約0.56mを測る。やや南寄りに直径約0.22mの柱痕が観察された。51土坑は直径約0.48m、深さ約0.35mを測る。中央に検出面で約0.25m、底部で約0.1mを測る柱痕を検出した。これらのほか102土坑、25土坑、44土坑、52土坑、121土坑、151土坑などが代表的なものである。

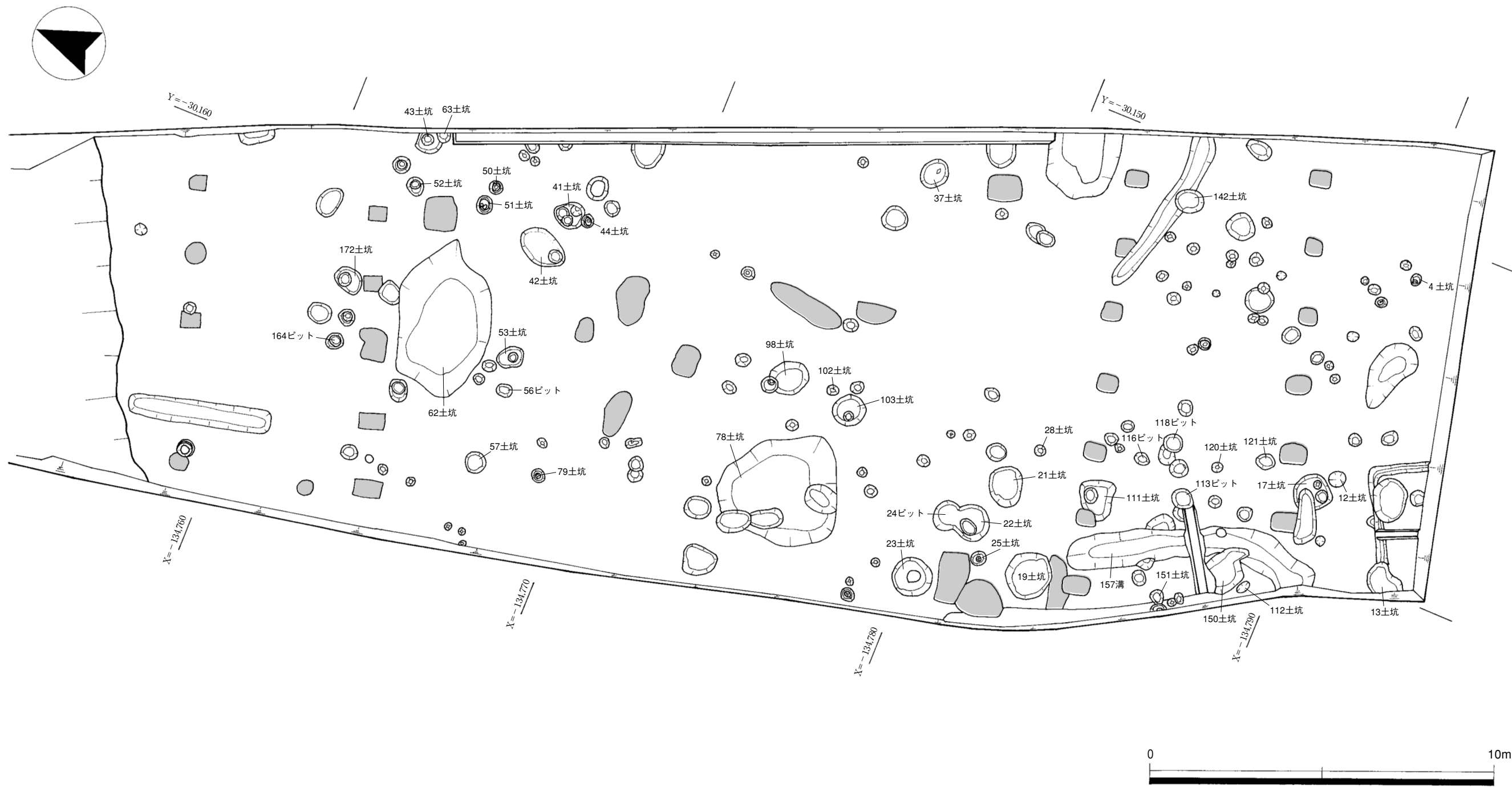


図13 縄文時代土坑群平面図

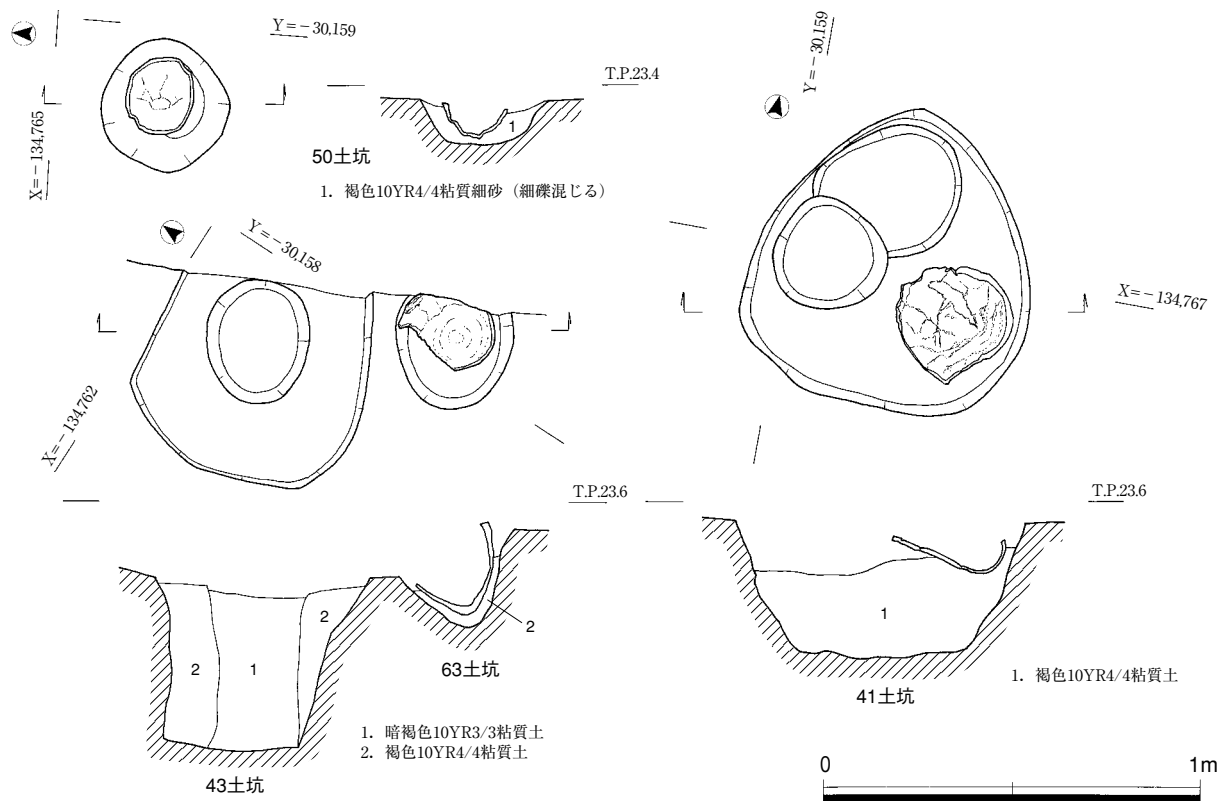


図14 縄文時代埋甕遺構実測図

中型の土坑 53土坑は、長径約0.75m、短径約0.60mを測り、楕円形を呈す。深さは約0.62mを測る。やや南寄りに直径約0.25～0.30mを測る柱痕が観察された。57土坑は、直径約0.65m、深さ約0.20mを測る。やや北寄りに直径約0.25mを測る柱痕が観察された。これらのほか79土坑、142土坑などが代表的なものである。埋甕遺構である63土坑に隣接して検出された43土坑は、直径約0.55m前後、深さ約0.45mを測る。中央に直径約0.30mを測る柱痕が検出された。

大型の土坑 22土坑は、直径約1.00m、深さ約0.25mを測る。遺構の東部に直径約0.40mの柱痕が観察された。柱痕からは差渡し20cm前後の扁平な石が落ち込んでいた。この土坑の底部はスリ鉢状を呈す。23土坑は直径約1.20m前後、深さ約0.30m前後を測る。中央に直径約0.45m前後の柱跡が検出された。これらのほか13土坑、17土坑、159土坑、103土坑、42土坑、さらに先述した172土坑などが代表的なものである。

また21土坑は、長径約1.15m、短径約1.00m、深さ約0.25mを測る大型の土坑である。ここからは柱痕は検出されなかった。大型土坑の中には同様に柱痕が検出されず、その存在が確認できないものも多数存在する。

段丘縁辺の土坑群 西側の開析谷と段丘を限る段丘崖が東側に回り込むため、第1調査区の南部の大部分が開析谷の中に納まってしまふ。調査範囲がさらに東側に広がる一部分で、段丘縁辺と段丘崖が検出された。南北約11m、東西は段丘縁辺から約2.5mの範囲である。ここで検出された段丘崖は、急傾斜で谷の底部にいたる。段丘縁辺から深度約2mまでは今回の調査で確認することができたが、さらに開析谷の底部までは3～4mほどの深さをもつと推定される。また後世の宅地化に伴う造成により段丘崖も東に向かって後退している。

段丘縁辺には5基の土坑が検出された。このうち159土坑は直径約1.20mを測る大型の土坑である。

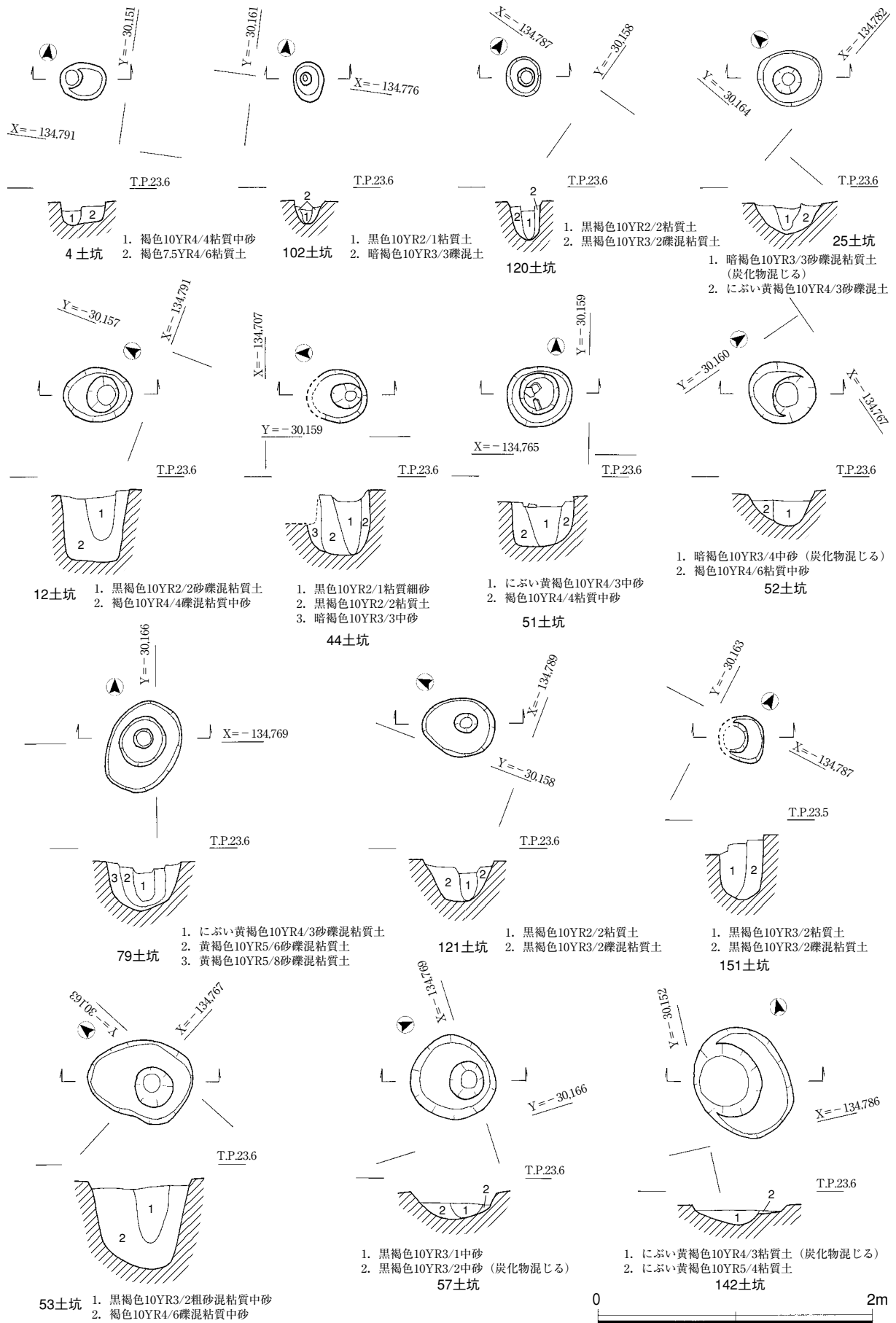


図15 縄文時代土坑実測図 (1)



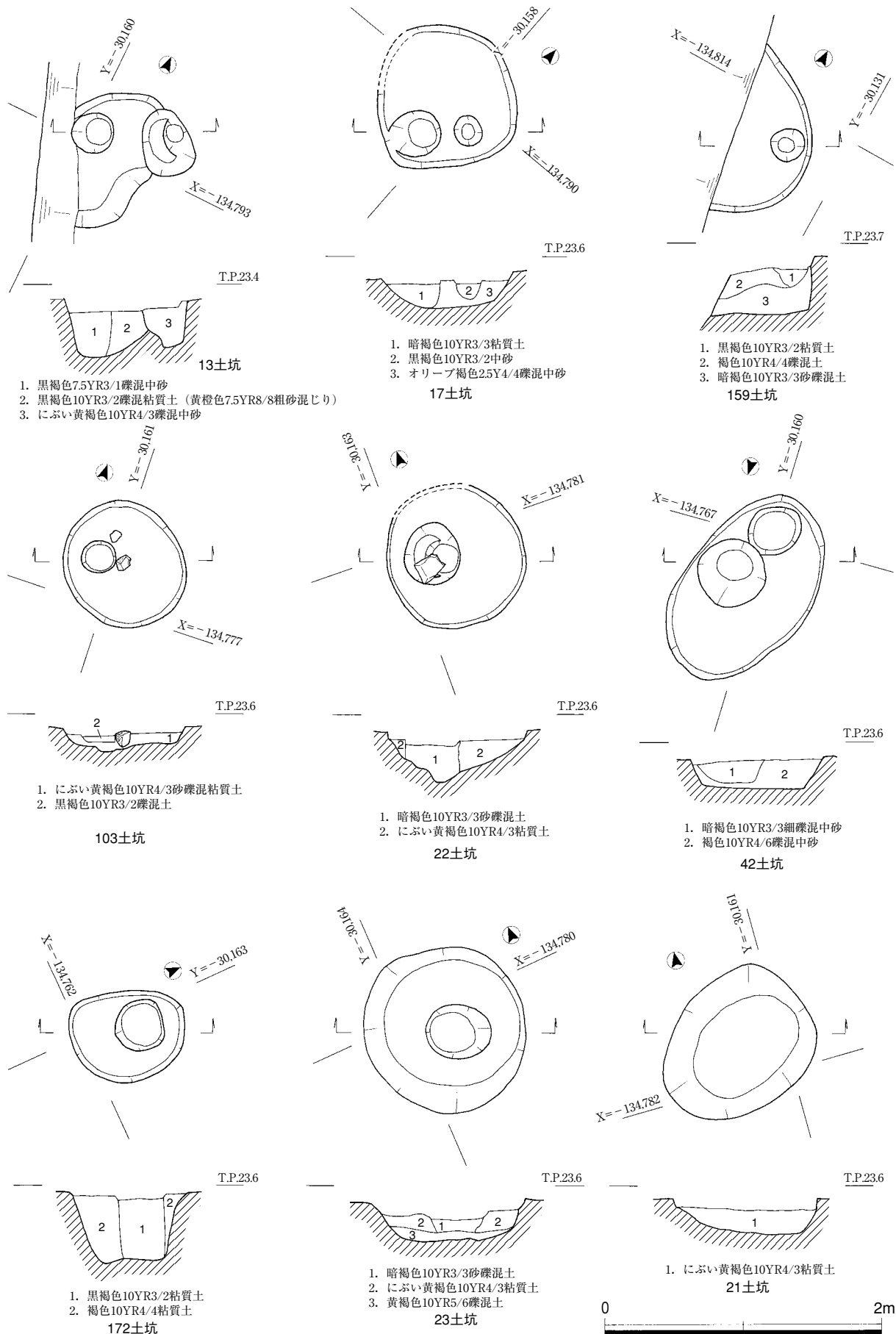


図16 縄文時代土坑実測図 (2)

遺構の西部に直径約0.25mの細い柱痕が検出された。遺構の西側半分はすでに削り取られ、段丘崖にその断面を見せていた。159土坑から南に向かって160土坑、161土坑、さらに200土坑と4基の土坑が2m前後の距離をもって緩やかな円を描いて配置されている。この4基の土坑の位置関係から、この土坑群が円形に配置されたと仮定してその直径を復元すると約9mとなる。直径9mの円周上に2m間隔で10基程度の土坑が存在したのであろうか。

縄文時代の遺構の性格 第1調査区では3基の埋甕遺構が検出された。いずれも深鉢をやや傾斜させながら上向きに据えていた。そのうちの2基は土器を納めることのできるだけの大きさの土坑に置かれており、その埋土も土坑掘削時の排土を利用したものである。残る1基は木製の柱痕跡の可能性のある部分避けて配置された可能性がある。上の山遺跡の埋甕遺構の性格の一端を示すものであると考える。

さらに、埋甕は縄文時代の葬制・墓制に関わるものと考えられるが、埋甕遺構である63土坑に隣接して検出された43土坑は、直径約0.30mを越える柱痕が遺存していた。埋甕遺構と柱痕をもつ土坑は相互に深い関連性のなかにあったことを示唆するものである。

また段丘縁辺で検出された159土坑をはじめとする4基の土坑の配置は、本来これらの土坑が円形に

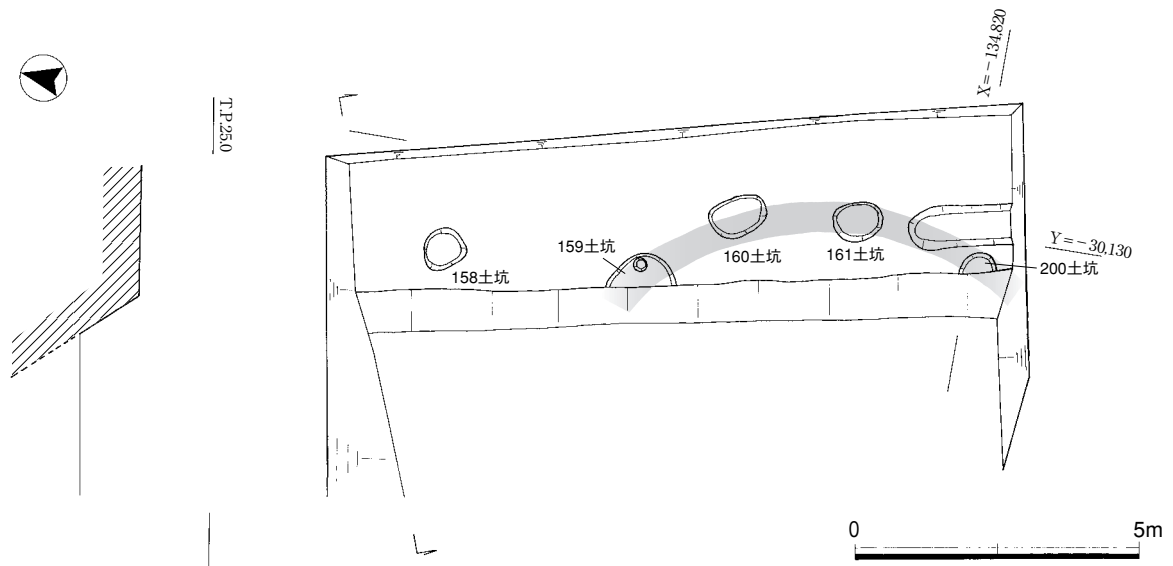


図17 段丘崖縁辺で検出された土坑群実測図

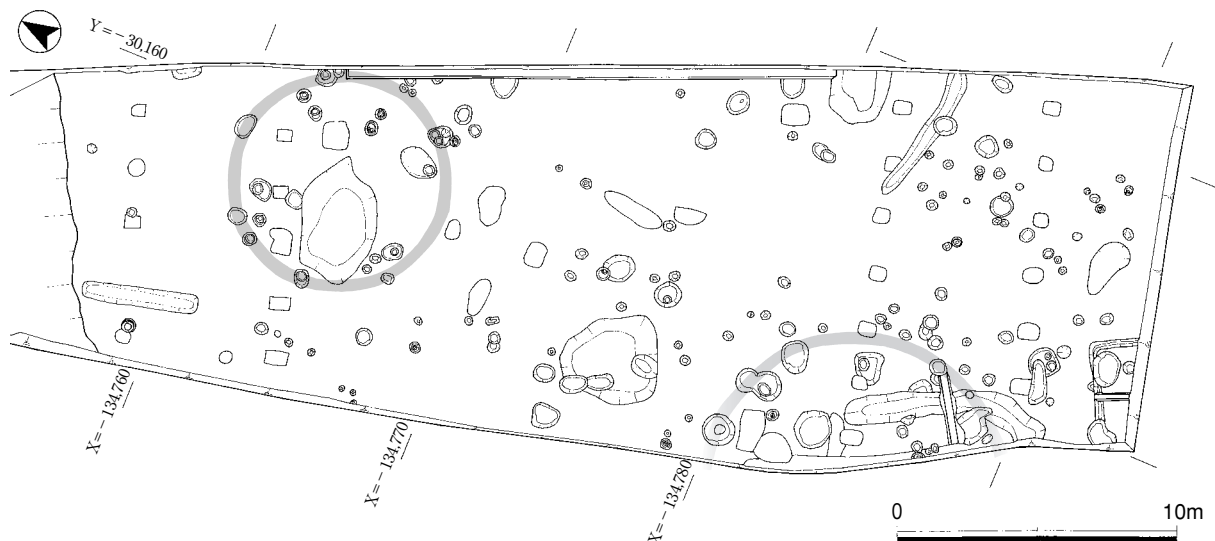


図18 縄文時代土坑群復元図

配置されていた可能性をうかがわせる。土坑密集範囲の土坑群も、同様に円弧を描いて配置されているとの想定のもとに復元を試みた(図18)。

しかし後述するように出土した縄文土器の帰属する時期幅が大きく、一連の遺構として推定した土坑群がどの程度同時に共存したかは、厳密には明確にできない。今後の課題である。

## (2) 弥生時代以降の遺構

**74溝** 調査区の北端部の段丘縁辺で検出。段丘崖に向かって走る溝である。北側の法面は調査区外に広がるため南側の肩部から法面と底部を検出したのみである。検出できた溝の幅は約1.5m、深さ約0.95mを測る。埋土の中ほどからほぼ完形の弥生土器(長頸壺)が1点、横倒しの状態で出土。弥生時代第Ⅱ期のものである。

溝の全体規模は明らかにできなかったがかなり規模の大きなものであると推測される。段丘崖に向かって走っており、天の川の河道との間の平坦な段丘面を横断して掘削された可能性がある。

**その他の弥生時代の遺構** 調査区中央部の段丘縁辺で検出された78土坑、157溝などのいくつかの遺構から弥生土器が出土している。しかしこれらの遺構は局地的に集約されており、調査区全体に展開するものではない。

**竪穴住居1** 南北約3.9m、東西の現存長約3.6m、最も遺存状態がよい部分では深さ約0.30mを測る方形の竪穴住居である。当該遺跡の中央部には調査不要な範囲があり、ひとつの遺構を分断して調査を実施した。北部の保存状況は良好で壁部はよく遺存しており、ほぼ垂直に立

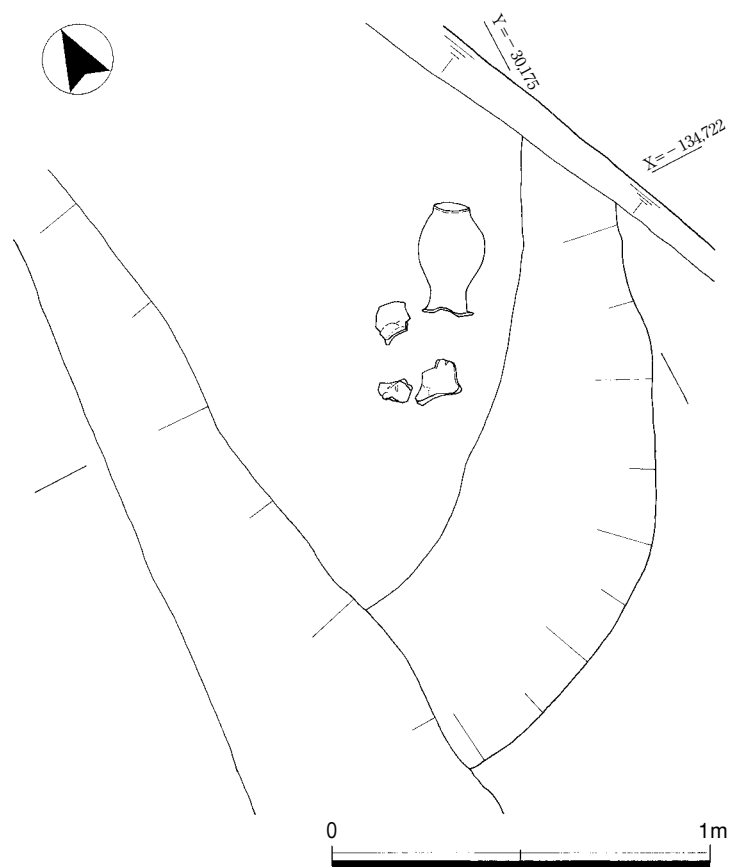


図19 74溝遺物出土状況実測図

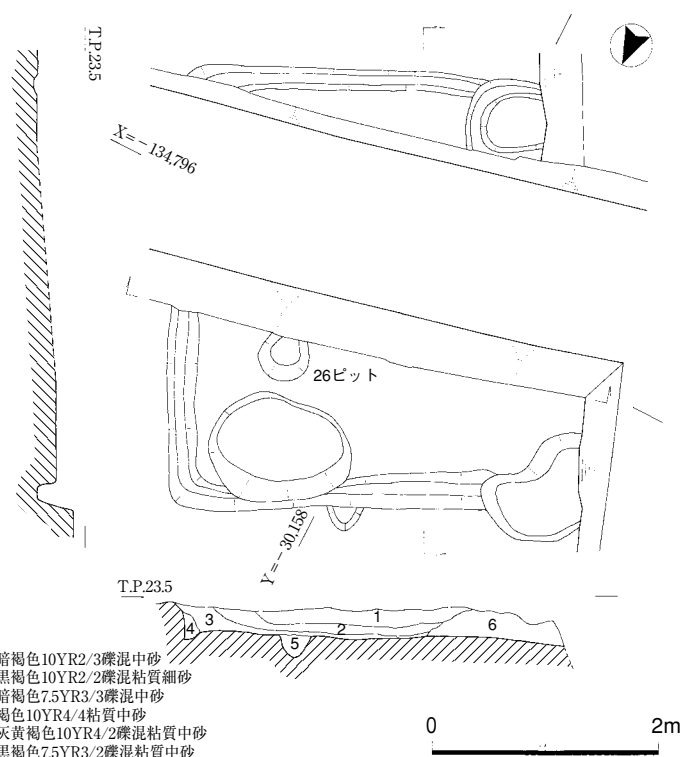


図20 竪穴住居1実測図

1. 暗褐色10YR2/3礫混中砂
2. 黒褐色10YR2/2礫混粘質細砂
3. 暗褐色7.5YR3/3礫混中砂
4. 褐色10YR4/4粘質中砂
5. 灰黄褐色10YR4/2礫混粘質中砂
6. 黒褐色7.5YR3/2礫混粘質中砂

ち上がる。しかし南部ではすでに上部が大きく削平されており、わずかに壁溝を検出したにすぎない。また遺構の西部は段丘崖縁辺にあたり、すでに遺構の西端部分は削り取られていた。

検出された北・東・南の3辺には幅約0.25m、深さ約0.10mの壁溝が巡る。また床面からは、直径約0.45m、深さ約0.20mを測る26ピットを検出した。柱穴の痕跡と推測される。他の3ヶ所の柱穴は調査区外に存在していた可能性が高い。埋土の堆積状況を見ると、まず竪穴住居の周囲から土砂が流入し、中央部が長く掘り鉢状に窪み、ここに順次堆積土が形成されたと考えられる。

また床面や壁部からは、竪穴住居が形成される以前の土坑が3基検出された。これらの埋土を切って竪穴住居が造営された。

出土遺物は、多くないが主に縄文土器が検出された。

この遺構は、その形状から決して縄文時代のものとは考えられない。基本的には弥生時代後期以降、7世紀前後によくみられる一般的な竪穴住居である。しかしその時期に該当する遺物の出土はなく、時期を特定することはできない。

弥生時代以降の動向 第1調査区では数は少ないが、弥生時代の遺構・遺物が検出されている。調査区北端にある74溝は、遺跡の北限に当るものと考えられる。調査区中部の段丘縁辺部からは溝や土坑などが検出されている。第1調査区において弥生時代の遺構密度は低いが、弥生時代の上の山遺跡の北端部に展開する集落域の縁辺に相当するものと考えられる。また竪穴住居1は、縄文時代の遺物が出土したのみで、この遺構の帰属時期は明らかにできない。弥生時代中期はじめ頃を中心とする弥生時代の上の山遺跡よりも後の時代のものであると推定されるが、これに関連する遺構・遺物の検出は他になく、遺跡内における性格の設定は保留したい。

## 第2節 縄文土器

縄文土器 892点出土した。表面が摩滅した小破片の資料が多く、型式を特定できるものは少ない。図示できたのは、42点である。1～3は中期の土器（図21）、4～33、34～42は後期の土器（図22・23）である。

1は、深鉢の胴～底部である。地文にLR縄文をもち、太く深い沈線が数条垂下する。2は深鉢の底部で、平底である。1・2は色調や胎土から見て同一個体の可能性が高い。1の特徴から北白川C式に比定され

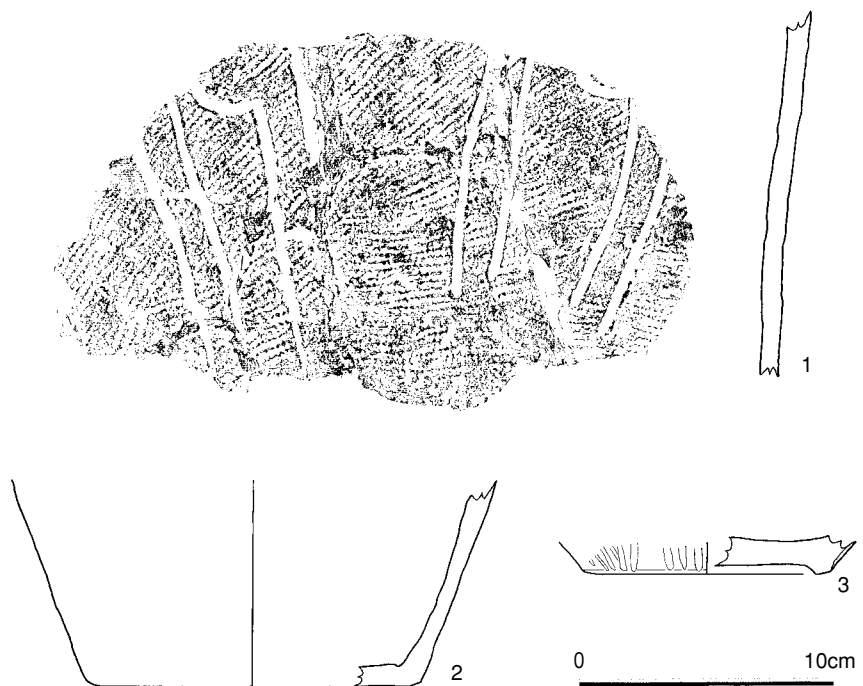


図21 第1調査区出土の縄文土器（1）

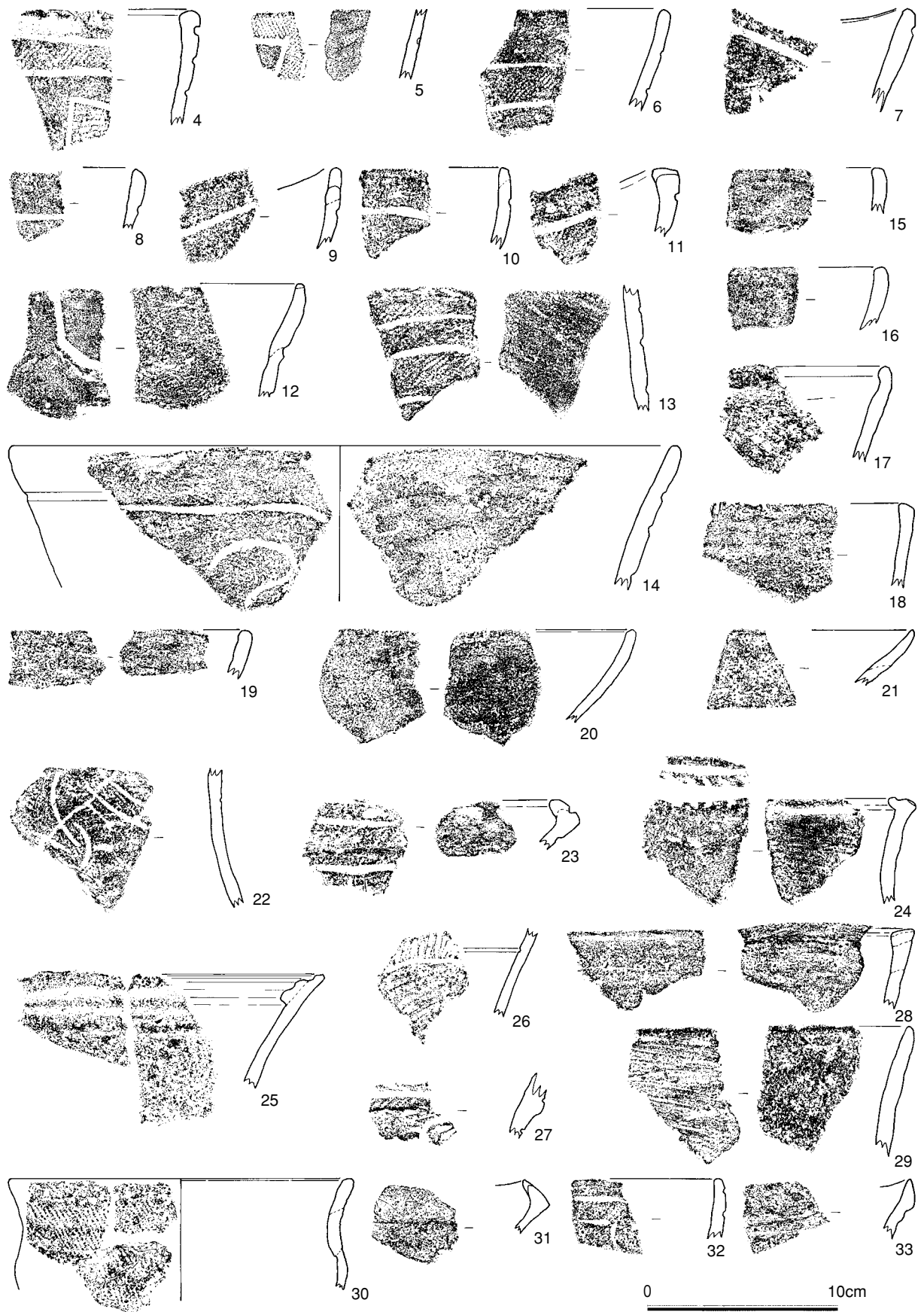


図22 第1調査区出土の縄文土器（2）

る。3は深鉢の底部で、上げ底である。厚手で、外面には縦～斜位の沈線が連続的に施され、端部付近にまで及ぶ。4～14は、内湾気味または直線的な口縁部が若干肥厚し、幅広の磨消縄文帯または沈線帯をもつ有文深鉢である。4は口縁部外面に、口縁に平行するLRの磨消縄文帯が1条横走り、頸部外面にもLRの磨消縄文帯が施される。5は頸部外面にRLとLR両方の縄文をもつ磨消縄文帯が施される。4・5の磨消縄文帯はカドになった部分が認められ、窓枠状のモチーフをもつ可能性がある。6は口縁～頸部外面に、口縁に平行するLRの磨消縄文帯を1条有する。7は口縁部外面に、口縁に平行する沈線帯に加えて縦位の沈線帯が描かれるもので、後者は垂下するJ字文の一部と考えられる。沈線帯の内側には右肩あがりの筋状の凹凸が認められ、本来は縄文が充填されていたものと思われる。8～11は外面に、口縁に平行する太く深い沈線が施される深鉢である。磨消縄文帯または沈線帯を有するものであろう。11はLR縄文が充填される。12は口縁～頸部外面に、沈線帯によって曲線的なモチーフが描かれる。沈線は3本認められるがそのうち1本は端部にまで及ぶ。13は頸～胴部外面にLRの平行磨消縄文帯が2条横走する。14は口縁に平行する沈線が1条めぐり、端部との間を文様帯とし、J字文が垂下するタイプである。文様帯は右肩あがりの筋状の凹凸が認められ、本来は縄文が充填されていたものと思われる。4・5は中津I式、6～14は中津式に比定される。

15～21は無文土器である。15～19は口縁部が緩やかに内湾し、端部を面取りする深鉢である。20・21は口縁部の肥厚する皿状の浅鉢である。いずれも中津式であろう。

22は頸～胴部外面に、細い沈線によって幅の狭いRLの磨消縄文帯が曲線的に描かれ、沈線末端が入り組む深鉢である。福田KⅡ式古段階に比定される。

23～27は外反しながら立ち上がる頸部を無文帯とし、口縁部付近に狭い文様帯をもつ深鉢である。23～25は口縁部が内側に、27は外側に肥厚する。23は口縁部外面と頸部外面にそれぞれ1条の平行沈線が横走り、その間をLRの磨消縄文帯とする。24は口縁部上面に沈線がめぐり外側を刻む。23・24は福田KⅡ式新段階～北白川上層1式直前段階のものである。25は、口縁部内面に太く浅い平行沈線が2条横走する。26は口縁部内面に沈線が1条横走り、端部との間を斜位の短沈線で充填する。27は口縁部外面に穿孔、横走沈線、曲線的な短沈線が施され、横走沈線とその下に形成される段との間にLRの縄文が充填される。25・26は北白川上層式に併行する資料である。27は北白川上層1式に比定される。

28・29は口頸部が外反し、板状工具によって器面調整を行う無文の深鉢である。28は口縁部が肥厚する。いずれも北白川上層式のものである。30は地文に縄文をもつ鉢である。北白川上層式である。

31は頸部が外反し口縁部が屈曲する無文の深鉢である。北白川上層式以降のものである。

32は内湾する口縁部外面にLRの縄文帯とC字文をもつ深鉢である。北白川上層式～元住吉山I式に比定される。

33は、沈線の摩滅した口縁部の破片とも考えられるが、おそらくは凹線をもつ深鉢であろう。宮滝式に併行する可能性がある。

34は鉢である。器形は球形に近いものと思われる。把手部と口縁部であり、接合しないがきわめて近接した位置関係にある同一個体資料である。35は注口土器の注口部である。接合部付近をおさえる。

36・37は深鉢の把手である。36は眼鏡状を呈する。37は隆帯が頂部をとりまきつつ垂下していき漸移的に器面に消えていく。隆帯上は、頂部にはキザミ、垂下部分には上端に1つ、下端に現状で2つの刺突がみられる。隆帯が取り巻く部分には、向かって左側から隆帯に沿いつつ沈線がめぐる。その上から緩い「S」字状を呈する短く浅い沈線が2本、隆帯に向かって引かれる。38～42は深鉢の底部資料であ

表1 第1調査区出土の縄文土器観察表(1)

	出土遺構	器種	部位	径(mm)	器厚 (mm)	色調		焼成	調整		備考
						内面	外面		内面	外面	
1	41土坑	深鉢	胴～底部	222(胴径)	9	褐(7.5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)	良好	不明	不明	径4mmの長石、石英、チャートを含む。LR縄文を施す。北白川C式。
2	41土坑	深鉢	底部	126(底径)	10	褐(7.5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)	良好	不明	不明	径4mmの長石、石英、チャートを含む。1と同一個体である可能性が高い。
3	19土坑	深鉢	底部	96(底径)	12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	灰白(10YR8/2)	良好	不明	ミガキ (底面)	径1mm以下の微細な長石、石英を含む。中期。
4	79土坑	深鉢	口縁～ 頸部	—	11	にぶい橙 (7.5YR7/4)	褐灰(10YR6/1)	良好	不明	不明	径1～2mmの長石、雲母を含む。LR縄文を施す。中津I式。
5	158土坑	深鉢	頸部	—	7	黒(N1.5/)	暗灰(N3/)	不良	ミガキ	ミガキ	径1～2mmの長石を含む。中津I式。
6	79土坑	深鉢	口縁～ 頸部	—	7	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR4/2)	良好	ミガキ	ミガキ	径1～2mmの長石、石英、雲母を含む。LR縄文を施す。中津式。
7	—	深鉢	口縁部	—	11	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	不明	不明	径1～2mmの長石、径1mmの角閃石を含む。中津式。
8	—	深鉢	口縁部	—	9	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	不良	不明	不明	径1～2mmの長石、石英を含む。中津式。
9	75土坑	深鉢	口縁部	—	9	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	不良	不明	不明	径2～3mmの長石、径1mmの角閃石を含む。中津式。
10	157溝	深鉢	口縁部	—	7	にぶい黄橙 (10YR6/3)	褐(7.5YR4/3)	不良	不明	不明	径2～3mmの長石を含む。中津式。
11	竪穴住居 1	深鉢	口縁部	—	14	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	ミガキ	不明	微細な長石、石英、チャート、赤色粒を含む。中津式。
12	157溝	深鉢	口縁～ 頸部	—	9	にぶい橙 (7.5YR6/4)	褐灰(10YR5/1)	良好	ミガキ	ミガキ	径1～3mmの長石、石英を含む。中津式。
13	157溝	深鉢	頸～胴 部	—	9	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR5/2)	不良	ミガキ	ミガキ	径1～2mmの長石、石英、雲母、角閃石を含む。中津式。
14	158土坑	深鉢	口縁部	364(口径)	10	にぶい黄橙 (10YR7/2)	褐灰(10YR5/1)	やや不良	ナデ	ナデ	径2mmの長石、径1mmの角閃石、赤色粒を含む。中津式。
15	—	深鉢	口縁部	—	8	にぶい黄橙 (10YR7/2)	灰黄(2.5Y6/2)	良好	不明	ナデ	径2mmの長石、石英、角閃石を含む。中津式。
16	157溝	深鉢	口縁部	—	8	にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰黄(2.5Y7/2)	不良	ナデ	ナデ	径1mmの長石、石英、角閃石を含む。中津式。
17	164 ピット	深鉢	口縁～ 頸部	—	8	にぶい橙 (7.5YR6/4)	褐(7.5YR4/3)	良好	ナデ	不明	径2～3mmの長石、角閃石を含む。中津式。
18	150土坑	深鉢	口縁部	—	9	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/3)	良好	不明	不明	径1mmの長石、石英、雲母を含む。中津式。
19	—	深鉢	口縁部	—	9	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	不良	ナデ	ナデ	径1～2mmの長石、石英、チャート、微細な角閃石を含む。中津式。
20	157溝	浅鉢	口縁～ 体部	—	6	にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰黄褐(10YR6/2)	良好	ミガキ	ミガキ	径1～2mmの長石、角閃石含む。中津式。
21	—	浅鉢	口縁～ 体部	—	6	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	やや不良	不明	不明	径1～3mmの長石、微細な角閃石を含む。中津式。
22	111土坑	深鉢	頸～胴部	—	7	褐灰(10YR6/1)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	ミガキ	不明	径1～2mmの長石を含む。福田KⅡ式古段階。
23	21土坑	深鉢	口縁部	—	13	にぶい褐 (7.5YR5/3)	橙(5YR6/6)	やや不良	ミガキ	ミガキ	径1～2mmの長石、石英、雲母、チャートを含む。福田KⅡ式～北白川上層1式。
24	22土坑	深鉢	口縁～ 頸部	—	12	褐灰(7.5YR6/1)	褐灰(7.5YR5/1)	やや不良	ミガキ	ミガキ	径2mmの長石、石英を含む。福田KⅡ式～北白川上層1式。
25	62土坑	深鉢	口縁～ 頸部	—	12	橙(2.5YR7/8)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	不良	不明	ミガキ	径1～3mmの長石、石英、雲母を含む。北白川上層式併行。
26	19土坑	深鉢	口縁～ 頸部	—	6	灰(N4/)	灰黄褐(10YR6/2)	良好	板状工具の 擦過	ミガキ	径1～2mmの長石、石英、赤色粒を含む。北白川上層式併行。
27	103土坑	深鉢	口縁部	—	13	にぶい橙 (7.5YR7/4)	褐灰(7.5YR5/1)	良好	ミガキ	ミガキ	径1～2mmの長石、石英、径1mmの角閃石を含む。北白川上層1式。

表2 第1調査区出土の縄文土器観察表(2)

	出土遺構	器種	部位	径(mm)	器厚 (mm)	色調		焼成	調整		備考
						内面	外面		内面	外面	
28	22土坑	深鉢	口縁～ 頸部	—	13	橙(5YR7/6)	褐灰(10YR6/1)	良好	板状工具の 擦過	板状工具の 擦過	径1～3mmの長石、径1mmの雲母を含 む。北白川上層式。
29	195土坑	深鉢	口縁～ 頸部	—	9	褐灰(10YR6/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや不良	ミガキ	板状工具の 擦過	径1～2mmの長石、石英を含む。微細 な角閃石を含む。北白川上層式。
30	118 ピット	鉢	口縁～ 胴部	184(口径)	8	浅黄橙(10YR8/4)	橙(2.5YR7/8)	不良	不明	不明	径1mmの長石、石英、雲母、黒色粒を 含む。北白川上層式。
31	157溝	深鉢	口縁部	—	11	灰白(7.5YR8/2)	橙(5YR6/6)	不良	ナデ	ナデ	径1mmの長石、石英を含む。北白川上 層式以降。
32	88土坑	深鉢	口縁部	—	8	灰褐(7.5YR4/2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	不良	不明	不明	径1～3mmの長石、石英、径1mmの角閃 石を含む。北白川上層式～元住吉山 I式。
33	竪穴住居 1	深鉢	口縁部	—	8	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	不良	不明	不明	微細な長石、雲母を含む。宮滝式併 行か。
34	24ピット	鉢	口縁～ 把手部	—	9	暗灰(N3/)	暗灰(N3/)	良好	ナデ	ナデ	径1～2mmの長石、角閃石を含む。後 期。
35	112土坑	注口土器	注口部	—	11	黒褐(7.5YR3/1)	明褐灰(7.5YR7/2)	良好	不明	ナデ、オサ エ	径1～2mmの長石、石英、角閃石、雲 母を含む。後期。
36	56ピット	深鉢	把手部	—	23	橙(5YR7/6)	明赤褐(10R6/8)	不良	不明	不明	径2～3mmの長石、石英、雲母を含 む。時期不明。
37	157溝	深鉢	把手部	—	24	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	不良	ナデ	ナデ	径2mmの長石、径1mmの雲母、角閃石 を含む。後期。
38	111土坑	深鉢	底部	122(底径)	14	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	やや不良	不明	不明	径3mmの長石、石英を含む。径2mm以 下の角閃石、雲母を含む。後期。
39	113 ピット	深鉢	底部	60(底径)	10	灰(N4/)	橙(2.5YR6/8)	良好	不明	不明	径2～4mmの長石、石英、角閃石を含 む。後期。
40	37土坑	深鉢	底部	97(底径)	9	黒褐(7.5YR3/1)	橙(5YR6/6)	やや不良	不明	不明	径1mmの長石、石英、角閃石を含む。 後期。
41	21土坑	深鉢	底部	80(底径)	11	褐灰(7.5YR5/1)	黒(7.5YR2/1)	やや不良	ナデ	ナデ	径1～2mmの長石、石英、雲母、チャ ートを含む。外面にスス付着。後 期。
42	63土坑	深鉢	胴～底部	273(胴径) 84(底径)	10	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	良好	板状工具の 擦過、ナデ	条痕、オサ エ	径2～3mmの長石を含む。後期。
43	24ピット	深鉢	底部	—	14	橙(5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	不明	不明	径2～3mmの長石、角閃石を含む。後 期。
44	62土坑	深鉢	底部	80(底径)	11	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	やや不良	不明	不明	径1～3mmの長石、石英、雲母を含 む。後期。
45	62土坑	深鉢	口縁部	—	7	橙(2.5YR7/8)	橙(2.5YR7/8)	良好	不明	不明	径1～2mmの長石を含む。中津式。
46	62土坑	深鉢	口縁部	—	7	橙(5YR7/6)	橙(2.5YR7/8)	良好	不明	ミガキ	径1～2mmの長石を含む。中津式。
47	62土坑	深鉢	口縁部	—	8	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/6)	良好	不明	ミガキ	径1～2mmの長石を含む。中津式。
48	62土坑	深鉢	不明	—	7	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	不良	不明	ミガキ	径1～2mmの長石、石英、雲母を含 む。中津式。
49	103土坑	深鉢	口縁部	—	10	にぶい黄橙 (10YR7/2)	褐(7.5YR4/3)	不良	不明	不明	径1～2mmの長石、角閃石を含む。後 期。
50	195土坑	深鉢	頸部	—	9	にぶい黄橙 (10YR6/3)	褐灰(10YR4/1)	良好	不明	不明	径1～2mmの長石、石英、角閃石を含 む。条線あり。北白川上層式。
51	195土坑	深鉢	頸部	—	7	褐灰(10YR6/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや不良	ミガキ	板状工具の 擦過	径1～2mmの長石、石英を含む。微細 な角閃石を含む。北白川上層式。



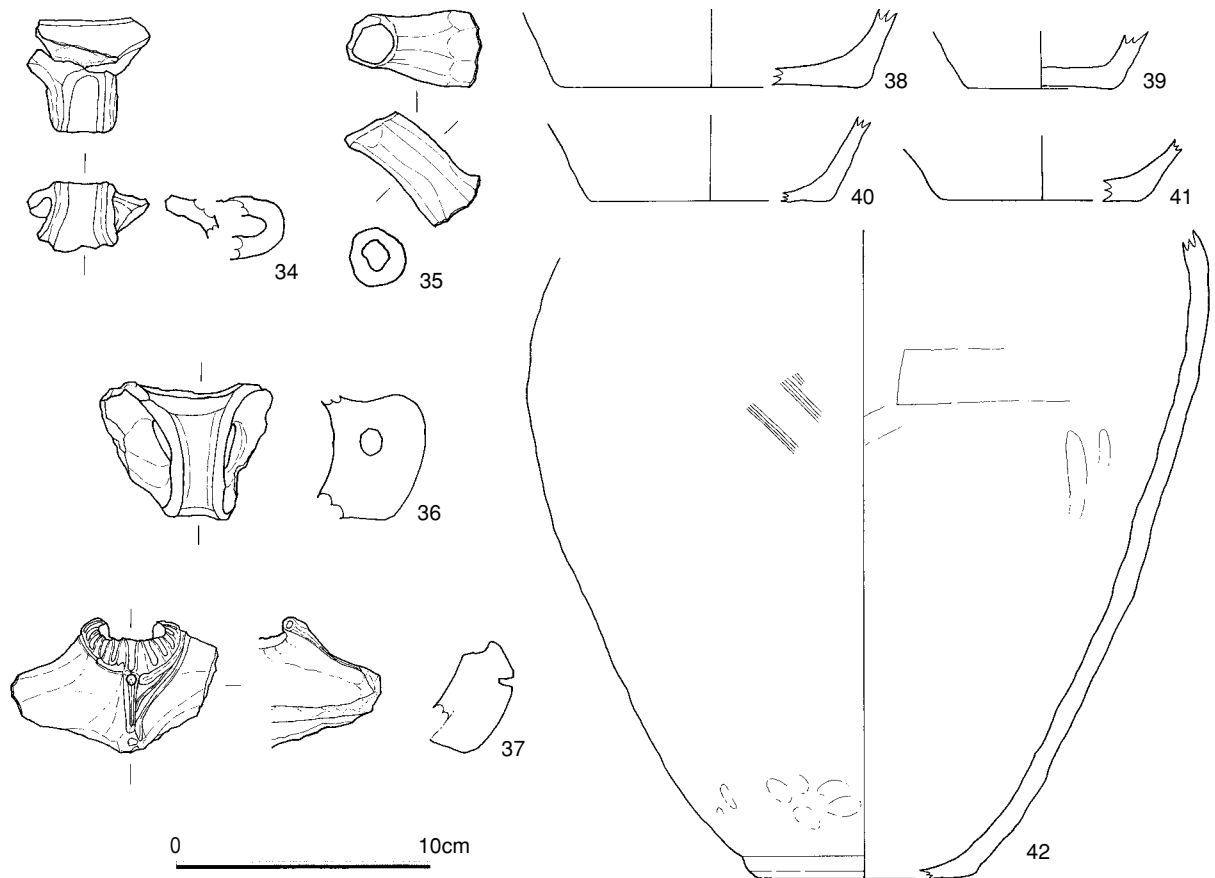


図23 第1調査区出土の縄文土器(3)

る。39はやや上げ底であるが、その他は平底である。42は胴部も残存する。わずかに調整が見られる。

図化することはできなかったが、細部の特徴から型式をある程度捉えられるもの(43~51)についても、観察表に示した。43・44は平底に近い上げ底の底部である。後期の所産であろう。45~48は太めの沈線を曲線的に施す。中津式であろう。49は外反する口縁部で、端部がやや肥厚する。後期であろう。50は垂直方向に条線の施される土器である。北白川上層式であろう。51は外反する頸部外面に板状工具の擦過痕が見られ、内面にミガキを施す土器である。北白川上層式であろう。

以上述べたように、中期から後期の幅広い時期にわたる資料が出土した。中津式のものが比較的多いが、絶対数が少なく、型式の多寡について述べることは難しい。

### 第3節 弥生土器

53は78土坑より出土した甕で、口頸部は僅かに外反する形状を呈す。外面は粗い縦ハケ調整を施す。

54~56は74溝より出土した。54は壺の口縁部で、端面下端に浅い刻み目を施す。55は口縁の一部を欠くもののほぼ完形の無文の広口壺である。口径12.4cm、底径7.0cm、器高28.0cm、体部最大径16.8cmを測る。体部は縦長の楕円形で、頸部はやや窄まりつつ直立した後、ゆるやかに外反する。口縁部は短く、下方に垂下し、端部で肥厚する。体部の器壁が厚いため、重量感がある。外面は粗い縦ハケを密に施し、体部最大径付近にまばらに横向きのヘラ圧痕(ヘラミガキを意図)を施す。口縁端部は横ナデしている。体部内面は一部ハケメが見られる。底部はやや突出気味で中央がわずかに凹み、底面に木葉圧痕が認められる。56は甕の底部で、端部が外側に張り出す。

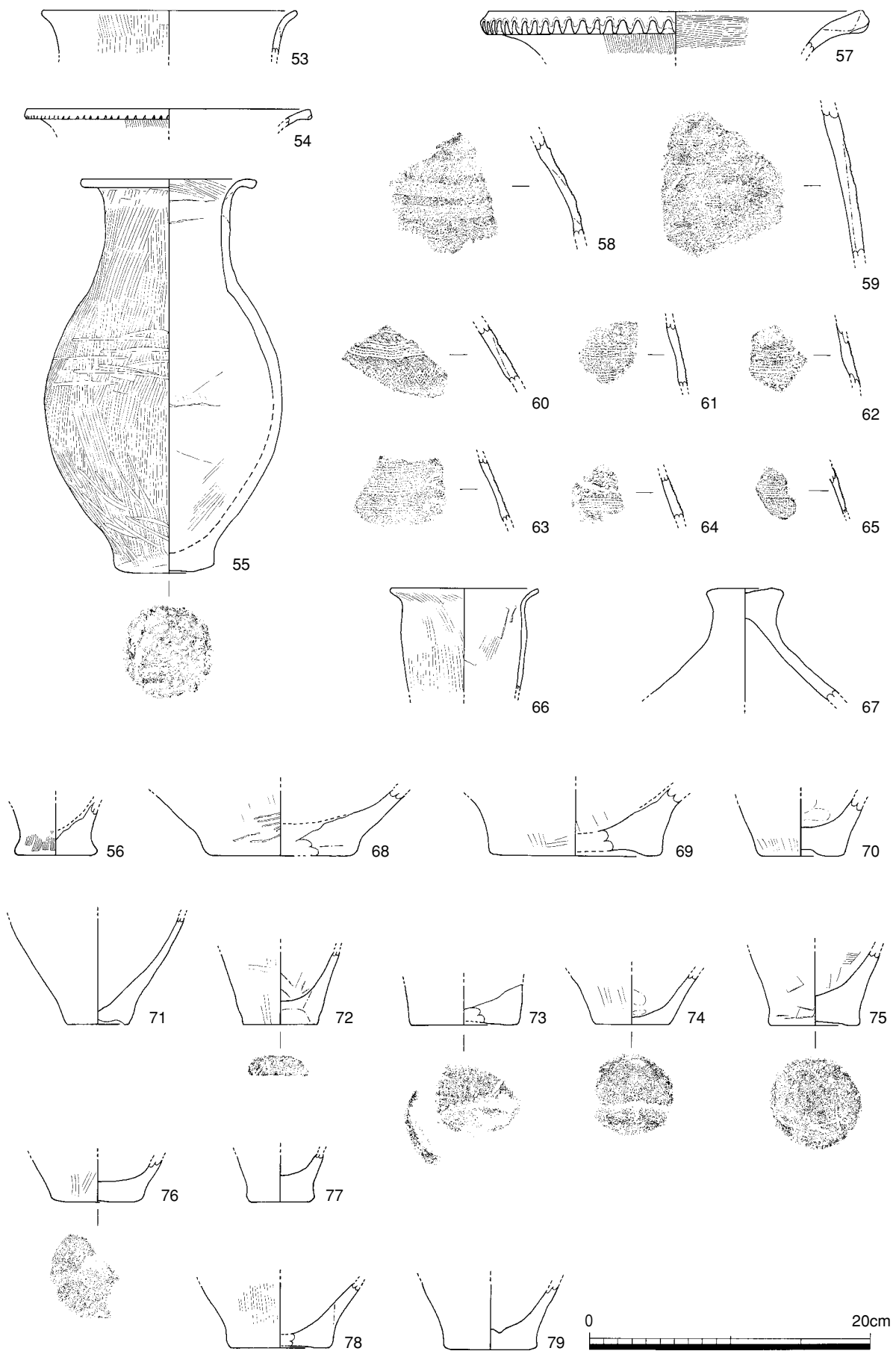


図24 第1調査区出土の弥生土器（1）

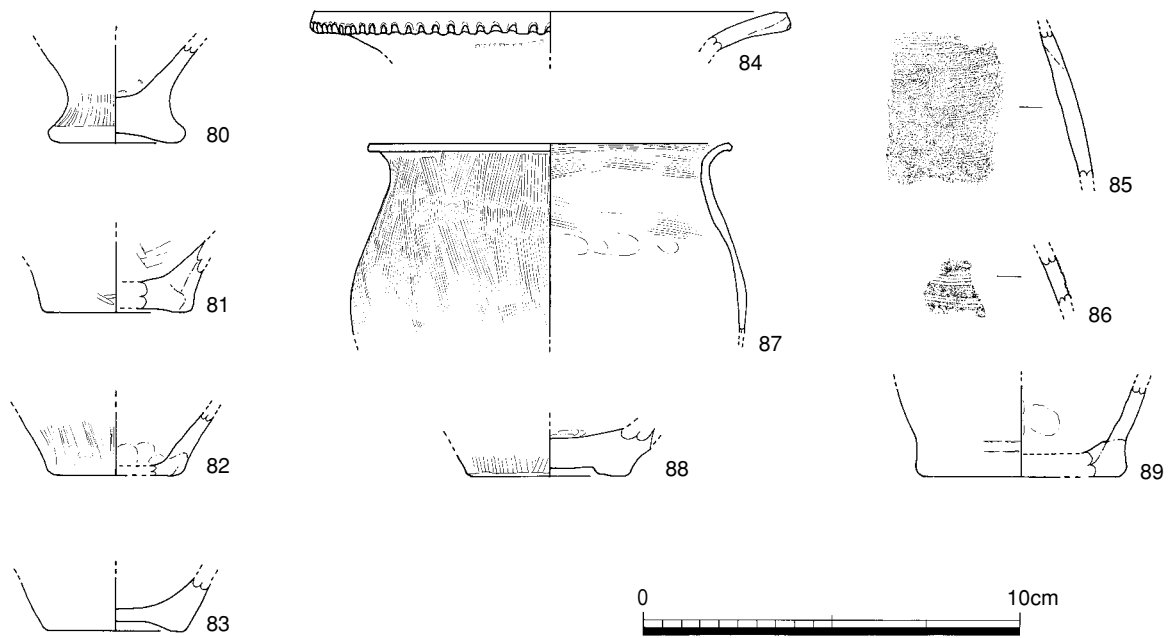


図25 第1調査区出土の弥生土器（2）

57～79は78土坑より出土した。57は広口壺の口縁部で、端部が肥厚し下端に粗い刻み目を施す。外面縦ハケ、内面横ハケを施す。58～65はいずれも櫛描文を施した壺ないし鉢の小片である。58は7条／幅1.1cmの櫛描直線文3帯以上と1帯の波状文、59は残りが悪いが6条／幅1.4cmの櫛描直線文3帯以上、60はやや太い6条／幅1.3cmの櫛描直線文2帯と1帯の波状文、61は7条／幅1.4cmの櫛描直線文3帯以上、62は6条／幅1.1cmの櫛描直線文2帯以上、63は6条／幅1.0cmの櫛描直線文3帯以上、64は5条／幅1.0cmの櫛描直線文と波状文を1帯以上、65は7条／幅1.1cmの櫛描直線文を3帯以上施す。62は生駒山西麓産の胎土を有している。66は小型の甕で、外面縦ハケ、口縁部横ナデ調整を施す。67は甕の蓋で器表は磨滅する。68～79は底部である。68・69は壺、他は甕と推定される。69・70・75はドーナツ底である。72～76は底面に木葉圧痕が残るが、大半はナデ消されたものである。71は底面が剥離する。

80・81は112土坑より出土した底部である。80は端部が「ハ」の字状に張り出すことから鉢と推定される。内面はナデ、底面はヘラミガキを施す。

82・83は170溝から出土した甕の底部である。83はドーナツ底で中央は薄い。

84～89は157溝から出土した。84は広口壺の口縁で下端部に粘土を貼り足し肥厚させ、粗い刻み目を施す。85は壺の体部で、7条／幅0.8cmの櫛描直線文を5帯以上施し、相対する弧文を加えることで流水文とする。86は2帯以上の櫛描直線文を施す。87は外面が細かい縦ハケ、口縁内面は横ハケを施した、いわゆる摂津型甕である。88・89は甕の底部で、88はドーナツ底で外面縦ハケを施す。52は、小片であるが、外面の一部が瘤状に隆起し、その縁の一部が沈線状に凹む。内面は平滑に仕上げられる。写真図版では置く方向が間違っているが、鉢外面の瘤状突起の可能性も考えられる。

52は縄文土器か弥生土器かの議論があったが、胎土に含まれる砂粒の様相、灰橙色を呈する色調と焼成に伴う質感は弥生土器に類似しているが、器種などについては判断できなかった。

時期の判別するものはいずれも、弥生時代第Ⅱ期の所産と考えられる。

表3 第1調査区出土の弥生土器観察表

	色調		胎土
	内面	外面	
52	2.5Y6/3にぶい黄	10YR7/3にぶい黄橙	石英～3mm多、長石～2mm、チャート～1mm、雲母～1mm少
53	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	石英～1mm多、長石～2mm多、赤色粒～0.5mm
54	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y5/2暗灰黄	石英・長石～1mm多、チャート～1mm少、赤色粒～2mm
55	2.5Y6/3にぶい黄	10YR6/2灰黄褐	石英～1mm多、長石・チャート・赤色粒～2mm多
56	10YR4/3にぶい黄褐	10YR4/1褐灰	石英～2mm少、長石～2mm、チャート～2mm少
57	10YR6/1褐灰	2.5Y6/2灰黄	石英～1mm多、長石～4mm多、チャート～2mm
58	2.5Y6/2灰黄	10YR6/3にぶい黄橙	石英～2mm多、長石～3mm多、雲母～1mm少、赤色粒～2mm
59	2.5Y7/3浅黄	10YR6/2灰黄褐	石英～2mm多、長石～3mm多、角閃石～2mm、チャート～0.5mm少、赤色粒～1mm
60	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	石英～1mm多、長石～2mm多、角閃石～1mm少、雲母～0.5mm
61	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/2灰黄	石英～1mm多、長石～3mm多、角閃石～2mm、チャート・赤色粒～1mm少
62	10YR5/2灰黄褐	7.5YR5/2灰褐	石英～0.5mm多、長石～2mm多、角閃石～2mm少、雲母～0.5mm多、チャート～1mm少
63	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/3にぶい黄褐	石英～1mm多、長石～2mm多、チャート～0.5mm少、雲母～0.5mm多
64	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR6/3にぶい褐	石英～1mm多、長石～2mm多、雲母～0.5mm少
65	2.5Y6/3にぶい黄	10YR4/2灰黄褐	石英～1mm多、長石～2mm多、雲母～0.5mm少
66	2.5Y6/2灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	石英～1mm多、長石～1mm多、雲母・チャート～0.5mm少
67	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	石英～3mm、長石～4mm少、チャート～3mm少、赤色粒～1mm少
68	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	石英・長石～3mm、チャート～3mm少、赤色粒～1mm少
69	5YR6/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	石英・長石～2mm、赤色粒～1mm少
70	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	石英～5mm、長石～3mm、チャート・雲母・赤色光沢粒～3mm少
71	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	石英～1mm多、長石～3mm多、チャート・赤色粒～1mm少
72	2.5Y6/2灰黄	2.5Y5/1黄灰	石英～1mm多、長石～3mm多、チャート～1mm少
73	10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR5/3にぶい褐	石英～2mm多、長石～3mm多、角閃石～2mm少、チャート～0.5mm少
74	2.5Y6/2灰黄	7.5YR7/2明褐灰	石英～2mm、長石～5mm
75	10YR6/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	石英～2mm、長石～3mm、赤色光沢粒～2mm少
76	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	石英・長石～3mm、チャート～3mm少
77	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/3にぶい黄	石英～2mm多、長石～3mm多、角閃石～2mm少、チャート～1mm少、赤色粒～2mm
78	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/4にぶい黄	石英～1mm多、長石～2mm多、角閃石～1mm少、チャート～0.5mm少
79	10YR8/2灰白	7.5YR8/4浅黄橙	石英・長石～3mm、チャート・赤色光沢粒～3mm少
80	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	石英～2mm多、長石～3mm多
81	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	石英・長石～3mm、赤色粒～1mm少
82	7.5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	石英・長石～2mm、雲母～1mm少
83	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	石英・長石～2mm、チャート～3mm少
84	10YR6/2灰黄褐	7.5YR5/1褐灰	石英～1mm多、長石～3mm多、角閃石・雲母～1mm、赤色粒～2mm
85	2.5Y4/1黄灰	2.5Y6/2灰黄	石英～1mm多、長石～2mm多、雲母・赤色粒～1mm
86	10YR5/2灰黄褐	2.5Y5/2暗灰黄	石英～1mm多、長石～1mm多、赤色粒～1mm少
87	2.5Y6/2灰黄	10YR5/1褐灰	石英～1mm多、長石～3mm多、チャート～2mm少、雲母～0.5mm少、赤色光沢粒～2mm少、赤色粒～1mm少
88	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	石英・長石～3mm、赤色光沢粒～2mm少
89	10YR5/3にぶい黄褐	2.5Y6/3にぶい黄	石英～2mm少、長石～4mm、チャート～4mm少、赤色光沢粒～3mm少

## 第4節 縄文時代の石器

第1調査区からはサヌカイト製の石器や多数のサヌカイト片が出土した。出土した石器は、縄文時代から弥生時代にかけてのものであるが、全体として縄文時代相当の石器の占める割合が大きいようである。

90～95は78土坑出土の石器である。90は刃器で、素材となる剥片の両面は複数の剥離面で構成されている。湾曲した下辺部を加工して片刃の刃部としているが、上辺部にも使用に際して付いたと思われる使用痕がみられる。長さ4.1cm、幅5.2cm、厚さ0.8cm、重さ10.46gである。91は石核である。背面は自然面で、底面は1枚の剥離面でなっている。目的剥片の剥離作業は、主に一辺で行っているが、反対側

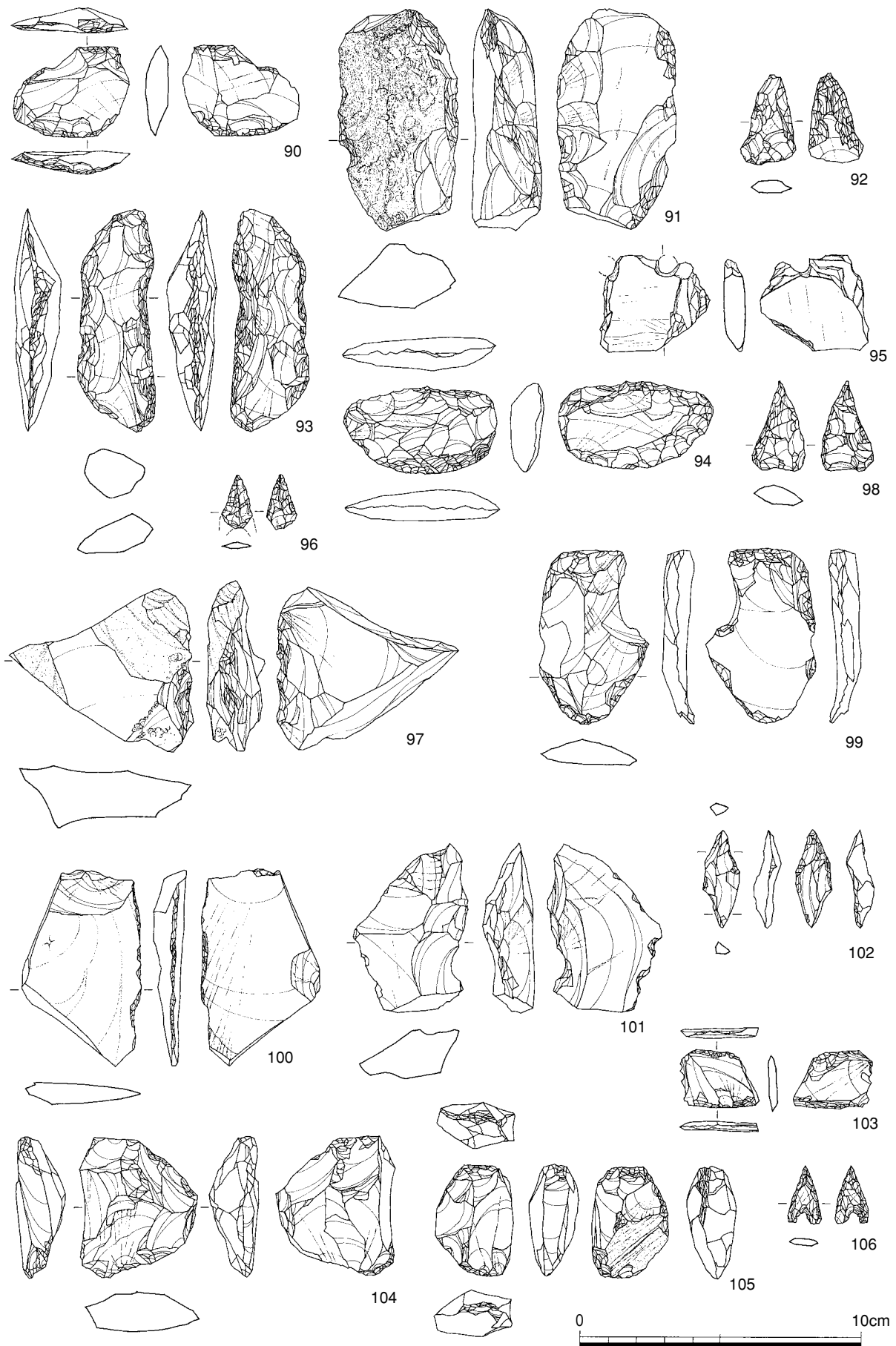


図26 第1調査区出土の石器

にも剥離痕がみられる。長さ4.3cm、幅7.8cm、厚さ2.3cm、重さ86.39gである。92は石鏃の未成品と考えるものである。両側辺を先端が尖るように調整しているが、基部は片面だけに調整がみられ、裏面は大剥離面を残していることから未成品と考えた。長さ3.2cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ2.9gである。93は用途不明品である。平面形は横長台形で、側面形は尖頭器状を呈しているが、先端は長辺に偏っているので尖頭器とはいえないだろう。両面ともに周縁部からの調整で刃部を作り出しているが、中央部で両辺に著しい刃潰しが施されて断面形は円形に近いものとなっている。この部分を握って両端の台形斜辺部を刃部として使用したのかものしれないが、顕著な使用痕はみられない。長さ7.9cm、幅2.8cm、厚さ1.1～1.8cm、重さ34.96gである。94は刃器である。刃部は裏面に大剥離面を残すが、全周にわたって両刃調整がされている。使用痕は全体にみられるが、やや尖り気味になる先端で、刃部の刃先が丸くなるほどに著しく摩耗している。他の刃部に顕著な使用痕はみられないが、下辺刃部の剥離痕は両面ともに稜線が摩耗している。長さ6.5cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm、重さ20.46gである。95は緑泥片岩製の磨製石包丁である。背部は欠損しているが、刃部は片刃で紐孔が二つみられる。残存長3.9cm、残存幅3.5cm、厚さ0.8cm、重さ13.37gである。

96・97は112土坑出土の石器である。96は凹基式石鏃で、両逆刺部を欠損している。残存長1.9cm、残存幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.39gである。97は石核である。背面は調整剥離面と自然面からなっており、打面を山形に作り出して打点としている。また、打面の下端部で剥離面の稜線上に打痕がみられる。長さ6.5cm、幅5.8cm、厚さ2.1cm、重さ56.50gである。

98・99は98土坑出土の石器である。98は石鏃で両側辺は直線的にはならず湾曲している。全体に調整が荒く、未成品の可能性がある。長さ3.2cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重さ3.05gである。99は搔器である。背面に多方向からの剥離面をもつ縦長剥片を素材としている。刃部は意図的に付けられたものか使用に際して付いたものか判別しがたいが、使用に用いた方向は一定していないようである。長さ6.2cm、幅3.9cm、厚さ0.9cm、重さ22.83gである。

100は堅穴住居1の覆土から出土した削器である。この遺構は先述したように弥生時代後期から古墳時代中期頃に想定されるが、この遺構にはいくつかの縄文時代に遡ると推測される土坑が重複しており、そこから混入した可能性が高い。この資料は一見して縦長剥片を素材としているようにみえるが、打点方向の一辺と刃部以外は折れ面であることから、碎片を素材としているようである。刃部は微細な剥離痕で形成されており、使用に際して付いた使用痕の可能性はある。長さ7.0cm、幅4.3cm、厚さ0.8cm、重さ30.35gである。

101・102は157溝出土の石器である。101は石核で、打面を山形に作り出して打点とし目的剥片を得ている。長さ4.1cm、幅7.0cm、厚さ1.7cm、重さ33.3gである。102は石錐である。両端ともに使用痕はあるがあまり顕著ではない。碎片を加工せずに使用しているようである。長さ3.5cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm、重さ2.4gである。

103は116ピット出土の使用痕のある剥片である。両側辺は折れ面で、上下両辺に使用に際して付いたと見られる微細な剥離痕がみられる。石材はサヌカイトであるが、薄く剥がれ、階段状の剥離を呈することから金山産の石材とみられる。長さ2.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ2.5gである。

104は調査区内から出土した楔形石器である。上下端辺は刃部をなしているが、両側辺は折れ面もしくは縦方向の剥離である。両側辺の剥離痕について折れ面とするか剥離痕とするかで意義が違ってくるが、両側面に縦方向を意識した剥離痕があるので、105のような石核であったかもしれない。長さ

5.0cm、幅4.2cm、厚さ1.4cm、重さ34.9gである。

105は170溝出土の石核である。片面に自然面を残す素材を用いて断面形を楔状に仕上げている。一側辺には縦方向の剥離痕があり、打点が後退して最終的に放棄されたようにみられることから石核とした。長さ4.0cm、幅2.8cm、厚さ1.7cm、重さ19.34gである。

106は19土坑出土の凹基式石鏃である。扁平な素材剥片の周縁部を加工することで石鏃の形状に仕上げている。長さ2.1cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.52gである。

調査区から出土した石器は、縄文時代から弥生時代にかけてのものであり、それらに対応する土器や遺構も検出されている。石器を出土した遺構のうち縄文時代の土器等を伴出した遺構は、19土坑・112土坑・157溝・竪穴住居1をあげることができる。また弥生土器を伴う遺構は、78土坑・112土坑・157溝があげられる。また近世の170溝からも出土している。しかし、第1調査区から出土している石器の大部分はその形状から縄文時代のものが占めており、弥生時代などに比定される遺構から出土している石器もその大半は縄文時代のものが占めている。

## 第5章 方形周溝墓の調査－第5調査区－

### 第1節 弥生時代の遺構

第5調査区の北部で弥生時代の遺構を多数検出した。現耕作土を除去すると直ちに地山面があらわれ、ここに方形周溝墓、溝、土坑、ピットなどが遺存していた。

方形周溝墓1 調査区の北端付近で、墳丘の長辺（東西方向）約15.8m、短辺（南北方向）約10.9mを測る大型の方形周溝墓を検出した。後世の削平により主体部はもとより墳丘を構成する盛土も確認することはできなかったが、周溝は墳丘部の四周すべてで検出した。この遺構は単体で完結している。北側に分布する溝群によって構成されると推定される複数の方形周溝墓との先後関係は必ずしも明らかではないが、後述するように北側に分布する方形周溝群の形状から、先行する方形周溝群の一部を取り込んで築造したものと考えられる。方形周溝墓1は周囲の方形周溝墓群とは隔絶した存在であることが、その規模と配置からうかがうことができる。

墳丘の西辺と南辺はほぼ直交しているが、西辺と北辺はやや開いているものの、墳丘の方台部は整った長方形を呈す。

周溝（1溝）は、墳丘側ではほぼ直線的に走るが、外側はやや湾曲しており、この方形周溝墓の基本的な形態を規定している。周溝は北辺の東側で幅約2.8m、深さ約0.2m、中央部では幅約4.4m、深さ約0.6m、北西隅では幅約2.4m、深さ約0.2mを測る。西辺は中央部で幅約3.7m、深さ約0.3m、南西隅で幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。南辺は、西側で幅約2.8m、深さ約0.2m、中央部で幅約3.5m、深さ約0.5m、東側で幅約2.0m、深さ約0.2mを測る。東辺は幅約2.1m、深さ約0.1mを測る。

遺存状態が良好な北・南・西の3辺では中央部の幅がもっとも広く、周溝の内側はほぼ直線であるのに対して、外側が湾曲するという全体の形状を形作っている。

周溝の法面は、いずれの場所においても墳丘側がやや急傾斜に立ち上がり、外側はなだらかになる。周溝の底部は起伏に富み、北南2辺では、幅がもっとも広がる中央部において深度も大きくなる。周溝の隅部は浅く、周溝の東辺がこの部分で途切れるのも、本来周溝の底部が浅い上に、遺構の東側でより後世の削平が大きいことに起因していると推測される。

周溝は、いずれの地点においても3～4層に分別可能なシルト～微砂層によって比較的短時間に埋没したものと考えられる。周溝から出土する弥生土器などの遺物も底面に密着したのではなく、これらは底面から浮いた状態で検出され、出土位置やその状況から墳丘の方向から流入したものであると判断された。また周溝埋土の最上部には褐色の粘土層（褐色10YR4/4粘土）が一様に堆積している。これは周溝が埋没する過程で長期にわたってその痕跡が残り、そこに堆積したものと考えられる。

遺物は、周溝北辺の中央よりやや西側で甕底部（111）、西辺の中央より北側で壺底部（110）、甕底部（112）、南辺の中央部から壺（107～109）が出土し、また周溝埋土からサヌカイト製石核（125）と刃器（126）が検出された。

方形周溝墓2 方形周溝墓1の北側で検出された東西・南北に走る溝群はいくつかの方形の区画を構成しており、これらが数基の方形周溝墓に復元できる可能性がある。しかしいずれも後世の削平を受け墳丘は遺存していない。



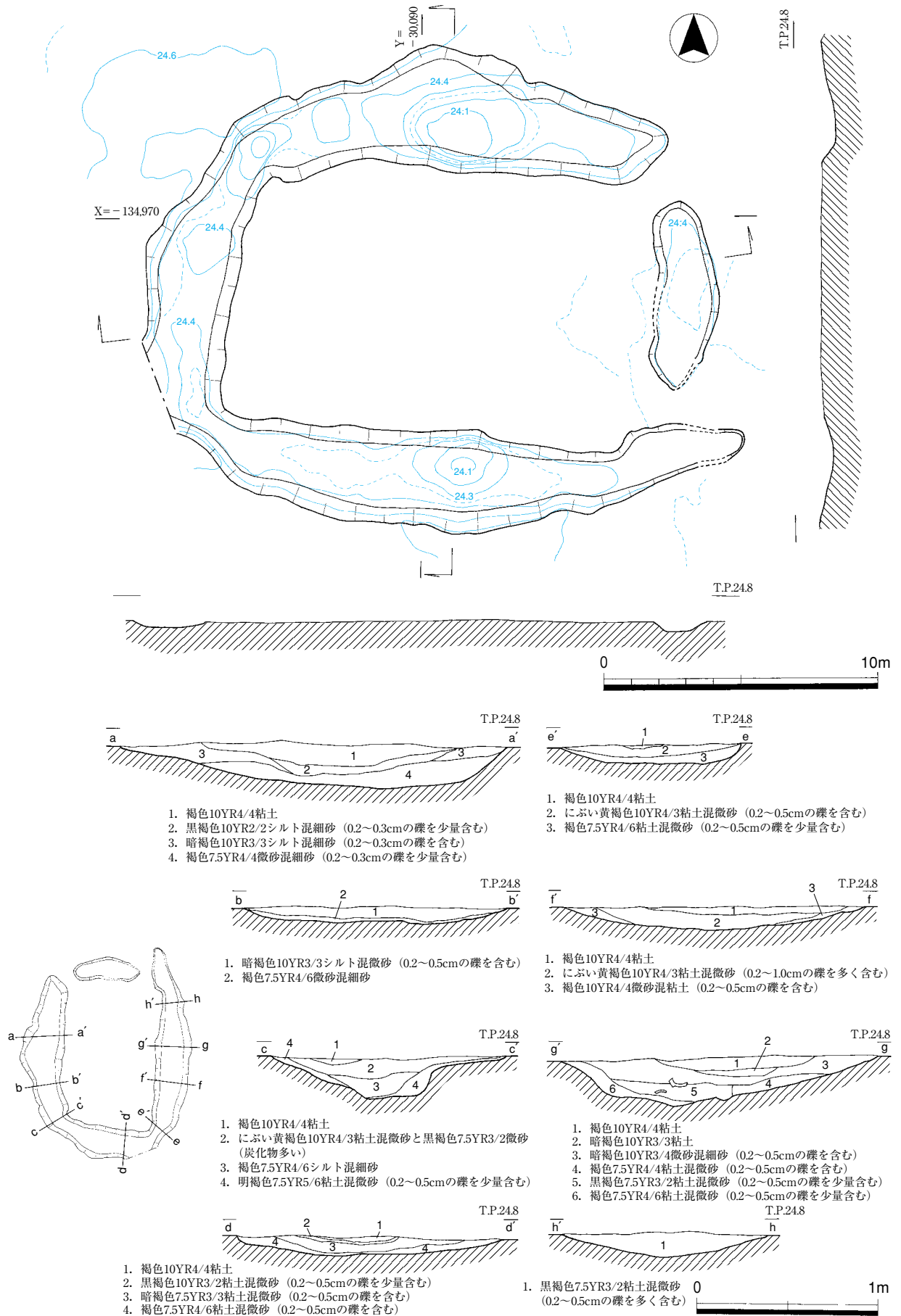


図27 方形周溝墓1実測図

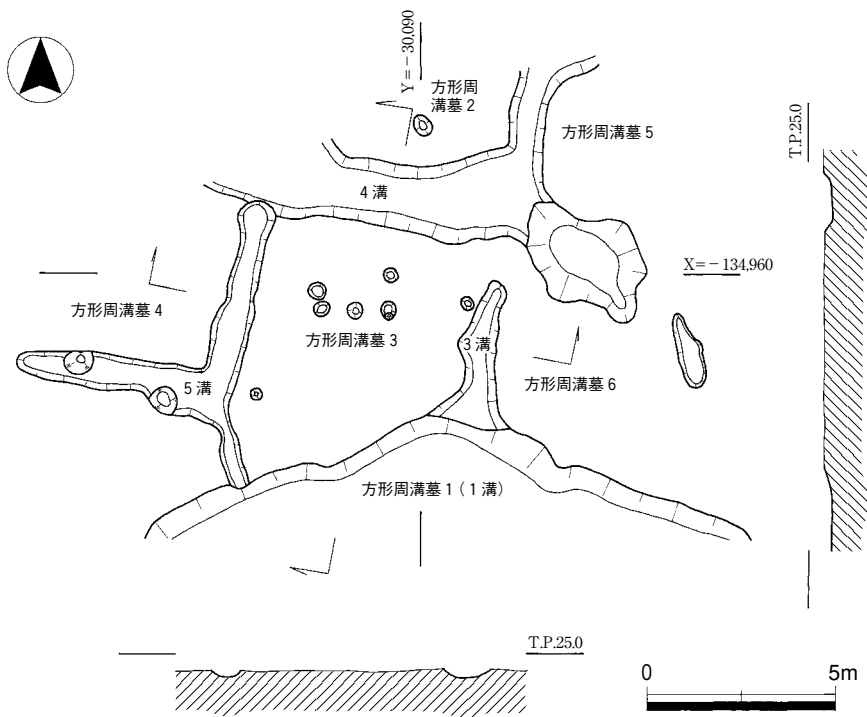


図28 方形周溝墓群実測図

4溝は、東西方向の溝とそこからほぼ直行して分岐する南北方向の溝からなっている。このうち南北溝を挟んで西側の区画を方形周溝墓2とする。墳丘部の大部分は調査区外に延びているが、隣接する第3調査区で検出された遺構に連続するものと考えられる。東西溝の西端で、第4調査区の19溝（南北溝）、さらに20溝（東西溝）につながり、南北溝も第4調査区の18溝に連続するものと推定される。これによって方形周溝墓2の墳丘は一辺5m前後に復元できる。

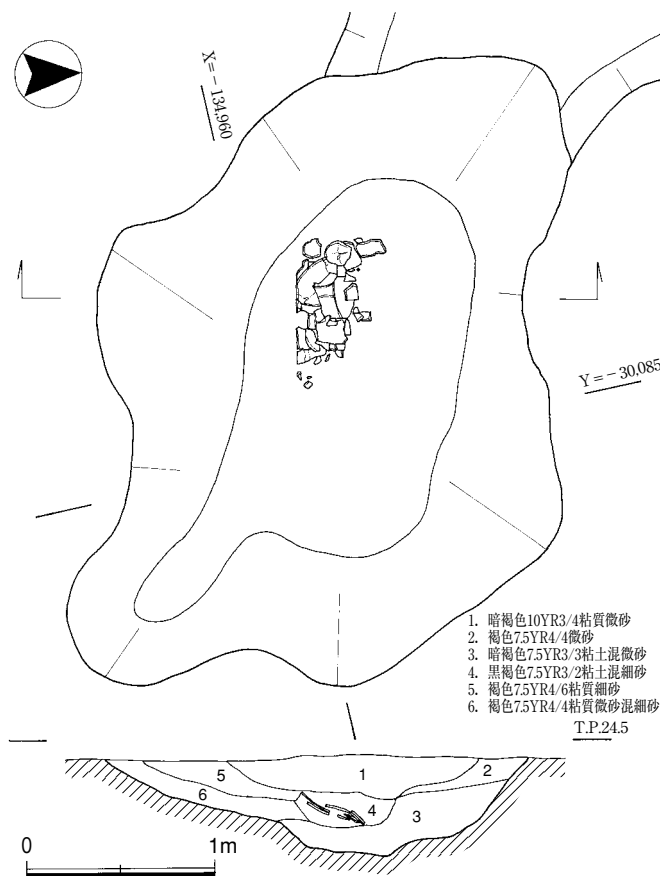


図29 4溝土器出土状況実測図

東西溝は、幅約1.7m、深さ約0.2mを測る。東西溝は調査区の端で北側へ向きを転換しはじめており、東側を限る南北溝は幅約0.9m、深さ約0.1mを測る。埋土は、南北溝も東西溝も褐色10YR4/4粘土混微砂である。南北溝からは、弥生時代第Ⅱ期の壺(113~115)や甕の底部(116・117)が出土している。

**方形周溝墓5** 方形周溝墓5は4溝を構成する東西溝の東部分と南北溝で画されている。南北溝は調査区北端部分で東側へ湾曲していることから、南北4m前後の墳丘が復元できる。東西溝の東端は、東西4.0m前後、南北2.5m前後、深さ約0.5mを測る土坑状の落ち込みとなる。この遺構が砂質土によってある程度埋没した時点で、そこを掘りくぼめて底部近くに焼成後の穿孔を施した弥生時代第Ⅱ期の大型の壺(118)が据えられていた。この土器は土器棺として使われた可能性がある。

方形周溝墓4 「L」字形に屈曲する5溝によって東辺と南辺を、4溝の東西溝西部分によって北辺を構成する。東西約4.5m、南北数mの規模をもつと推定される方形周溝墓である。5溝は幅約1.0m、深さ0.1～0.3mを測る。埋土は東西溝、南北溝とも褐色7.5YR4/4粘土混微砂。

方形周溝墓3 方形周溝墓3は、4溝の東西溝と3溝、5溝の南北溝部分とそこから分岐するやや東向きの南北溝で構成される。東西5m前後、南北6m前後を測るが、南辺は方形周溝墓1と重複するため詳細は不明。3溝は、幅は0.5m～2.5m前後であり、南側で幅を広げている。深さは0.1m前後。出土した弥生土器は細片であるが、櫛描直線文が施されていた。

方形周溝墓6 4溝の東西溝と3溝、方形周溝墓1に囲まれた範囲、東西数m、南北現存長3m前後を測る。

方形周溝墓1の特徴 周溝がほぼ全周にわたって検出された方形周溝墓1は、長辺約15.8m、短辺約10.9mという卓越した規模の墳丘をもつものであった。同時期（弥生時代第Ⅱ期）の畿内地域の方形周溝墓資料を見渡しても、比較的大きな規模をもつものである。周溝は墳丘側では直線的に走り、外側ではわずかに屈曲して円弧を描き、また墳丘側ではより急な傾斜の法面をもつものに対して、外側の法面の傾斜は緩い。また周溝の底部は起伏にとみ、周溝が外側に広がる部分がやや深くなるという傾向をもつ。

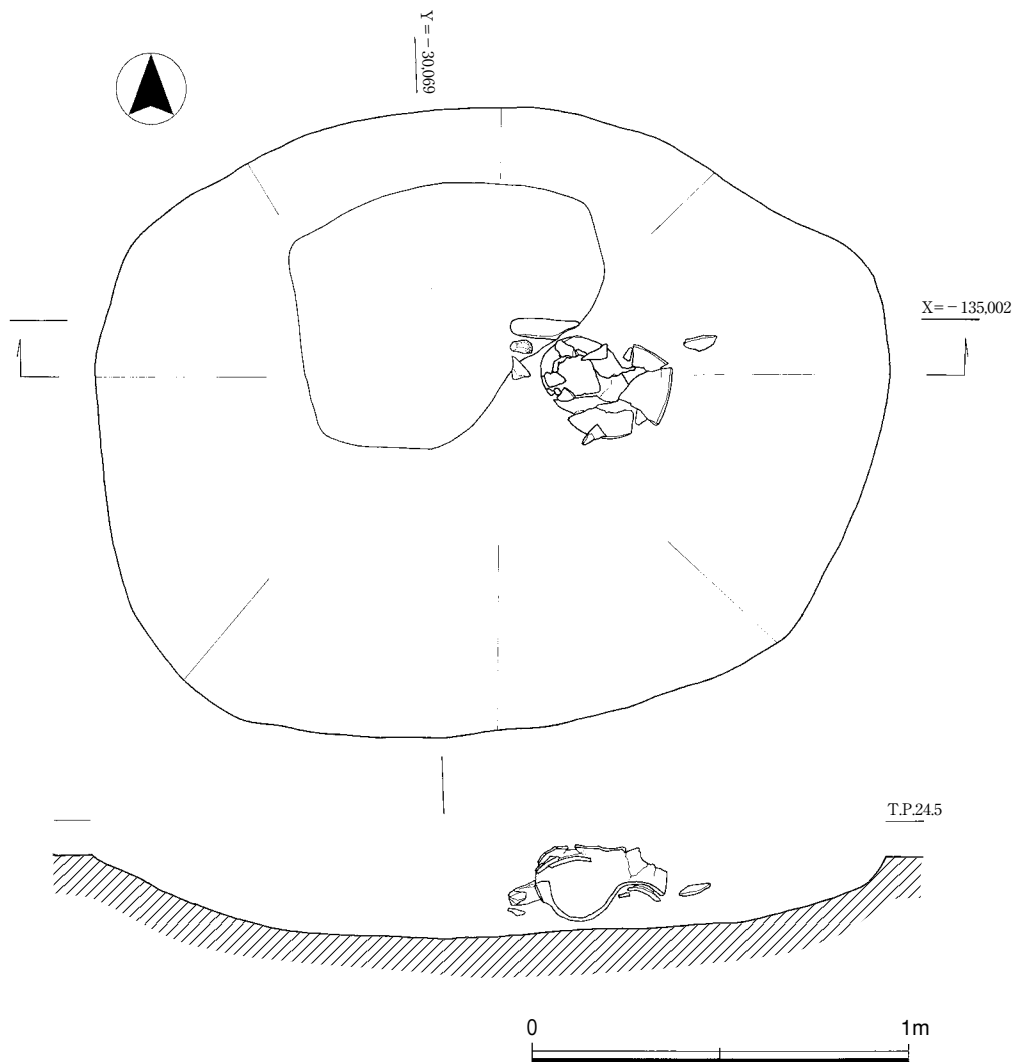


図30 7土坑土器出土状況実測図

このような方形周溝墓1の形態的な特徴が、北河内地域、北摂地域、南山城地域で検出される同様な遺構との共通性や差異についての検討は今後の課題である。

**方形周溝墓1と小型の方形周溝墓** 方形周溝墓1の北側で検出された5基の方形周溝墓は、一辺5m前後の規模をもち、相互に共有する周溝は規模も小さい。この5基に復元できる方形周溝墓は並立的なあり方をもつ。出土遺物や遺構の切り合い関係によって明確な先後関係は設定できないが、その平面形状から判断して、方形周溝墓1が先行する小型の方形周溝墓の領域に割り込んで造営したと考える。規模のみならずその占地においても方形周溝墓1は卓越した存在であったと推定する。

**7土坑** 第5調査区中央部東側で検出した。東西方向に主軸を持つ、平面形が楕円形を呈す土坑である。南北約1.6m、東西約2.1m、深さ約0.25mを測る。断面は浅い皿形を呈す。中央よりやや東寄りほぼ完形の広口壺(123)が横に倒れた状態で出土した。また埋土中からは甕片(122)も出土している。埋土は褐色系の砂質土(褐色10YR4/4粘質シルト混細砂)一層である。遺物はいずれも弥生時代第Ⅱ期に属する。

**6溝** 6溝は、幅0.8~1.5m、深さ約0.2mを測り、長さ約5.5mが検出された。埋土は暗褐色系の砂質土(暗褐色7.5YR3/4細砂)。甕(119・120)と壺の底部(121)が出土している。

**8溝** 8溝は、6溝の南方5~7m前後離れて検出された。両者の距離は西側が短く「ハ」の字状に開く。幅0.8~1.2m、深さ約0.1mを測る。長さ約8.5mを検出。弥生土器片が出土。埋土は暗褐色系の砂質土(暗褐色10YR3/4粘質シルト)であり、6溝と比較的よく類似する。その位置関係から6溝と8溝は1基の方形周溝墓の一部を構成する可能性がある。

**10溝** 10溝は、幅約1.0m、深さ約0.2mを測る。長さ約3.1mを検出。埋土は褐色系の砂質土(褐色10YR4/4粘質シルト)。弥生土器片が出土。

**24土坑** 24土坑は、直径約0.7mを測り、ほぼ円形である。深さは約0.1mを測る。埋土は暗褐色系の砂質土(暗褐色7.5YR3/4シルト)。弥生土器片が出土。

## 第2節 弥生土器

107~112は方形周溝墓1の周溝(1溝)から出土した。107~109は壺である。107は頸部が長く伸びる広口壺で体部上半から頸部にかけて4条/幅0.7cmのやや太い櫛描直線文を8帯以上巡らす。外面は粗い縦ハケ調整され、体部最大径付近と頸部上端に部分的にヘラミガキを施す。体部内面下半は細かいハケののちナデを施す。底面はややドーナツ状を呈し、丁寧にナデ仕上げをしている。108は、頸部が筒状に窄まる特異な形態に復原したが、小片を組み合わせたため推測の域を出ない。体部最大径付近から上半に8条/幅1.2cmの櫛描直線文を8帯以上巡らす。外面はハケ後、部分的にヘラミガキを施す。内面は体部をハケ、頸部は指頭圧痕を多用する。109は小片であるが、5条/1.1cmの櫛描直線文を横向きに3帯以上、それに交差するように縦向きに1帯以上施している。110は壺の底部で、やや上げ底を呈す。111・112は甕の底部で、111は外面縦ハケ後ヘラミガキを施し、底面には砂粒の圧痕が付着する。112は外面縦ハケで、底面には木葉圧痕をナデ消した跡が見られる。

113~118は方形周溝墓5の周溝(4溝)から出土した。この内、118は周溝東端で土坑状に深くなった部分に据えられた状況で出土した。113~115は壺である。113は、口縁端部は凹んだ面を持ち、下方に粘土を貼り足すことで拡張する。端面はヘラミガキした後、上下端に刻み目を施す。上端の刻み目は

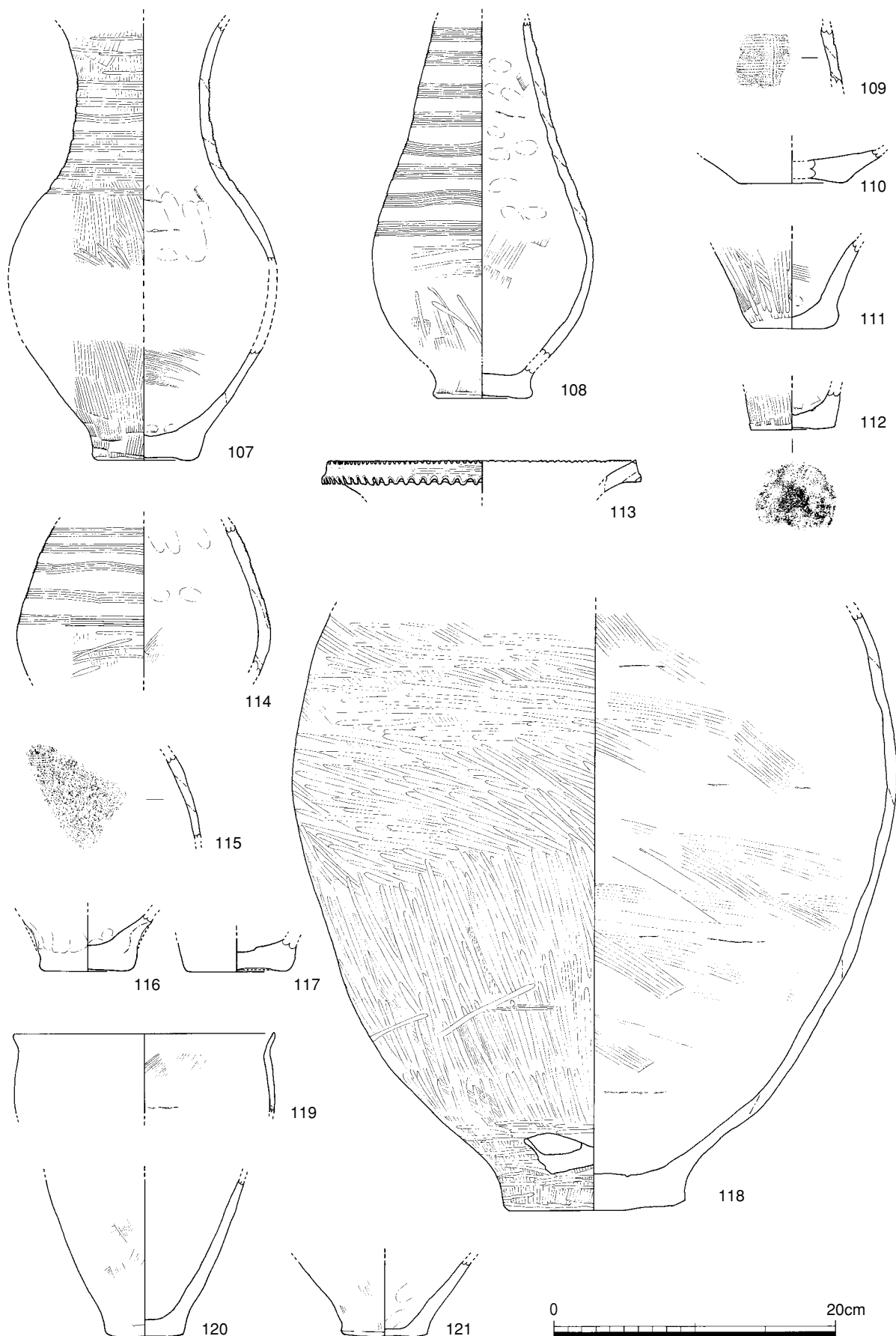


図31 第5調査区出土の弥生土器（1）

浅くてピッチが細かく、下端は深く粗い。114は体部上半に5条／幅0.8cmの櫛描直線文を5帯以上巡らす。外面は縦ハケ上を疎に横ヘラミガキを施す。115は体部の小片で、表面も大部分剥離するが2帯以上の櫛描直線文が認められる。116・117は甕の底部で、116は底面をヘラミガキし、117は底面が剥落している。118は、大型の壺で、やや縦長の楕円形の体部を持ち、上半を欠損するがほぼ全周する。体部最大径43.0cm、残存高42.4cmを測り、器壁は大きさに比べてやや薄い。外面は縦ハケの後、横・縦方向に密にヘラミガキを施す。内面は斜めハケ後一部ナデを施す。底面はナデを施し、平滑に仕上げる。底部近くに幅約4cmの不整円形の欠失が認められ、焼成後における意図的な穿孔の可能性もある。出土状態から土器棺として使われたと推定される。

119～121および124は6溝から出土した。119・120は甕である。119は器表が磨滅するが、短く外反する口縁部を持つ。生駒山西麓産の胎土である。120は外面に斜めハケ目が若干残る。121は壺の底部と推定されるが、底面は薄く仕上げられ、砂粒の圧痕が付着する。124は甕の底部で、外面に斜めハケ、底面はナデる。生駒山西麓産の胎土を有している。

122・123は7土坑より出土した。123はほぼ完形の広口壺である。口径21.6cm、底径5.7cm、器高33.5cm、体部最大径19.2cmを測る。体部の片側が著しく荒れており、頸部内面も器表の剥離が著しい。体部は算盤玉形に横にやや張る

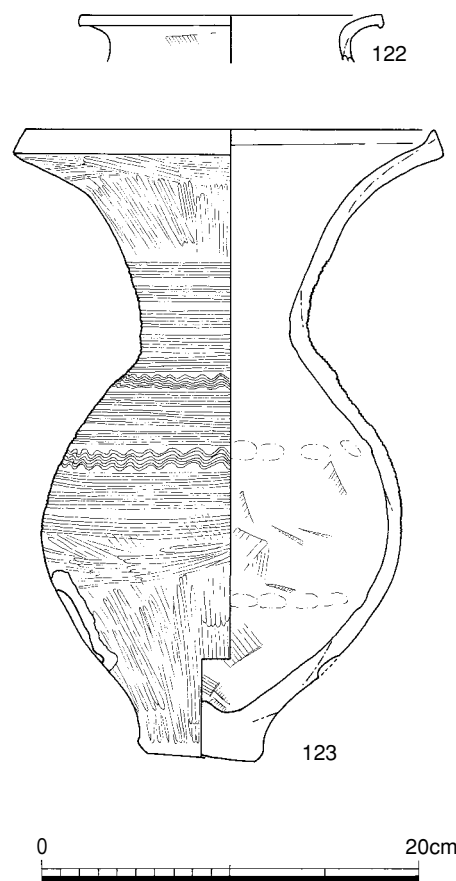


図32 第5調査区出土の弥生土器（2）

表4 第5調査区出土の弥生土器観察表

	色調		胎土
	内面	外面	
107	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	石英～2mm多、長石～4mm多、チャート～0.5mm少、雲母～1mm少
108	2.5Y6/3にぶい黄	10YR6/2灰黄褐	石英・長石～2mm多、チャート～1mm少、赤色粒～3mm多
109	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	石英～1mm多、長石～2mm多、雲母～1mm多
110	10YR4/1褐灰	10YR6/3にぶい黄橙	石英～1mm多、長石～3mm多、チャート・雲母・赤色粒～0.5mm少
111	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	石英～1mm多、長石・雲母～2mm多
112	2.5Y6/2灰黄	10YR5/2灰黄褐	石英～1mm多、長石～2mm多、チャート～0.5mm少、雲母～1mm少
113	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	石英～1mm多、長石～3mm多、雲母～0.5mm少
114	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	石英～2mm多、長石～3mm多、チャート～3mm少、角閃石～2mm、雲母～1mm
115	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	石英～2mm多、長石～3mm多、チャート～0.5mm少
116	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/4にぶい黄褐	石英・長石～3mm、チャート・角閃石～2mm少、雲母～3mm少
117	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR5/3にぶい褐	石英～2mm多、長石～4mm多
118	10YR6/4にぶい黄橙	2.5YR6/3にぶい橙	石英・長石～3mm多、チャート～4mm少、赤色粒～0.5mm
119	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	石英～0.5mm多、長石～1mm多、角閃石～3mm多、雲母～0.5mm少
120	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	石英～2mm多、長石～3mm多、赤色粒～0.5mm少
121	10YR6/4にぶい黄橙	2.5YR2灰白	石英・長石～3mm、チャート・雲母～2mm少、赤色粒～1mm少
122	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y5/2暗灰黄	石英～0.5mm多、長石～3mm多、チャート・赤色粒～0.5mm少
123	10YR6/3にぶい黄橙	2.5Y6/3にぶい黄	石英～3mm多、長石～4mm多、チャート～0.5mm少
124	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	石英～2mm多、長石～3mm多、赤色粒～0.5mm少

形状を呈し、頸部は絞られた後外反しつつ大きく開く。頸部がやや傾いて作られている。口縁端部は上方に拡張する。体部中位から頸部に6条/0.9cmのやや太い櫛描直線文を11帯巡らし、その間に2帯の波状文を挿入する。外面はハケ後、縦・横方向に丁寧なヘラミガキを施す。内面下半は斜めハケメを施す。底部は相対的に小さく、突出気味で、底面は分厚く作られる。体部下半には長径約4cmの楕円形の欠失が認められるが、穿孔かどうかは判然としない。122は甕で、口縁部はゆるやかに水平方向に外反し、端面をもつ。外面に縦ハケが僅かに残る。

これらの弥生土器は、形態及び文様構成から弥生時代第Ⅱ期の所産である。なかでも123は、算盤玉状の体部や口縁端部の拡張形状などからやや新しい傾向を示す。

### 第3節 弥生時代の石器

第5調査区からサヌカイト片などが出土しているが、明確な石器はここに示した2点だけである。この石器は、どちらも方形周溝墓1の周溝である1溝埋土からの出土したものであり、これら石器の該当時期を弥生時代中期のはじめ頃とすることができるが、著しく風化したものがみられる。

125は石核である。上端面に自然面を残し、山形に作り出した打面から目的剥片を得ようとしているが、うまく行かなかったようである。最終的には無秩序に打撃を加えて放棄している。石材はサヌカイトであるが金山産の可能性がある。長さ3.7cm、幅6.7cm、厚さ2.1cm、重さ71.5gである。126は刃器である。自然面を打面として得た横長剥片を素材とし、刃部は両面加工である。石材の質によるところが大きいのもかもしれないが、弥生時代のものともみるには風化が進んでいるようである。長さ6.5cm、幅3.9cm、厚さ1.3cm、重さ32.74gである。

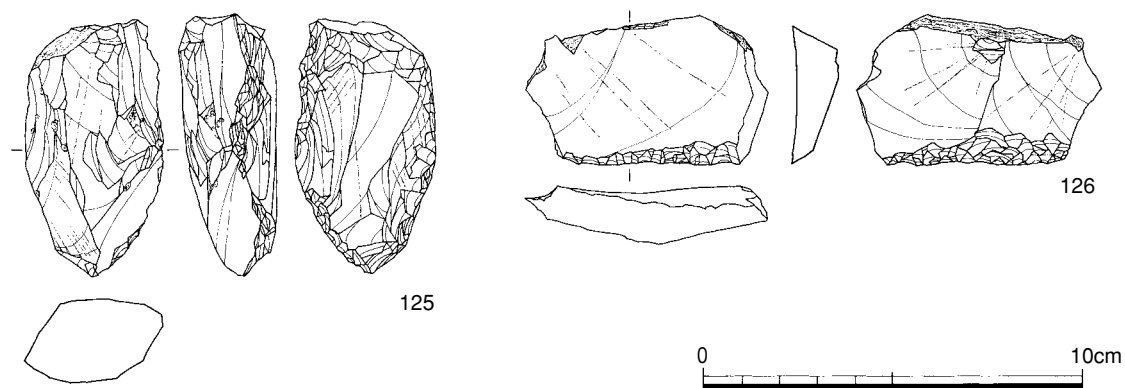


図33 第5調査区出土の石器

## 第6章 上の山遺跡出土土器の胎土分析

上の山遺跡から出土した弥生土器および縄文土器を対象として、その胎土の特性を理化学的に明らかにするため、平成17年度に蛍光X線分析、平成18年度に薄片観察分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。分析に供した試料には、上の山遺跡出土土器の他、地域性を比較するため、関係諸機関より提供を受けた近隣弥生遺跡出土土器を含んでいる。本章では、まず、第1・2節において、パリノ・サーヴェイ株式会社による分析結果を、委託報告書からの抜粋というかたちで示し、続く第3節において、すでに報告した弥生土器の薄片観察分析及び須恵器の蛍光X線分析データ（(財)大阪府文化財センター2007）を加えて、上の山遺跡出土土器の胎土分析について統括を行う。

### 第1節 蛍光X線分析

#### 1. 試料

本分析に供した試料を表5に示す。合計30点あり、この内、17点は(財)大阪府文化財センターが発掘調査を実施した上の山遺跡03-1調査区の685土器溜り出土品を主体としている。この他、上の山遺跡第5調査区、交野市私部南遺跡04-1調査区、寝屋川市太秦遺跡・高宮八丁遺跡、枚方市招提中町遺跡、四條畷市葺屋北遺跡、大東市中垣内遺跡の各弥生遺跡の出土品で構成される。試料の大半は、弥生時代中期前葉（畿内第Ⅱ様式）に比定され、若干、弥生時代前期後葉と中期後葉を含む。なお、本試料については同時に薄片観察分析も行っており、その成果は既に報告済みである（パリノ・サーヴェイ株式会社・矢作健二2007）。

#### 2. 分析方法

分析は、波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析である。以下、手順を述べる。

##### a) 測定元素

酸化物測定によるケイ素、チタン、アルミニウム、鉄、マンガン、マグネシウム、カルシウム、ナトリウム、カリウム、リンの主要元素およびルビジウム、ストロンチウム、ジルコニウム、バリウムの各微量元素である。

##### b) 装置

理学電機工業社製RIX1000（FP法のグループ定量プログラム）

##### c) 試料調整

試料を振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉碎し、105℃で4時間乾燥させた。この微粉碎試料についてガラスビードを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビードサンプラー（3491A1）

溶剤及び希釈率；融剤（ホウ酸リチウム）5.000 g：試料0.500 g

剥離剤；Li I（溶融中1回投入）

溶融温度；1200℃ 約7分

##### d) 測定条件



表5 蛍光X線分析試料一覧

試料番号	遺跡・調査区名	遺構名	報告書番号	器種	時期	備考
101	上の山03-1	685土器溜り	図102-447	壺	弥生中期前葉	生駒山西麓産？
102	上の山03-1	685土器溜り	図103-449	壺	弥生中期前葉	
103	上の山03-1	685土器溜り	図107-508	甕	弥生中期前葉	白色系
104	上の山03-1	685土器溜り	図106-496	甕	弥生中期前葉	
105	上の山03-1	685土器溜り	図104-461	壺	弥生中期前葉	
107	上の山03-1	685土器溜り	図108-516	甕	弥生中期前葉	
108	上の山03-1	685土器溜り	図106-491	甕	弥生中期前葉	
109	上の山03-1	685土器溜り	図110-536	甕	弥生中期前葉	白色系
110	上の山03-1	685土器溜り	図107-498	甕	弥生中期前葉	生駒山西麓産？
111	上の山03-1	685土器溜り	図107-499	甕	弥生中期前葉	
113	上の山03-1	685土器溜り	図102-446	壺	弥生中期前葉	
114	上の山03-1	685土器溜り	図102-431	壺	弥生中期前葉	白色系
115	上の山03-1	685土器溜り	図102-440	壺	弥生中期前葉	生駒山西麓産
116	上の山03-1	685土器溜り	図104-462	壺	弥生中期中葉？	
117	上の山03-1	685土器溜り	図108-521	甕	弥生中期前葉	
118	上の山03-1	685土器溜り	図106-478	甕	弥生中期前葉	
120	上の山03-1	685土器溜り	図110-541	甕	弥生中期前葉	
121	上の山03-1	258土坑	図75-216	甕	弥生中期前葉	赤色系
122	上の山第5調査区	7土坑	図32-123	壺	弥生中期前葉	黄色系
123	私部南04-1	2区418流路(7-2b層)	図42-7	壺	弥生前期後葉	
125	太秦	住居1(7土坑)	図版46-12	鉢	弥生中期後葉	黄色系
127	招提中町98・99	24号方形周溝墓	144	壺	弥生前期後葉	黄色系
131	招提中町98・99	SK1550	361	壺	弥生中期前葉	淡黄色系クサリ礫舎
132	薮屋北05-2	E地区	溝09001	甕	弥生前期後葉	
133	高宮八丁1次	D-4区灰黒色粘質土層	図74-27	壺	弥生前期後葉	
135	高宮八丁2次	土坑122	図版60-11	甕	弥生中期前葉	河内型
138	高宮八丁3次	溝106	図版61-15	甕	弥生中期前葉	在地型
141	中垣内	BSD-1	B1	壺	弥生前期後葉	
143	中垣内	BSD-1	B5	壺	弥生前期後葉	
144	中垣内	BSD-1	B20	壺	弥生前期後葉	

(試料出典)

上の山遺跡03-1調査区

(財)大阪府文化財センター2007 『上の山遺跡』Ⅱ (財)大阪府文化財センター調査報告書第155集

上の山遺跡第5調査区

本報告書

私部南遺跡04-1調査区

(財)大阪府文化財センター2007 『私部南遺跡』Ⅰ (財)大阪府文化財センター調査報告書第154集

太秦遺跡

(財)大阪府文化財センター2006 『太秦遺跡・太秦古墳群』Ⅱ (財)大阪府文化財センター調査報告書第143集

招提中町遺跡98・99年度

大阪府教育委員会2002 『招提中町遺跡』

薮屋北遺跡

大阪府教育委員会調査

高宮八丁遺跡1次

寝屋川市1998 『寝屋川市史』第1巻

高宮八丁遺跡2次

寝屋川市教育委員会1992 『高宮八丁遺跡』Ⅱ (土坑122)

高宮八丁遺跡3次

寝屋川市教育委員会1987 『高宮八丁遺跡』 (溝106)

中垣内遺跡

大東市教育委員会1990 『中垣内遺跡発掘調査報告書』

X線管；Cr（50Kv－50mA）

スペクトル；全元素K $\alpha$

分光結晶；LiF, PET, TAP, Ge

検出器；F-PC, SC

雰囲気；真空

計数時間；PeaK40sec, Back20sec

なお、計測は1試料につき3回実施し、その平均値を各試料の計測値とする。

### 3. 分析結果

結果を表6に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す理由により元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした10種類の散布図を作成した（これらの散布図は本報告書には掲載していない）。

a) 化学組成中最も主要な元素（SiO<sub>2</sub>・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）

b) 粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石、斜長石）の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素であるCaO、Na<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>Oの3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合（Na<sub>2</sub>O + K<sub>2</sub>O） / （CaO + Na<sub>2</sub>O + K<sub>2</sub>O）を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合K<sub>2</sub>O / （+ Na<sub>2</sub>O + K<sub>2</sub>O）を縦軸とする。

c) 輝石類や黒雲母、角閃石などの有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO<sub>2</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、MgOを選択し、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を分母としたTiO<sub>2</sub>、MgOの割合を見る。

d) 各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-SrとZr-Baとする。

散布図の示す結果は以下の通りである。

#### 1) 上の山遺跡出土試料のSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>散布図

SiO<sub>2</sub>64% - Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>18%付近にやや集まる傾向が認められるが、各試料は互いに分離が悪く、一つの集団とみることができる。

#### 2) 上の山遺跡出土試料の長石類主要元素の散布図

試料番号115以外の試料は、互いに分離が悪く、一つの集団と見ることができる。試料番号115は、この集団に比べてCaOが高く、K<sub>2</sub>Oの低い位置にある。

#### 3) 上の山遺跡出土試料の有色鉱物主要元素の散布図

試料番号115と試料番号104、121、122以外の試料は、互いに分離が悪く、一つの集団と見ることができる。試料番号115は、この集団よりもTiO<sub>2</sub>が低くMgOの高い領域に位置し、試料番号104、121、122は、集団よりもTiO<sub>2</sub>とMgOの低い位置に離れている。

#### 4) 上の山遺跡出土試料のRb-Sr散布図

Rbが70～110ppm、Srが50～110ppmの領域にほとんどの試料が集まるが、この集団から離れた位置に試料番号113および115がある。

#### 5) 上の山遺跡出土試料のZr-Ba散布図

Zrが130～250ppm、Baが500～700ppmの領域にほとんどの試料が集まるが、この集団から離れた位置に試料番号110および118がある。

試料 番号	主要元素											微量元素				
	SiO <sub>2</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na <sub>2</sub> O (%)	K <sub>2</sub> O (%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	Ig.loss (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)	
101	66.82	0.62	16.97	1.91	0.01	0.40	0.55	1.00	2.62	0.02	9.08	94	101	235	572	
102	64.27	0.70	17.72	2.28	0.02	0.40	0.63	0.89	2.18	0.33	10.58	95	102	205	649	
103	63.66	0.75	18.75	1.75	0.01	0.23	0.44	0.58	1.97	0.32	11.54	76	88	170	556	
104	64.05	0.75	16.93	4.42	0.02	0.39	0.34	0.58	2.37	0.34	9.81	106	74	198	636	
105	64.97	0.69	17.92	2.37	0.01	0.32	0.57	0.94	2.26	0.17	9.78	96	99	184	567	
107	62.23	0.75	19.73	1.80	0.01	0.27	0.39	0.61	1.95	0.32	11.94	83	76	180	548	
108	60.92	0.75	19.31	3.08	0.01	0.46	0.50	0.62	1.83	0.28	12.24	88	92	137	615	
109	66.49	0.75	20.06	2.83	0.01	0.47	0.55	0.80	2.27	0.09	5.68	97	87	168	485	
110	66.45	0.63	16.91	1.83	0.01	0.34	0.68	1.40	2.31	0.35	9.09	87	111	294	734	
111	64.48	0.67	17.04	2.46	0.02	0.29	0.62	1.06	2.38	0.53	10.45	99	97	185	621	
113	64.06	0.71	18.23	2.14	0.01	0.21	0.61	1.06	1.82	0.21	10.94	62	104	223	643	
114	66.28	0.74	17.62	2.34	0.01	0.30	0.56	1.22	2.56	0.46	7.91	107	101	215	580	
115	61.83	1.13	16.06	6.86	0.17	2.65	2.57	1.20	1.53	0.38	5.62	70	153	199	504	
116	70.71	0.64	14.78	1.54	0.01	0.18	0.24	0.42	2.09	0.17	9.22	76	67	250	588	
117	59.72	0.89	18.74	3.14	0.02	0.64	0.60	0.65	2.31	0.46	12.83	87	89	158	717	
118	68.04	0.72	15.38	1.70	0.01	0.21	0.36	0.74	2.44	0.29	10.11	88	81	295	642	
120	63.91	0.68	17.44	2.59	0.01	0.28	0.47	0.69	2.00	0.36	11.57	91	103	175	585	
121	66.67	0.73	14.26	5.13	0.01	0.22	0.20	0.52	2.69	0.39	9.18	96	56	219	564	
122	57.31	0.75	19.74	5.17	0.09	0.36	0.90	0.96	2.18	0.08	12.46	88	97	199	535	
123	69.35	0.61	14.41	1.32	0.02	0.44	0.45	0.47	2.59	0.78	9.56	106	80	306	870	
125	66.09	0.84	15.57	3.17	0.01	0.17	0.30	0.79	2.10	0.09	10.87	76	74	270	518	
127	66.46	0.64	16.12	2.85	0.02	0.32	0.58	0.80	2.18	0.11	9.92	105	75	214	548	
131	68.49	1.11	14.49	2.89	0.01	0.18	0.34	0.78	2.08	0.54	9.09	71	80	245	527	
132	63.27	0.76	18.68	4.36	0.05	0.76	1.31	1.62	2.55	0.81	5.83	128	156	222	860	
133	59.78	0.70	18.36	4.61	0.03	0.64	1.07	1.30	1.92	0.55	11.04	101	136	154	581	
135	59.29	0.72	18.79	3.86	0.02	0.50	0.82	1.05	2.20	0.82	11.93	103	103	174	693	
138	64.17	0.79	15.72	3.57	0.03	0.70	0.52	0.67	2.14	1.07	10.62	101	284	289	1414	
141	54.87	1.38	17.15	6.94	0.12	2.50	2.83	0.76	1.71	2.55	9.19	61	253	157	1340	
143	62.57	0.85	18.66	5.51	0.06	0.74	0.86	0.58	2.41	1.63	6.13	96	151	262	1379	
144	59.26	1.02	21.38	6.23	0.04	1.07	0.94	0.62	2.26	1.17	6.01	115	144	221	1080	

表 6 蛍光 X 線分析結果 (化学組成)

#### 6) 各遺跡出土試料のSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>散布図

私部南・太秦・招提中町遺跡の試料は、SiO<sub>2</sub>の比較的高い領域に分布し、葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡の試料はAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>に比較的高い領域に分布する。ただし、高宮八丁遺跡の試料番号138はSiO<sub>2</sub>の比較的高い領域に近い位置にあり、また、中垣内遺跡の試料番号141は、SiO<sub>2</sub>の比較的低い領域（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>も高くはない）に1点だけ離れて位置する。

#### 7) 各遺跡出土試料の長石類主要元素散布図

中垣内遺跡の試料番号141がCaOの高い領域に1点だけ離れて位置するほかは、試料間の分離は明瞭ではない。ただし、上述の散布図で認められた遺跡間でくくると、私部南・太秦・招提中町遺跡のグループに比べて、葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡のグループはややCaOの高い方へずれた位置に分布している。また、高宮八丁遺跡の試料番号138は、私部南・太秦・招提中町遺跡のグループの領域に重複した位置にある。

#### 8) 各遺跡出土試料の有色鉱物主要元素の散布図

6) 7) で分離した遺跡のグループをみると、葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡の試料は比較的まとまった領域に位置する。ただし、中垣内遺跡の試料番号141は、ここでも1点のみ離れた位置にある。一方、私部南・太秦・招提中町遺跡の試料は、私部南遺跡の試料番号123を除けば、葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡のグループに比べてTiO<sub>2</sub>が高くMgOの低い領域に分布する。私部南遺跡の試料番号123はTiO<sub>2</sub>もMgOも高い領域に位置する。

#### 9) 各遺跡出土試料のRb-Sr散布図

6)～8) で分離した遺跡のグループをみると、Srが100ppmのラインを境として、それより上位に葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡の試料が分布し、それより下位に私部南・太秦・招提中町遺跡の試料が分布する。ただし、高宮八丁遺跡の試料番号138と中垣内遺跡の試料番号141は集団から離れた位置にある。

#### 10) 各遺跡出土試料のZr-Ba散布図

6)～8) で分離した遺跡のグループをみると、図の左下隅と右上隅を結ぶ対角線を境として、それより上位に葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡の試料が分布し、それより下位に私部南・太秦・招提中町遺跡の試料が分布する。ただし、中垣内遺跡の試料番号141は集団から離れた位置にある。

### 4. 薄片観察結果（(財)大阪府文化財センター2007）との関連性

胎土の元素組成は、薄片観察で認められた鉱物片・岩石片の種類構成と密接に関連する。上の山遺跡出土試料では元素構成によって明確にグルーピングすることはできず、試料番号115の特異性のみを指摘するにとどまった。この試料は、薄片観察の結果では、生駒山西麓産の可能性のあるⅣ類に分類されており、元素組成の特異性と一致する。一方、薄片観察でⅡ類に分類された試料番号120とⅢ類に分類された試料番号117は、元素組成では、在地産と認められたⅠ類の試料との分離は明確ではないが、詳細に見れば試料番号117は、1)～5)のいずれもにおいて集団の外縁に位置しており、Ⅱ類はⅠ類と同じ大阪平野北東部、Ⅲ類は大阪平野東南部に由来するとした薄片観察の結果は支持される。

上の山遺跡以外の各遺跡出土試料では、中垣内遺跡試料番号141の特異性が指摘されたが、これも薄片観察では生駒山西麓産の可能性のあるⅣ類に分類されている。他の試料については、私部南・太秦・招提中町遺跡のグループと葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡のグループとに分離されることがわかった。ここで、上の山遺跡出土試料とこれらの遺跡出土試料とを比較すると、私部南・太秦・招提中町遺跡の

表7 薄片観察試料一覧

試料 番号	遺跡・調査区名	遺構名	報告書 番号	器種	時期	胎土組成分類													
						I			II	III'				V	VI		VII		
						a	c	d	a	a	c	d	c	a	a	d			
201	上の山第5調査区	1溝	図31-107	広口壺	弥生中期前葉		○												
202	上の山第5調査区	1溝	図31-108	壺	弥生中期前葉	○													
203	上の山第5調査区	4溝	図31-118	壺	弥生中期前葉	○	○												
204	上の山第5調査区	4溝	図31-114	壺	弥生中期前葉					○	○								
205	上の山第1調査区	74溝	図24-55	広口壺	弥生中期前葉		○												
206	上の山第1調査区	157溝	図25-87	甕	弥生中期前葉		○												
207	上の山03-1	685土器溜り	図135-7	壺	弥生中期前葉					○									
208	上の山03-1	162流路	図98-359	広口壺	弥生中期前葉		○												
209	上の山第1調査区	63土坑	図23-42	深鉢	縄文後期粗製	○													
210	上の山第1調査区	19土坑	図22-26	深鉢	北白川上層式併行			○											
211	上の山第1調査区	41土坑	図21-1	深鉢	縄文中期末北白川C							○							
212	上の山第1調査区	62土坑	表2-46	深鉢	縄文中津式			○											
213	安満97-1	方形周溝墓2	図59-3	無頸壺	弥生中期前葉													○	
214	安満8次	9地区 B-4-2周溝墓	第3図16	広口壺	弥生中期前葉					○									
215	星丘西A地区	方周WD P-190		短頸壺	弥生中期前葉	○													
216	星丘西C地区	方周3 P-349		無頸壺	弥生中期前葉	○													
217	星丘西C地区	方周3 P-347		広口壺	弥生中期前葉					○									
218	野田西52次	141 P-107		広口壺	弥生中期前葉	○													
219	八雲		第20図33	広口壺	弥生中期前葉														○
220	八雲		第23図62	広口壺	弥生中期前葉														○
221	八雲		第23図69	甕	弥生中期前葉														○
222	内里八丁	遺構108	NO4	甕	弥生中期前葉														○
223	内里八丁	遺構111	NO4	甕	弥生中期前葉									○					
224	内里八丁	遺構307	NO1	広口壺	弥生中期前葉					○									

分類凡例

- I : 黒雲母、チャート、花崗岩類を少量ずつ含む
- II : 黒雲母、チャート、花崗岩類を少量ずつ含む、少量～中量の火山ガラスを伴う
- III' : 黒雲母、チャート、凝灰岩、花崗岩類を少量ずつ含む
- V : 微量の安山岩を含む
- VI : 黒雲母、チャート、凝灰岩、花崗岩類、火山ガラスを少量ずつ含む
- VII : 堆積岩類、花崗岩類、珪化岩、火山ガラスを少量～微量含む
- a : 中粒シルト～極細粒砂にモードがある
- b : 細粒砂にモードがある
- c : 中粒砂にモードがある
- d : 粗粒砂にモードがある

(試料出典)

- 上の山遺跡第1・5調査区  
本報告
- 上の山遺跡03-1調査区  
(財)大阪府文化財センター2007 『上の山遺跡』II (財)大阪府文化財センター調査報告書第155集
- 安満遺跡97-1地区  
高槻市教育委員会1998 『嶋上遺跡群22』高槻市文化財調査報告X XIV
- 安満遺跡8次  
高槻市教育委員会1977 『安満遺跡発掘調査報告書-9地区の調査-』高槻市文化財調査報告書第10冊
- 星丘西遺跡A・B・C地区  
(財)枚方市文化財研究調査会調査
- 野田西遺跡52次  
(財)枚方市文化財研究調査会調査
- 内里八丁遺跡  
京都文化博物館1998 『内里八丁遺跡』京都文化博物館調査研究報告第13集
- 八雲遺跡  
大阪府教育委員会1987 『八雲遺跡発掘調査概要・I』

グループの方が、いずれの図においても、上の山遺跡出土試料の分布範囲と重なる範囲が広く、葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡のグループは、上の山遺跡出土試料の分布範囲とほとんど重ならない。蛍光X線分析を行った葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡の試料は、試料番号141を除けば、Ⅰ類またはⅡ類であることから、同じⅠ類およびⅡ類でも、葦屋北・高宮八丁・中垣内遺跡の各遺跡から出土した弥生土器胎土のⅠ類およびⅡ類は、上の山・私部南・太秦・招提中町遺跡の各遺跡から出土した弥生土器胎土のⅠ類およびⅡ類とは、元素組成の異なる別の胎土である可能性が高い。このことは、各遺跡の地理的な位置を考慮すると、より可能性が高いと言える。すなわち、招提中町・私部南・上の山遺跡は、大阪平野北東部でも北部の枚方市～交野市に所在し、段丘上に立地している。太秦遺跡は寝屋川市に所在するが、段丘上に立地している。一方、高宮八丁・葦屋北・中垣内遺跡は上記各遺跡よりも南の寝屋川市～大東市に所在し、いずれも沖積低地上に立地している。このような地理的位置の違いが、土器の材料に共通性および異質性をもたらしたと考えられる。

薄片観察結果からは、大阪平野北東部における弥生土器の製作事情として、各地でそれぞれ独自に材料を採取し、製作していたと考えられると述べたが、元素組成によりさらに胎土が細分されたことで、大阪平野北東部地域における弥生土器胎土の多様性が増したことになり、上述の製作・使用状況を支持するものになったと言える。

## 第2節 薄片観察分析

### 1. 試料

本分析に供した試料を表7に示す。合計24点である。上の山遺跡出土品は、今回、発掘調査を行った第5調査区及び第1調査区出土の弥生土器6点（試料番号201～206）、縄文土器4点（試料番号209～212）と、03-1調査区出土の弥生土器2点を合わせた12点である。この他、比較試料として枚方市星丘西遺跡及び野田西遺跡、守口市八雲遺跡、高槻市安満遺跡、京都府久御山町内里八丁遺跡出土の弥生土器を加えた。弥生土器は、全て中期前葉（畿内第Ⅱ様式）に比定される。

### 2. 分析方法

胎土中の砂粒について、中粒シルト～細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。今回の分析の対象とされた各遺跡の所在地をみると、同一の地質分布範囲内にあると見ることができ、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか（1999）の方法を用いる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。そ

の観察結果が表8～10である。分析に際しては、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の三次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを作成している。

### 3. 分析結果と胎土組成による分類

薄片の観察結果を表8～10に示す。各試料で計数された鉱物片および岩石片の種類構成をみると、多くの試料で互いに類似した種類構成を示す。すなわち、石英の鉱物片が突出して多く、他に鉱物片ではカリ長石、斜長石、黒雲母が少量ずつ含まれ、岩石片では、チャート、多結晶石英、花崗岩類が少量ずつ含まれるという組成である。さらに、試料によっては、これに少量～微量の頁岩や砂岩、凝灰岩、安山岩、結晶片岩、珪化岩などの各種岩石片や火山ガラスなどが認められた。

一方、各試料の粒径組成をみると、極細粒砂以下の粒径にモードのある試料が多いが、中粒砂や粗粒砂の各粒径にモードのある試料も認められる。

前年度に報告した上の山遺跡出土土器胎土分析の結果（(財)大阪府文化財センター2007）からは、胎土の特徴を、鉱物片・岩石片の種類構成ではⅠ～Ⅴ類まで、粒径組成ではa～d類までの分類を行うことにより表現した。（パリノ・サーヴェイ株式会社・矢作健二2007）今回の分析でも、これらの分類基準に沿うものについてはそれを適用する。しかし、今回の分析結果のなかには、前回の分類に収まらない試料も認められたため、それらについては新たな分類名を設けた。以下に各分類を述べる。試料毎の胎土組成の分類結果は表7に示す。

#### a) 鉱物片・岩石片の種類構成

Ⅰ類：石英および長石類を除いた鉱物片では黒雲母が少量含まれ、岩石片ではチャートおよび花崗岩類（多結晶石英含む）を少量ずつ含む。

Ⅱ類：Ⅰ類の特徴に加えて、火山ガラスが少量または中量含まれる。

Ⅲ類：Ⅰ類の特徴に加えて、流紋岩・デイサイトの岩石片が少量含まれる。また、流紋岩・デイサイトではなく、凝灰岩を含むものをⅢ'類とした。

Ⅳ類：Ⅰ類の特徴に加えて、角閃石の鉱物片が比較的多く含まれる。ただし、今回の分析結果では、本分類は認められなかった。

Ⅴ類：Ⅰ類の特徴に加えて、安山岩の岩石片が少量または微量含まれる。

Ⅵ類：Ⅰ類の特徴に加えて、凝灰岩と火山ガラスを少量ずつ含む。今回の分析で新たに設定した分類である。

Ⅶ類：鉱物片には黒雲母は含まれず、岩石片では堆積岩類がチャートだけではなく、頁岩や砂岩も比較的多く認められ、さらに珪化岩、火山ガラスが少量または微量含まれる。今回の分析で新たに設定した分類である。

#### b) 粒径組成

a：中粒シルト～極細粒砂にモードがある。

b：細粒砂にモードがある。ただし、今回の分析結果では認められなかった。

c：中粒砂にモードがある。

d：粗粒砂にモードがある。

#### c) 各遺跡における胎土分類

各特徴を有する試料の胎土をその記号の組み合わせで表記した結果を表7に併記する。以下に各遺跡





表9 薄片観察結果(2)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計									
		鉱物片								岩石片																		
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類		破砕状花崗岩	片状花崗岩	花崗斑岩	結晶片岩	粘板岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
209	細礫																											0
	極粗粒砂	1																1										2
	粗粒砂	6		2	1			1		1	1						1	10										23
	中粒砂	13	3	5				1									1	3										26
	細粒砂	17	8	9	2			2									1	3										40
	極細粒砂	32	3	11	1			3	1									2										51
	粗粒シルト	29	5	9																								43
	中粒シルト	8	2	5																								15
	基質																											319
孔隙																											20	
210	細礫																											0
	極粗粒砂	1	1							1							2	1										6
	粗粒砂	14	3	4						1							1	6										30
	中粒砂	9	6	1				2									4	1							1			24
	細粒砂	6		1																				1			8	
	極細粒砂	3	2	1				1																			7	
	粗粒シルト	2		3																							5	
	中粒シルト	6	1	3																							10	
	基質																											391
孔隙																											25	
211	細礫																											0
	極粗粒砂	6	2							1						1	5											15
	粗粒砂	18	8	2						5						5	1	4	5					1				49
	中粒砂	6	1	3				1	1							2			3									17
	細粒砂			1																								1
	極細粒砂	2						1																			3	
	粗粒シルト	4	1	3																							8	
	中粒シルト	3		2																							5	
	基質																											275
孔隙																											29	
212	細礫																											0
	極粗粒砂	3	1														1	6										11
	粗粒砂	7	3							1							6							1			19	
	中粒砂	12		2													1	1						1			17	
	細粒砂	10	1	3																							14	
	極細粒砂	10	1	2																							13	
	粗粒シルト	5																									5	
	中粒シルト	1		1																							2	
	基質																											202
孔隙																											21	
213	細礫																											0
	極粗粒砂	1	1							1						1	1											6
	粗粒砂	2														1	3										6	
	中粒砂	7	2													1		1						1			12	
	細粒砂	9	1	3												2		1								1	17	
	極細粒砂	10	2	5				1									1									1	20	
	粗粒シルト	10	2	8																							20	
	中粒シルト	2	1	3																							6	
	基質																											211
孔隙																											6	
214	細礫																											1
	極粗粒砂	1									1															1		2
	粗粒砂	8								2							1										11	
	中粒砂	6	1	1																					1		9	
	細粒砂	4	4	2													1								5		16	
	極細粒砂	11	4	3		1				1																4	24	
	粗粒シルト	15	4	5					1																3	2	30	
	中粒シルト	16	2	3																							24	
	基質																											293
孔隙																											13	
215	細礫																											0
	極粗粒砂	1	1	1														2										5
	粗粒砂	3		3						2							4	3										15
	中粒砂	7	1	4						1	2						1	2										18
	細粒砂	5	2	4														1										12
	極細粒砂	19	2	11				1			1						2											36
	粗粒シルト	10	1	11													1										23	
	中粒シルト	5		12																							17	
	基質																											336
孔隙																											15	
216	細礫		1														1											2
	極粗粒砂	4	4							1															2			11
	粗粒砂	4								1	1						3	1										10
	中粒砂	12	1	1							1							1										16
	細粒砂	18	3	2				1		1																		25
	極細粒砂	27	3	3	1			1									1											36
	粗粒シルト	14	4	4						1																		23
	中粒シルト	6	2	2																								10
	基質																											305
孔隙																											16	

表10 薄片観察結果 (3)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計										
		鉱物片							岩石片																				
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑帘石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	・デイサイト	・流紋岩	安山岩	多結晶石英		花崗岩類	破碎状花崗岩	片状花崗岩	花崗斑岩	結晶片岩	粘板岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	その他
217	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	1																										1
		粗粒砂	9		1									1				2		1				1					15
		中粒砂	8	9	3							2						4											26
		細粒砂	18	3	6													1										1	33
		極細粒砂	20	6	5							1																	35
		粗粒シルト	29	4	12																								45
		中粒シルト	21	4	6																								31
	基質																											401	
孔隙																											15		
218	砂	細礫																										0	
		極粗粒砂	2								1						1											4	
		粗粒砂	4	1	1						2		1						3									12	
		中粒砂	1															1										2	
		細粒砂	6	1	3						2																	12	
		極細粒砂	5	4	4				1	2																		16	
		粗粒シルト	13	4	3						1																	21	
		中粒シルト	5	3	3																							11	
	基質																											251	
孔隙																											19		
219	砂	細礫																										0	
		極粗粒砂		2	1							1							2							2		8	
		粗粒砂	7	1								3					1									2		14	
		中粒砂	13	2	2							1						4	1				1			1		25	
		細粒砂	19	2														4	1							1		27	
		極細粒砂	34	3	8													4										49	
		粗粒シルト	31	4	9						1							2										48	
		中粒シルト	20	1	8																							29	
	基質																										436		
孔隙																											8		
220	砂	細礫																	2									2	
		極粗粒砂	3										3					1	2	1	1			1				12	
		粗粒砂	5	1								1						4	1						1			13	
		中粒砂	7	3	2													2								1		16	
		細粒砂	12	3	2													6									1	26	
		極細粒砂	24	5	8							2						3										42	
		粗粒シルト	24	5	11													1										42	
		中粒シルト	15	2	8																							25	
	基質																										586		
孔隙																											19		
221	砂	細礫									1																	1	
		極粗粒砂		1								1						1	2									5	
		粗粒砂	2	1	1													1							1			6	
		中粒砂	4		2														1									7	
		細粒砂	7	6	1														4								1	19	
		極細粒砂	12	1	3			1				1							2									20	
		粗粒シルト	11	3	10			2																				26	
		中粒シルト	8	2	3																							13	
	基質																										269		
孔隙																											5		
222	砂	細礫																										0	
		極粗粒砂	2									3						3	1									9	
		粗粒砂	3									3	2	3				3	5				2		1			22	
		中粒砂	1															1						1			3	8	
		細粒砂	2		1																						3	6	
		極細粒砂	5	1	5	2												1									2	16	
		粗粒シルト	2	1	1	1																						5	
		中粒シルト	4		2																						1	7	
	基質																										235		
孔隙																											20		
223	砂	細礫																	1									1	
		極粗粒砂	2									1							1									4	
		粗粒砂	4	2								1						1	3				1					12	
		中粒砂	11	2	1													3	3									20	
		細粒砂	5	1	2																							10	
		極細粒砂	6	1	4													1										13	
		粗粒シルト	8	1	3																							12	
		中粒シルト	5	1	3																							9	
	基質																										232		
孔隙																											6		
224	砂	細礫	1	1																								2	
		極粗粒砂	1	1															2									4	
		粗粒砂	6		1														1									8	
		中粒砂	3	1	1																							5	
		細粒砂	16	2	4						1	1						1	1									26	
		極細粒砂	22	5	5							1					1											35	
		粗粒シルト	10	1	4																						1	16	
		中粒シルト	6	1	3																							10	
	基質																										324		
孔隙																											12		

における胎土の状況を述べる。

・上の山遺跡

弥生土器および縄文土器ともにⅠ類が多く、少数のⅢ'類が混在する。粒径組成も含めてみると、弥生土器ではⅠc類が多く、8点のうち4点を占め、他の弥生土器はⅠa類、Ⅰa-c類、Ⅲ' a類、Ⅲ' a-c類が各1点ずつという構成である。これに対して、縄文土器では、4点のうち、2点はⅠd類であり、Ⅰa類とⅢ' d類が各1点ずつという構成であり、弥生土器に比べて明らかに粗粒の傾向が窺える。

・安満遺跡

2点の試料は、Ⅱ類とⅥ類に分かれるが、ともに粒径組成はa類であり、また、Ⅱ類もⅥ類も火山ガラスを含むことで共通する。

・星丘西遺跡

3点のうち、2点までがⅠa類であり、残る1点はⅡa類である。

・野田西遺跡

試料は1点のみであり、Ⅰa類に分類される。

・八雲遺跡

3点の試料はいずれもⅦa類に分類される。

・内里八丁遺跡

3点の試料は、Ⅲ' a、Ⅴc、Ⅶdの各類に分かれる。

#### 4. 胎土の地域性について

前回の報告（（財）大阪府文化財センター2007）でも述べたように、胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料になった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆している。既存の大阪平野周辺の地質記載（宮地他1998、宮地他2001）との比較から、前回の報告では、Ⅰ類およびⅡ類については大阪平野北東部の地質学的背景と整合することを述べた。また、Ⅲ類とⅤ類については大阪平野南東部に、Ⅳ類については生駒西麓地域にそれぞれ由来する可能性のあることを述べた。なお、今回の分類において、Ⅲ'類とした胎土は、その特徴である凝灰岩の由来が、Ⅲ類の流紋岩・デイサイトと同様の二上層群に求められることから、Ⅲ'としたものである。

今回の分析で新たに認められた分類のうち、Ⅵ類は、凝灰岩と火山ガラスという組み合わせから、Ⅱ類ともⅢ類とも区別したが、火山ガラスについてはⅡ類と同様に大阪層群中のテフラに由来するとすれば、地域的な指標にはならない。したがって、凝灰岩をⅢ'類と同様に二上層群に由来するとすれば、Ⅵ類についても、その地域性は大阪平野南東部に推定される。一方、Ⅶ類については、それぞれ特徴となる岩石類は、Ⅰ類と同様の地質に由来する。また、火山ガラスの由来は上述の通りである。さらに、珪化岩については、いわゆる変質岩であり、様々な岩石において局所的に生成されることから、地域的な指標にはならない。したがって、Ⅶ類の地質学的背景はⅠ類と同様といえる。すなわち、Ⅶ類の地域性は大阪平野北東部という範囲になるが、おそらく、Ⅰ類とⅦ類の違いは、その範囲の中でのより局所的な違いを示唆している可能性がある。

なお、試料207は、焼成破裂痕土器に類するものとされる（田崎博之2007）が、今回の分析では他地域産（Ⅲ'大阪平野南東部）とする結果が出されている。

### 第3節 分析結果の検討

#### 1. はじめに

土器胎土の薄片観察と蛍光X線分析から得られた数値データをもとに、各遺跡から出土した土器群について視点を換えて見ていくことにする。

胎土分析の対象としたのは、上の山遺跡03-1調査区の685土器溜り、及び第5調査区の各遺構から出土した弥生土器を中心に観察を行い、縄文土器についても点数は少ないが、比較対象として含めた。685土器溜りの土器群は、土器製作に伴う廃棄品を含む土器群と考えられる。第5調査区の各遺構出土の土器群は、集落内で日常的に使用された土器群と考えられる。

#### 2. 粒度分布、鉱物組成、主要元素比率について

##### ① 粒度分布

胎土に含まれる砂粒の粒度分布を表11-1に示しているが、ここでは、各遺跡の土器群の粒度を平均化して示すことにした。土器群によって試料の点数にばらつきがあり、点数の多い試料を総て表示することで雑然となってしまうことを避けるためであるが、土器個々の傾向は把握できなくなる欠点がある。

685土器溜り・各遺構出土土器・縄文土器の胎土を比較すると、個々に特徴的な傾向を示しているといえる。土器溜りの土器群は、ピークが極細粒砂・粗粒シルトにあって30～40個のレンジにあり、各遺構出土の土器群では中粒砂と極細粒砂で高原型のピークとなって20～30個のレンジにおさまるものである。685土器溜りと各遺構出土の土器群との比較では、前者の粒度に細くなる傾向がある。

時期が異なる縄文土器は粗粒砂にピークがあって、弥生時代の土器群でピークとなる極細粒砂から減少して、中粒シルトで最少となる傾向にある。このような現象は、縄文土器を感覚的に見て砂っぽく感じることを反映するものといえそうである。

次に、各遺跡から出土している土器群と上の山遺跡の土器群を比較するが、各遺跡から提供された試料には、点数が1～3点程度のものがある。このような試料は、それぞれの特徴が複合した結果となってしまうので、ここでは3点以下のものは除外することにした。

上の山遺跡の土器群に限ってみると、二つの分布形が見られることを述べた。表11-2には各遺跡の土器群の粒度分布を示しているが、上の山遺跡でみた二つの分布形と同様の分布形を呈する遺跡がある。685土器溜り土器群と近似するものは、招提中町遺跡・八雲遺跡・星丘西遺跡・高宮八丁遺跡である。各遺構出土の土器群には、内里八丁遺跡に近いようである。そしてこの二つの分布形に一致しないのが、細粒砂にピークのある中垣内遺跡だが、後述する鉱物組成や蛍光X線分析などにおいても特異な動き方をみせる特徴的な土器群といえる。

各遺跡間の関係を見やすく示したのが表11-3である。この表は細粒砂～粗粒シルトの変化を意識して配置したものだが、上の山遺跡第5調査区と内里八丁遺跡を除く各遺跡の土器群は、細粒砂・極細粒砂・粗粒シルトでピークをつくる山形の分布形を呈している。極細粒砂と粗粒シルトの関係でみると、招提中町遺跡と八雲遺跡では粗粒シルトが優位にあるのに対して、上の山遺跡685土器溜りの土器群ではこれが逆転して極細粒砂が優位となり、後に続く各遺跡の土器群も極細粒砂に対して粗粒シルトが少ない状況にある。特に高宮八丁遺跡と中垣内遺跡では、他と異なる動きがみられる。高宮八丁遺跡から細粒砂が増加して、中垣内遺跡では細粒砂が極細粒砂を抜いてピークとなり、同時に中粒砂も増加して

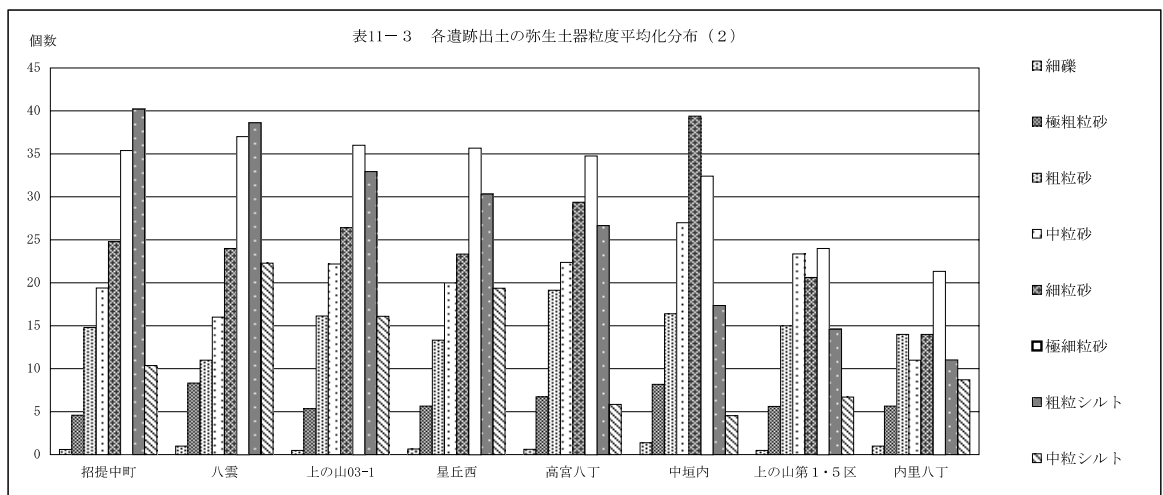
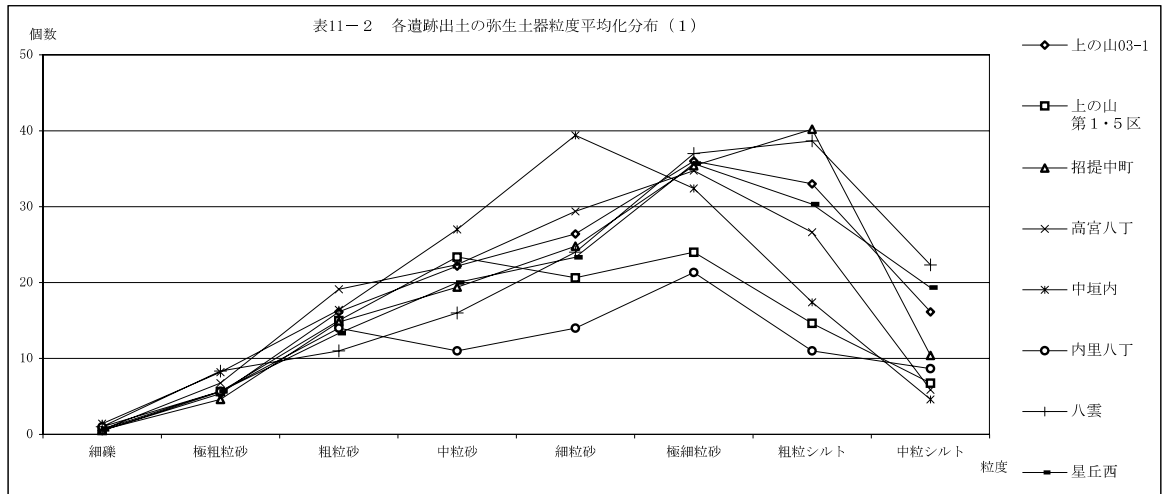
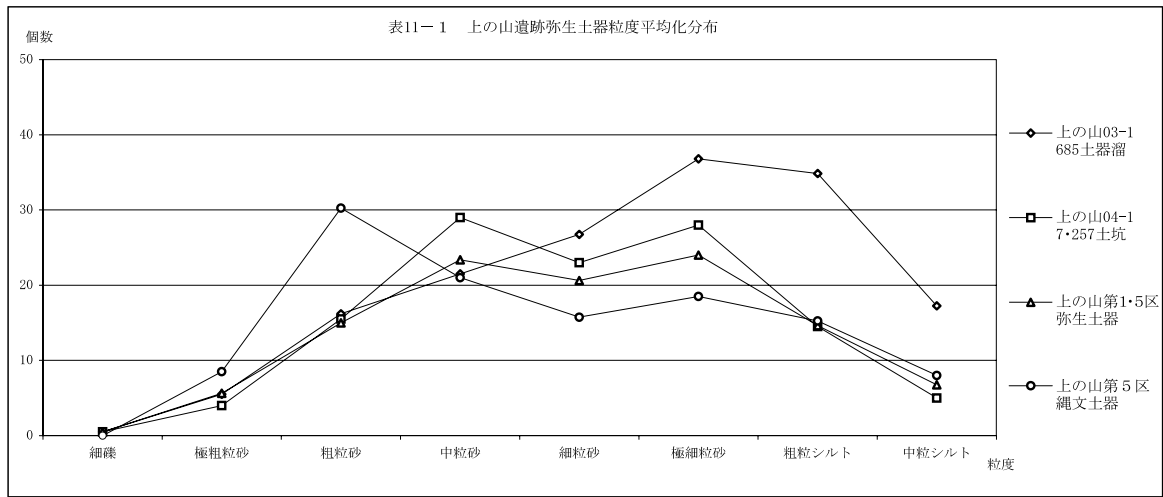
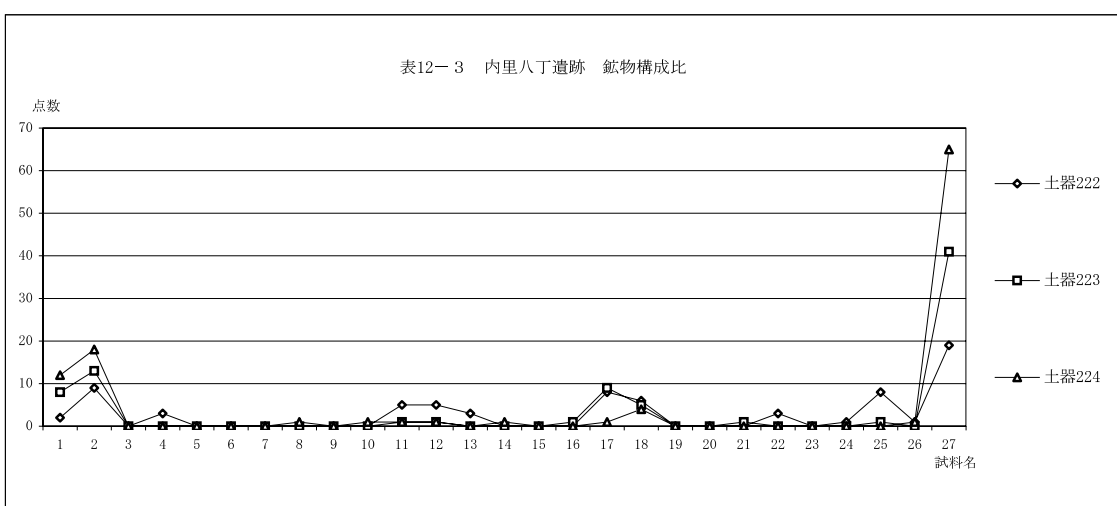
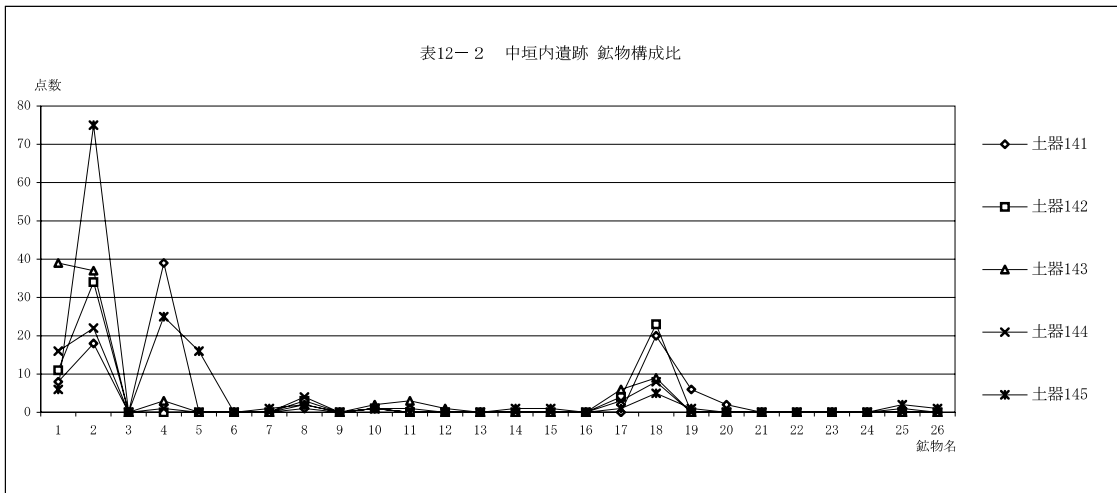
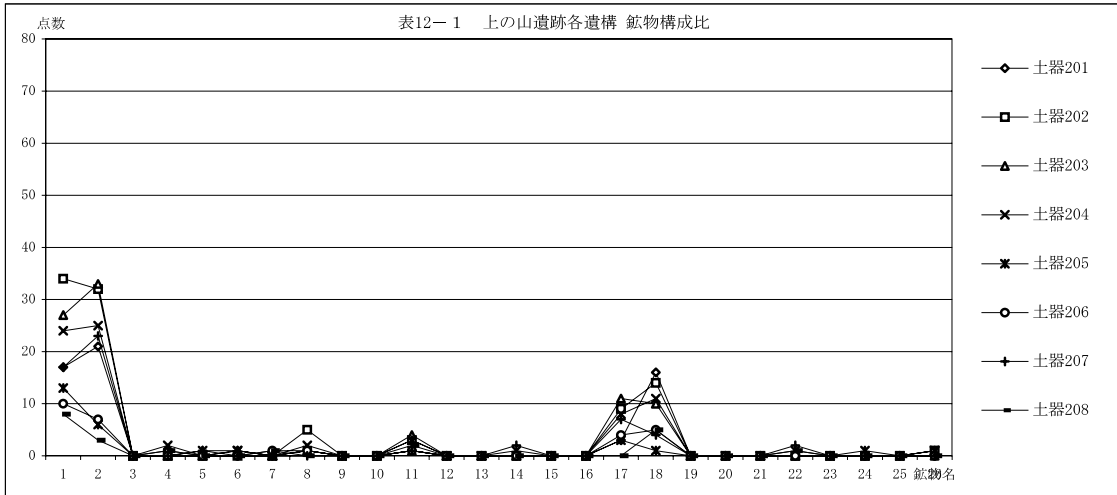
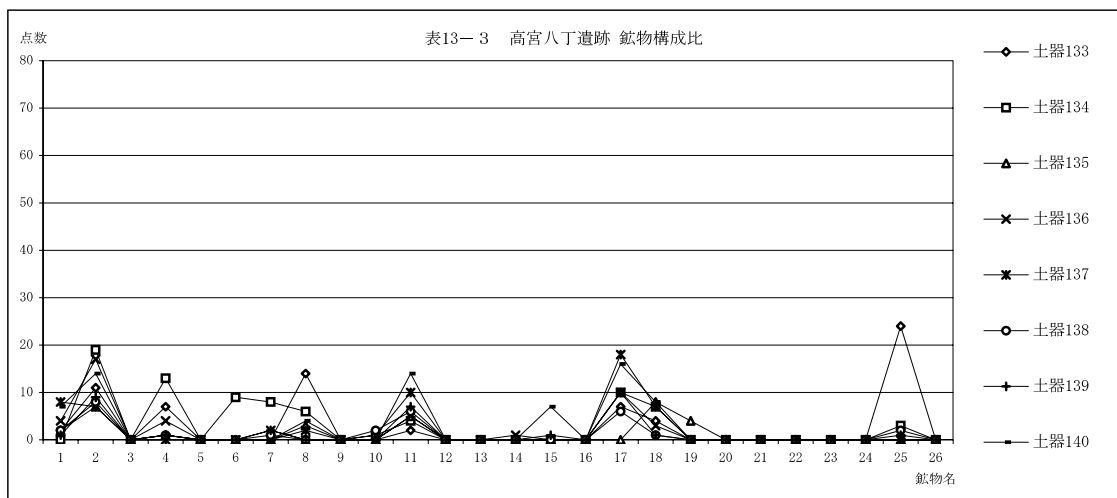
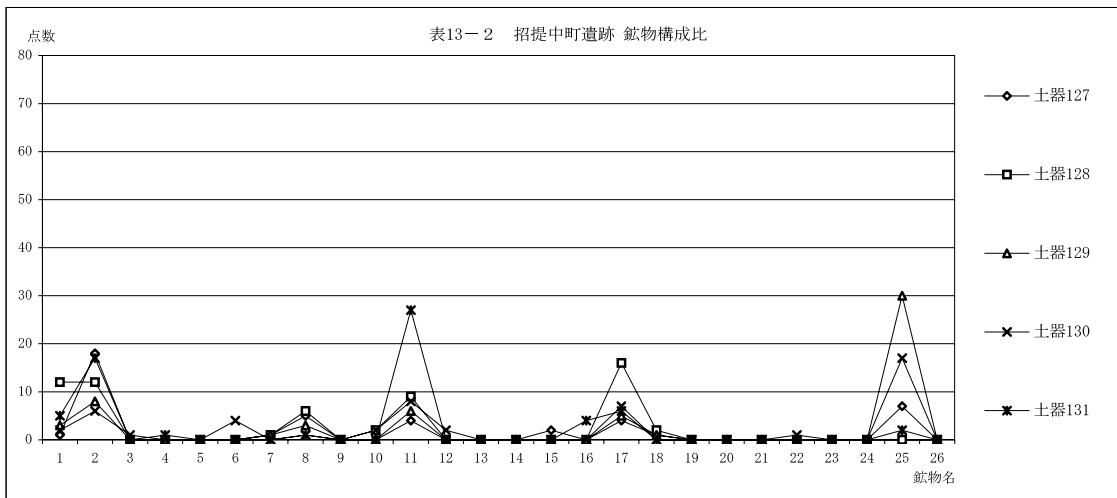
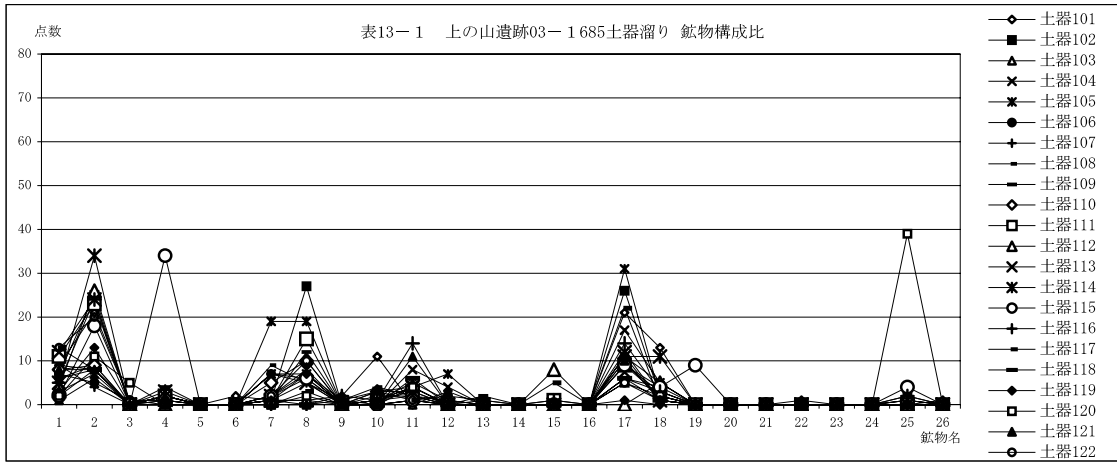


表11 粒度平均化分布



1. カリ長石 2. 斜長石 3. 斜輝石 4. 角閃石 5. 酸化角閃石 6. 緑帘石 7. 白雲母 8. 黒雲母 9. ジルコン 10. 不透明鉱物  
 11. チャート 12. 頁岩 13. 砂岩 14. 凝灰岩 15. 流紋岩・デイサイト 16. 安山岩 17. 多結晶石英 18. 花崗岩類 19. 破碎状花崗岩  
 20. 片状花崗岩 21. 花崗斑岩 22. 結晶片岩 23. 粘板岩 24. 珪化岩 25. 火山ガラス 26. 植物珪酸体

表12 鉱物構成比 (1)



1. カリ長石 2. 斜長石 3. 斜輝石 4. 角閃石 5. 酸化角閃石 6. 緑帘石 7. 白雲母 8. 黒雲母 9. ジルコン 10. 不透明鈹物  
 11. チャート 12. 頁岩 13. 砂岩 14. 凝灰岩 15. 流紋岩・デイサイト 16. 安山岩 17. 多結晶石英 18. 花崗岩類 19. 破碎状花崗岩  
 20. 片状花崗岩 21. 花崗斑岩 22. 結晶片岩 23. 粘板岩 24. 珪化岩 25. 火山ガラス 26. 植物珪酸体

表13 鈹物構成比 (2)

他の遺跡ではみられない傾向を示している。

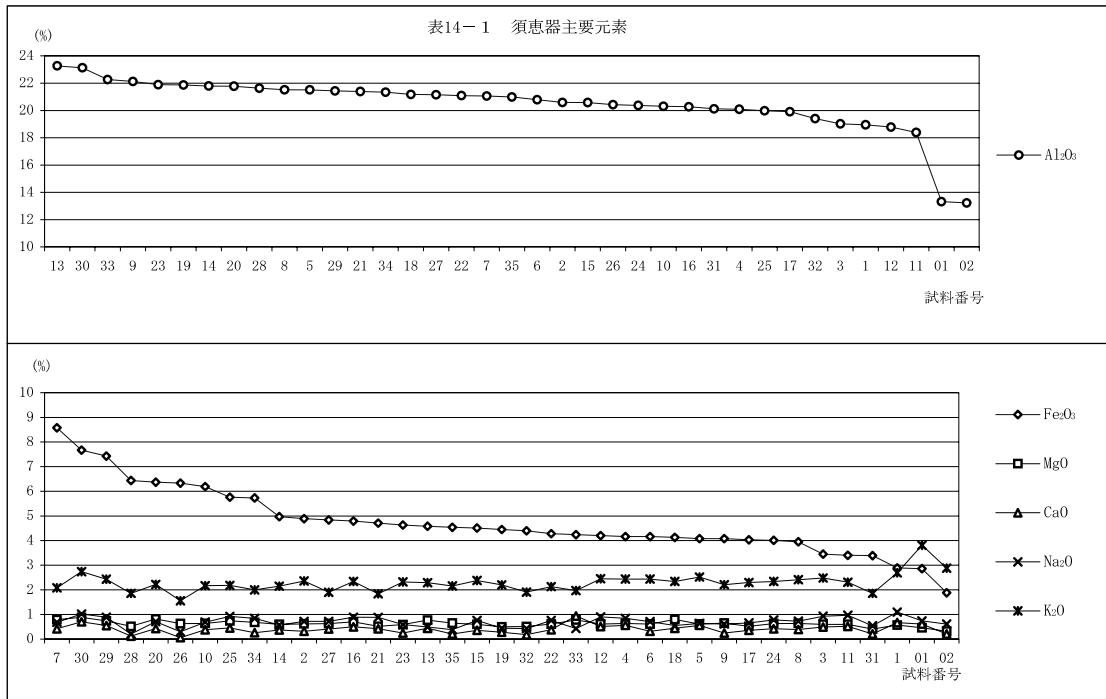
## ② 鉱物組成

土器胎土に含まれる鉱物構成比は、土器の生産された周辺後背地の地質的な特徴を内包しているため、鉱物の構成比から産地を同定することが可能である。しかし、後に述べる蛍光X線分析の分析試料の調整段階で採用されるガラスビード法では、土器片を粉碎したものを溶融して分析を行うことから、胎土に含まれる鉱物の成分がそのままに反映されることになる。素材となる粘土に意図的に砂粒を混和剤として混入することがあるとすれば、そうした砂粒を構成する鉱物の性質がどれ程の影響を及ぼすのか疑問に感じるところである。

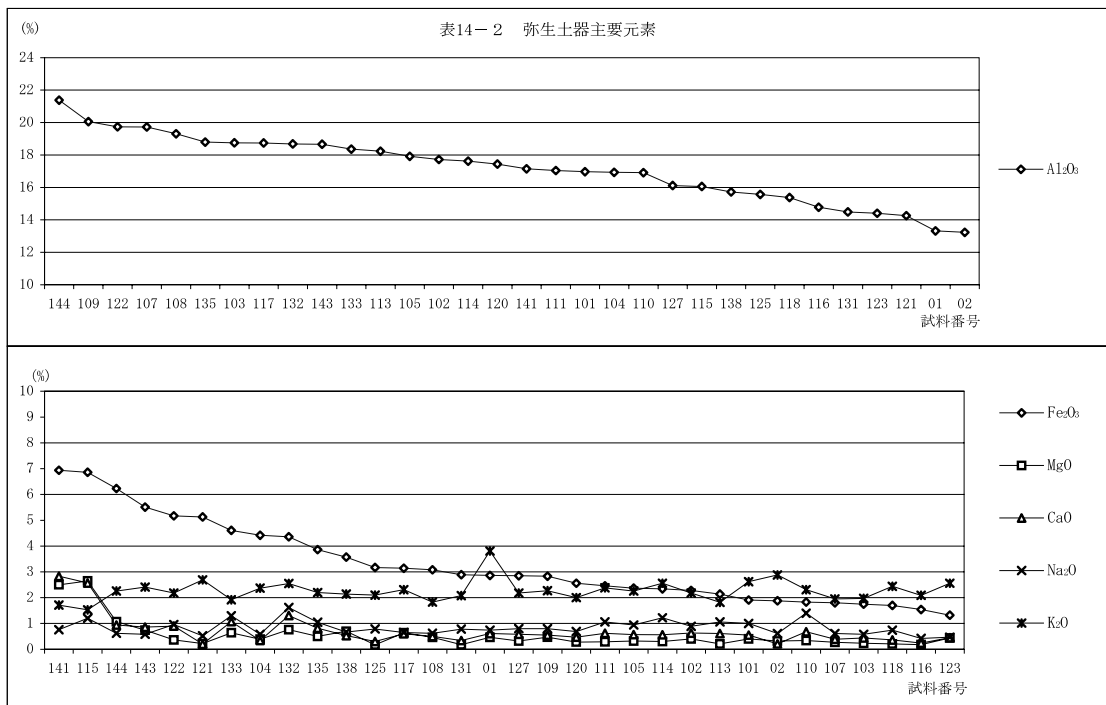
表12・13は、蛍光X線分析の対象とした、上の山遺跡と周辺遺跡から出土した弥生土器の鉱物構成比を示したが、表を見やすくするために、全体に個数の占める割合が高い石英は除外している。上の山遺跡の685土器溜りの土器群は、土器生産に際して廃棄されたとみられるものであるが、土器115は生駒山西麓産の土器に特徴的にみられる角閃石の数が際立っている。これと同じ傾向を示すものとしては、中垣内遺跡の土器141であることから、土器115は生駒山西麓産で、土器141とほぼ同じ産地のものといえそうである。流紋岩・デイサイトを含む土器117、高宮八丁遺跡の土器140、火山ガラスを含む土器120は、高宮八丁遺跡の土器133や招提中町遺跡の土器群というように特定の鉱物に注目すれば、他の遺跡からの搬入品である可能性を窺い知ることできるが、火山ガラスは、上の山遺跡の二次堆積の状態でも数%は含まれているので、火山ガラスの有無から産地を同定するのは難しいと考えられる。個数が比較的多い斜長石でみると、685土器溜りの土器群は、0～10個と20個のラインを挟んで35個までのレンジにある二グループに分かれて集中している。後者のように20個のラインを挟んだレンジに集まる例は、比較した他の遺跡では少なく特徴的といえそうである。不透明鉱物と緑廉石、多結晶石英・花崗岩類で高い比率を示す土器101、白雲母・頁岩・多結晶石英が目立つ土器106、堆積岩または変成岩を含む土器109などは、それぞれの基盤層を後背地とした地域に求めることもできるが、上の山遺跡の立地は、大阪層群の低位から中位段丘面であって、段丘の上面を覆う段丘礫層にはチャートなど堆積岩の円礫も含まれおり、比較的軟質な頁岩や砂岩も稀にみられる。円礫だと何ともいえないところがあるが、角の取れていない堆積岩粒を含むものは搬入品とみることができ。今回分析の対象としたのは、生駒山西麓から北辺にかけての地域であり、胎土に含まれる鉱物も基本的には領家花崗岩地帯の構成鉱物が主体となる地域である。この地域に立地する上の山遺跡と私部南遺跡の土器胎土の比較では、上の山遺跡の土器にはチャートが含まれるのに対して、私部南遺跡では、あまりチャートを含まず、長石・石英の割合が高くなる。上の山遺跡は段丘上にあつて、段丘礫に含まれていた砂粒が粘土に混入しているのではないかとした。一方の私部南遺跡は、扇状地上にあつて後背山地と近接していることから、花崗岩に起源する鉱物が主体となるのではないかとした。主要な構成鉱物でみる限りでは、分析対象とした地域内に限ってみても際立った特徴は把握しにくいだが、上の山遺跡の土器群と中垣内遺跡の土器群のようにカリ長石・斜長石・角閃石の関係で、角閃石を多く含む上の山遺跡の土器115と中垣内遺跡の土器141は典型的な生駒山西麓産の特徴を示すものであり、角閃石をあまり含まない土器142・143・144も斜長石は20個を越えるレンジにあつて、土器145は70個を越えている。角閃石を多く含むか含まないかに関わらず、生駒山西麓産とする土器群に斜長石を多く含む一群があつて、北辺へ移るにつれて角閃石は少なくなり（細くなる）斜長石が目立つようになるのではないだろうか。

## ③ 主要元素比率



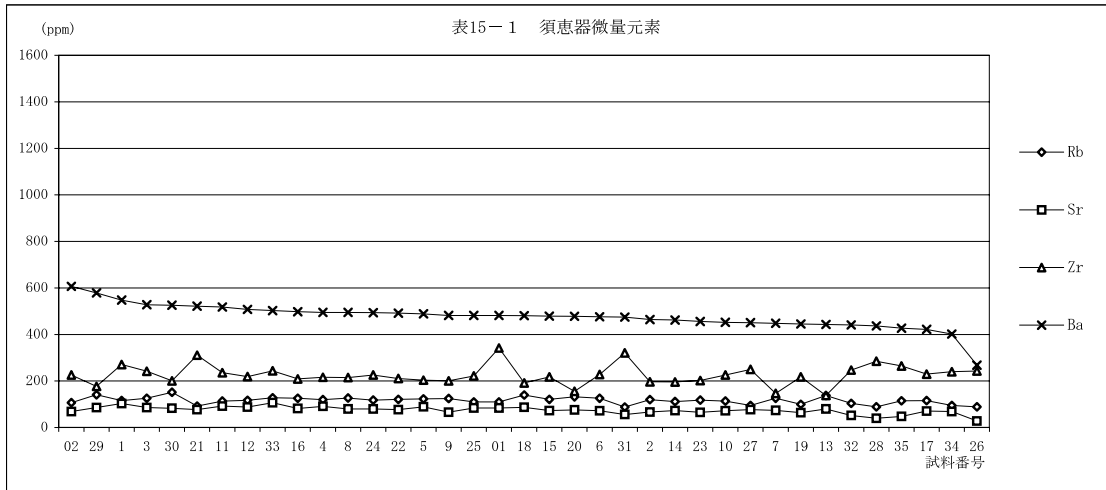


1~21 上の山遺跡 22~24 茄子作遺跡 25~27 上私部遺跡 28~30 大谷北窯跡 31・32 藤原宮山窯跡 33~35 メノコ91-1  
01・02 上の山遺跡 窯壁・原土

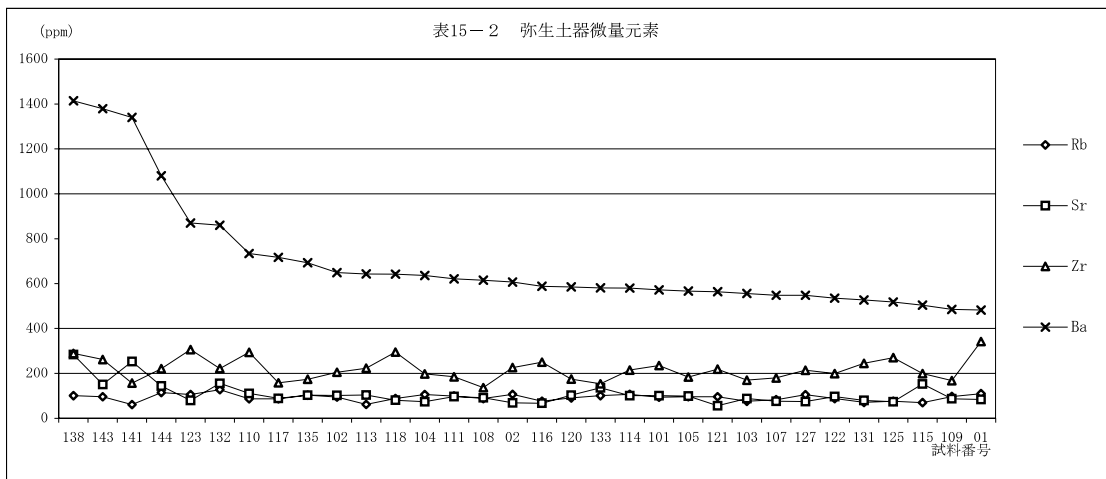


101~122 上の山遺跡 123 私部南遺跡 125 太秦遺跡 127・131 招提中町遺跡 32 薮屋北遺跡 133・135・138 高宮八丁遺跡  
141・143・144 中垣内遺跡 01・02 上の山遺跡 窯壁・原土

表14 主要元素比率 (1)



1～21 上の山遺跡 22～24 茄子作遺跡 25～27 上私部遺跡 28～30 大谷北窯跡 31・32 藤阪宮山窯跡 33～35 メノコ91-1  
 01・02 上の山遺跡 窯壁・原土



101～122 上の山遺跡 123 私部南遺跡 125 大秦遺跡 127・131 招提中町遺跡 132 薮屋北遺跡 133・135・138 高宮八丁遺跡  
 141・143・144 中垣内遺跡 01・02 上の山遺跡 窯壁・原土

表15 主要元素比率 (2)

上の山遺跡と周辺の遺跡から出土した、弥生土器と須恵器及び上の山遺跡で出土した須恵器窯の窯壁(01)と、調査地内で採取した土器製作に使用できそうな粘土(02)を含めた蛍光X線分析データを取り上げる。均質的な大量生産品である須恵器と、在地の小規模な生産品である弥生土器との間にどのような差異をもつのか、検討した。

各試料から $Al_2O_3 \cdot Fe_2O_3 \cdot MgO \cdot CaO \cdot Na_2O \cdot K_2O$ の主要元素の数値を抜き出し、 $Al_2O_3 \cdot Fe_2O_3$ の2成分に注目し、その比率の多い順に並び替えたものが表14である。

$Al_2O_3$ は、弥生土器で12~22%のレンジにあるのに対して、須恵器は関連試料である01・02を除くと18~24%にある。須恵器で比較的安定して推移する20~22%のレンジを弥生土器と単純に比較すると、須恵器の62.2%の試料がこの範囲におさまるが、弥生土器は18.8%がこのレンジにあるだけで、16~20%の広いレンジでみると65.6%を占めることになる。因みに20%ラインを下抜けして低いレンジにある、6点の須恵器の内5点が上の山遺跡の試料である。

須恵器・弥生土器ともに全試料を二等分し、上位と下位とに区分して、それぞれに占める上の山遺跡の土器の割合を示すと、須恵器は上位=27%、下位=35%。弥生土器では上位=34%、下位=31%で、比較試料は、最下位を占めている。

上の山遺跡の須恵器に関しては、下位へ偏る傾向がみられる。他の資料点数が少ないので断定的ではできないが、下位へ偏る傾向があるのは、藤阪宮山窯跡(0:2)、上私部遺跡(1:2)の2遺跡で、茄子作遺跡(2:1)は上位へ偏る傾向があり、大谷北窯跡(3:0)、メノコ91-1(3:0)は上位のグループといえる。

弥生土器では、若干ではあるが上位へ偏る傾向がある。上位へ偏る傾向があるのは、高宮八丁遺跡(2:1)、中垣内遺跡(2:1)、葎屋北遺跡(1:0)の3遺跡。招提中町遺跡(0:2)、私部南遺跡(∕:1)、太秦遺跡(∕:1)は下位のグループといえそうである。

$Fe_2O_3$ は、弥生土器では1~7%の範囲におさまり、2~4%のレンジで46.9%を占めている。一方の須恵器は、関連試料を除くと3~9%の範囲におさまり、4~6%のレンジで全体の62.2%を占めている。このことから須恵器の胎土に含まれる $Fe_2O_3$ は、弥生土器に比べて安定して多く含まれているといえるのではないだろうか。 $Fe_2O_3$ は、土器焼成段階の焼き色に影響をあたえる可能性が考えられるが、須恵器の製作に使用した粘土は、弥生土器に比べて $Fe_2O_3$ を比較的多く含むものを選択しているようにみえる。須恵器・弥生土器ともに試料を二等分し、上位と下位と区分してそれぞれの割合を示すと、須恵器上位=13.5%、下位=35.1%、弥生土器上位=21.8%、下位=43.8%となり、上の山遺跡の土器は $Fe_2O_3$ が比較的少ない粘土を使用しているといえる。そして、この正反対に位置するのが、須恵器は大谷北窯跡、弥生土器は中垣内遺跡の土器群といえる。鉦物構成の記述の中で、上の山遺跡土器115は、中垣内遺跡の土器群と似た特徴を示すことを述べたが、この一群の中にあって中垣内遺跡土器141と上の山遺跡土器115は、CaOとMgOの関係においてもほぼ同じ傾向を示している。

上の山遺跡の須恵器は下位へ偏る傾向がみられる。他の遺跡出土の試料をみると、藤阪宮山窯跡(0:2)だけが下位で、残る茄子作遺跡(2:1)、上私部遺跡(3:0)、大谷北窯跡(3:0)は、上位にあるか上位グループの傾向を示している。

弥生土器も下位へ偏る傾向があり、私部南遺跡(∕:1)だけが下位で、残る招提中町遺跡(1:1)高宮八丁遺跡(3:0)、中垣内遺跡(3:0)、太秦遺跡(1:0)、葎屋北遺跡(1:0)は、上位にあるか上位グループの傾向を示している。

微量元素Rb・Sr・Zr・Baの中で、大きな変動がみられるのはBaである。須恵器では、400～600ppmのレンジにあって安定しているが、弥生土器は400～1400ppmの広いレンジにあって、400～800ppmで全体の83%を占めている。800ppmのラインを超えて上抜けする一群は、葦屋北遺跡土器132、私部南遺跡土器123、中垣内遺跡土器144・141・143、高宮八丁遺跡土器138で、私部南遺跡を除く5点は生駒山西麓から続く枚方丘陵の縁辺に立地する遺跡であることがわかる。

次に全試料を上位と下位とに二等分して、それぞれの割合を示すと、須恵器上位=33.8%、下位=31.1%で、僅かに上位へ偏るが、これは1点程の差であり、際だった傾向とはいえない。他の遺跡で上位への偏りのあるのは、大谷北窯跡(2:1)だけで、どちらともいえない茄子作遺跡(1:1)がある。下位か下位へ偏る傾向のあるのは藤阪宮山遺跡(0:2)、上私部遺跡(1:2)、メノコ遺跡91-1(1:2)である。一方の弥生土器は、上位=28.1%、下位=37.5%で下位へ偏りがみられる。他の遺跡で下位へ偏るのは招提中町遺跡(0:2)と太秦遺跡(∕:1)で、中垣内遺跡(3:0)、私部南遺跡(1:∕)、葦屋北遺跡(1:∕)、高宮八丁遺跡(2:1)などは上位か上位へ偏る傾向のあるものである。

ほぼ同地域で製作された、須恵器と弥生土器だが胎土に含まれる主要な元素量を比較してみると、その傾向に違いを見て取ることができる。分析資料の中には関連試料として、上の山遺跡周辺で稼働していたとみられる須恵器窯の窯壁(01)と、土器製作に使用できそうな粘土(02)を含めている。主要元素のAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>でみると、弥生土器は緩やかに右下がりとなる末端を占め、須恵器では、関連試料だけがレンジを下抜けした最下位の水準にある。時代差はあっても同じ環境下で採取していた粘土を用いていたとすると、このような違いはどこにあるのだろうか。

Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>でみると須恵器は4～6%のレンジに過半数のものが含まれ、弥生土器では4%以下のレンジに過半数のものがある。このことから、須恵器に用いた粘土は比較的Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を多く含むものが用いられていたことになる。このような現象は意図したものとは考えられないので、基本的に用いられた粘土が異なるのではないだろうか。弥生土器の中で2点の関連試料が分散した状態にあることは、窯壁に用いた素材(01)と粘土(02)とは、ほぼ同じ性質のもので、浅い層位で採取したのではないだろうか。

微量元素であるBaでも、須恵器では400～600ppmの間で安定しているのに対して、弥生土器では400～1600ppmの広いレンジにあって、比較的安定しているのは450～650ppmのレンジになるので、その違いは明らかである。

### 3. まとめ

上の山遺跡での胎土分析は、顕微鏡下で胎土に含まれる鉱物の構成と粒度の観察を行う薄片観察分析と蛍光X線分析を行った。前者では、弥生土器を中心に、後者では、薄片観察を実施した弥生土器と須恵器を対象とした。これらの分析結果は、個々の成果としてすでに紹介されており、それぞれの分析手法による結果として完結している。ここでは、そうした分析結果を利用し、総括的な分析と検討を試みた。

粒度分布分析は、上の山遺跡の2地点と6遺跡について、各遺跡の土器群を平均化して分布形を比較した。粒度の分布形は、上の山遺跡の685土器溜りの土器群と各遺構から出土した土器群とは違った分布形を示し、中垣内遺跡は、これらとは異なる分布形を示すことから三つの分布形に分けられた。各遺跡の粒度の構成比をみると685土器溜りの土器群のような山形の分布形を呈するのは、上の山遺跡の

各遺構出土の土器群と内里八丁遺跡の2遺跡を除く5遺跡である。粒度の構成比の違いから幾つかのグループに分けられるが、中垣内遺跡では細粒砂が突出して目立った存在である。また、上の山遺跡の二つの土器群の分布形が異なる点は興味あるところである。

鉱物構成比は、上の山遺跡の2地点と4遺跡について比較した。鉱物の構成は、土器が生産された周辺の地質学的な特徴を理解するのに有効な手法だが、この鉱物の構成は、同時に行った蛍光X線分析の結果に重要な影響を与えらる。

上の山遺跡の2地点を比較すると、資料数の多い685土器溜りの土器群で搬入品とみられる土器を抽出できる。角閃石を含む土器115は、中垣内遺跡の土器141とほぼ一致しており、流紋岩・デイサイトを含まない土器117は、高宮八丁遺跡の土器140と近い様相を呈している。しかし、全体としての構成比は、領家帯花崗岩地帯の特徴といえる花崗岩に由来する鉱物が占めている。土器生産に関わるとする685土器溜りの土器群の特徴的な傾向をあげるとすれば、斜長石が10点と20点ラインの2ヶ所に集中する傾向があり、20点ラインを挟んだレンジに集中するグループは、上の山遺跡の土器群に特徴的といえそうである。また、黒雲母で10点ライン、多結晶石英で20点ラインを越えることも上の山遺跡の特徴とみられる。しかし、これらの鉱物は花崗岩の主要な鉱物であることから、肉眼観察で判別することは難しいのではないだろうか。

蛍光X線分析は、須恵器と胎土の薄片観察に用いた弥生土器について行っている。時代差のある須恵器と弥生土器との比較では、両者共に同じ地域の遺跡出土品でありながら、特定の元素に注目してみると、全く違った特徴を示している。分析試料には、関連試料として上の山遺跡から出土した須恵器窯の窯壁と、調査地内で容易に得ることのできる粘土を含めている。須恵器と弥生土器の主要元素である $Al_2O_3$ でみると大きな隔たりがある。弥生土器とでは焼成温度の違いが結果に現れているとすれば、関連試料の窯壁で補うことができると考えたが、結果を見る限りでは全く性格が異なるようである。関連試料は、弥生土器では、緩やかな右下がり傾向の中での結果といえるので、須恵器でみられる現象と同じとは理解できない。任意的に採取した関連試料である粘土は、地表面近くに存在するものである。窯壁に使用された粘土が、手軽に地表近くで入手できるものを用いたとすれば、このような結果になるのかもしれない。微量元素であるBaでみても、須恵器は安定した狭いレンジの中で推移しているの、弥生土器とは、土器製作に使用した粘土に違いがある可能性がある。

上の山遺跡の土器群の特徴を示す方法として、資料を二等分して、それぞれに占める上の山遺跡の土器の割合をみた。 $Al_2O_3$ で上の山遺跡の須恵器は下位にあって、藤阪宮山窯跡と上私部遺跡が下位グループである。弥生土器では、若干ではあるが上位にあって、高宮八丁遺跡・中垣内遺跡・葦屋北遺跡が上位グループとなる。

$Fe_2O_3$ で須恵器は、下位にあって、藤阪宮山窯跡だけが下位グループである。弥生土器も下位にあって、試料数が1点の私部南遺跡が下位グループである。招提中町遺跡が中立である他は上位グループとなることから、下位にある土器群が上の山遺跡の特徴といえる。

Baで須恵器は、若干であるが上位にあって、大谷北窯跡が上位グループである。しかし上の山遺跡の須恵器を上位とするのは1点差なので微妙なところである。弥生土器は下位にあって、招提中町遺跡と試料数が1点の太秦遺跡が下位グループである。

上の山遺跡の土器群と他の遺跡出土の土器群とを比較することで、上の山遺跡の土器群にみられる特徴を把握すべく、胎土分析の検討を行ってきた。鉱物構成では、生駒山系の北辺地域にあって領家花崗

岩地帯に立地しているため、地理的環境を反映して花崗岩の主要鉱物が占めて、チャートなども他の遺跡と比較して特に目立つ傾向があるわけでもない。しかし粒度分布では、685土器溜りの土器群と上の山遺跡第1・5調査区の土器群の比較から、それぞれの分布形を呈し、中垣内遺跡を含めた三つの分布形があることがわかった。それと同時に、土器焼成にともなって廃棄されたとされる685土器溜りの土器群の中に、中垣内遺跡の土器とほぼ一致するものを見出すことができた。この他にも他の遺跡と共通する土器も含まれるようなので、一括として取りあげられた土器の総てが、在地で焼成された土器の失敗品だけではないことが確認できる。

調査地内では、色調から大雑把に見て三種類の粘土がある。関連試料に含めた(02)の粘土は灰白色を呈し、見た目にも $Fe_2O_3$ が少なくみえるものである。他の二種類が、暗茶褐色と黄褐色であることからすると異質ともいえるものである。蛍光X線分析の結果から、土器の焼き色に影響しそうな $Fe_2O_3$ が上の山遺跡の須恵器・弥生土器ともに比較的少ない傾向にある結果になっている。特に弥生土器では、 $Fe_2O_3$ の少ない下位グループの大半を上の上の山遺跡の土器が占めるので、この灰白色粘土と何等かの関係はないだろうか。

以上、上の山遺跡の弥生土器は、03-1調査区と当調査区の土器で、胎土に含まれる砂粒の粒度分布に違いが認められるが、その意味を明らかにし得なかった。

鉱物構成比では、地質学的に一括りにできる地域であることから、遺跡間の違いを肉眼観察で明確に区別するのは難しいのではないかと思われる。しかし、薄片観察に用いた試料に蛍光X線分析を行うことで、クロスチェックを試みた。685土器溜りの土器を分析の対象としたが、鉄分に注目してみると、比較的鉄分の少ない粘土を使用しており、上の山遺跡の土器に特徴的な傾向といえる。調査地内で採取した粘土についての分析結果も、鉄分の含量が少ない特徴があることから、土器生産に用いた可能性が考えられた。今後も、理化学的分析情報を蓄積し、土器の生産・流通状況の解明の一助とすべき努力を積み重ねていきたい。

謝辞 今回の胎土分析に際しては、大阪府教育委員会文化財調査事務所、寝屋川市教育委員会、大東市立歴史民俗資料館、高槻市立埋蔵文化財センター、財団法人枚方市文化財研究調査会、京都文化博物館より試料の提供を受けた。また、塩山則之、濱田延充、黒田 淳、宮崎康雄、宇治田和生、西田敏秀、下村節子、植山 茂、三宅正浩、市本芳三、後川恵太郎の各氏には試料調査でご配慮をいただいた。ここに厚くお礼申し上げます。

(引用文献)

(財)大阪府文化財センター2007『上の山遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第155集

田崎博之2007「上の山遺跡出土の焼成失敗品について-弥生時代中期前葉(弥生Ⅱ~Ⅲ期)の土器の生産様態-」『上の山遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第155集

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高1999「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』

宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川 旭 1998『大阪東南部地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所

宮地良典・田結庄良昭・寒川 旭 2001『大阪東北部地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所

パリノ・サーヴェイ株式会社・矢作健二2007「上の山遺跡出土弥生土器の胎土分析」『上の山遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第155集

## 第7章 まとめ

本報告書は、3年度にわたる6ヵ所の調査区の成果をまとめたものである。これによって上の山遺跡の北部の様相がある程度明らかになったものと考え。そして今回の調査成果で顕著なものは次の3点である。

**縄文時代の土坑群** 北端部（第1調査区）では、縄文時代に比定される200基近い土坑が検出された。縄文時代後期の時期を中心とする遺構である。また明確に土器を据えた埋甕遺構も併せて検出され、この地区が縄文時代の葬制・墓制に関わる範囲であることが明確になった。そして土坑には直径30cm前後のもの、直径50～70cm前後のもの、直径1m前後を測る大型のものがみられたが、いずれの規模の土坑にも柱の痕跡が確認できたものが多数存在する。調査区中央部は遺構の密度が高く、土坑相互の関係を把握することは難しかったが、土坑群の密度が低くなる南部では、4基の土坑が2m前後の距離を保って円弧を描いて配置されているのが確認された。段丘縁辺に所在するため、すでに一部が削り取られ、その全貌を明らかにすることはできなかったが、この4基の土坑の位置関係から直径を復元すると、直径9m前後の円周上に10基前後の土坑が配置されることとなる。そして検出された4基の土坑のなかの1基には明確な柱痕跡が確認された。

ここで想定された土坑相互の関係を土坑が密集する地区においてトレースすると、やはり土坑が円を描いて配置されている可能性が認められる。複数の円形に配置された土坑群がひとつの単位となり、それが錯綜しているものと推測される。

土坑が円形に配される事例は縄文時代の墓制の中で散見されるが、上の山遺跡の事例では、そこに柱を伴うのである。これまでの調査では、円形に配置されたと推測される土坑のすべてで柱痕跡が確認されてはいないが、ひとつの可能性として北陸地域の縄文遺跡で検出されている環状木柱列（ウッド・サークル）に類したものの存在を想定したい。

直径約80cm、深さ約54cmの土坑の中心に直径約32cmの柱痕跡が確認された172土坑をはじめとする上の山遺跡の土坑群を、この地域の縄文時代の遺構の中にどのように位置づけるのか、今後の課題である。

**方形周溝墓1** 第5調査区で検出された方形周溝墓1は、長辺16m・短辺11m前後の規模をもつ大型の遺構である。出土した土器は弥生時代第Ⅱ期に比定され、中期はじめのものである。この時期の方形周溝墓では畿内地域において最大級の規模をもつもののひとつである。そして周囲には小型の方形周溝墓が複数存在しているが、それらから方形周溝墓1が、圧倒的に卓越した存在であることは間違いない。

今回方形周溝墓群が検出された、第5調査区北部から第4調査区の一帯は弥生時代の上の山遺跡の墓域に当たると推測される。墓域に投影された方形周溝墓1のあり方は、先に03-1調査区で検出された独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡に対応するものと考え。この遺構は、桁行5間（8.6m）、妻側1間（4.5m）を測るものであり、方形周溝墓とほぼ同時期のものである。周囲に存在する竪穴住居などを凌駕して、他から屹立する存在である。集落における独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物の性格や機能については議論があるが、上の山遺跡における現実の生活や社会的関係における場におけるあり方と死

後の世界におけるあり方の類似性は興味深い。今回の調査において弥生時代中期はじめ頃の墓域の様相を明らかにできたことは、先の集落における施設のあり方と相まって、この地域の弥生時代社会のあり方を解明する重要な資料になるものと考えられる。

上の山遺跡出土土器の胎土分析 一連の上の山遺跡の発掘調査では、弥生土器の焼成に際して廃棄された土器や須恵器窯の窯壁の断片が出土したことから、本遺跡において弥生・古墳時代の土器生産が行われていたことがうかがわれる。上の山遺跡で生産された土器の特質を明らかにするための作業の一環として土器薄片の顕微鏡観察により胎土に含まれる砂粒の粒度分布と含有する鉱物の構成比を明らかにし、さらに後者については蛍光X線分析によってクロスチェックを行った。

その結果、粒度分布の確認によって上の山遺跡とその周辺遺跡出土の弥生土器に一定の類似性が認められ、遠隔地からの土器との差異を把握することができた。さらに鉱物の構成比と蛍光X線分析によると上の山遺跡出土土器の胎土が比較的鉄分の含有が少ないという結果がえられた。これは遺跡周辺で採取した粘土の傾向とも一致する。

以上のように、出土土器の胎土に分析によって、上の山遺跡において土器の製作がなされたことが明確になるとともに、この地の土器の胎土からみた個性も析出することができた。



# 写 真 图 版

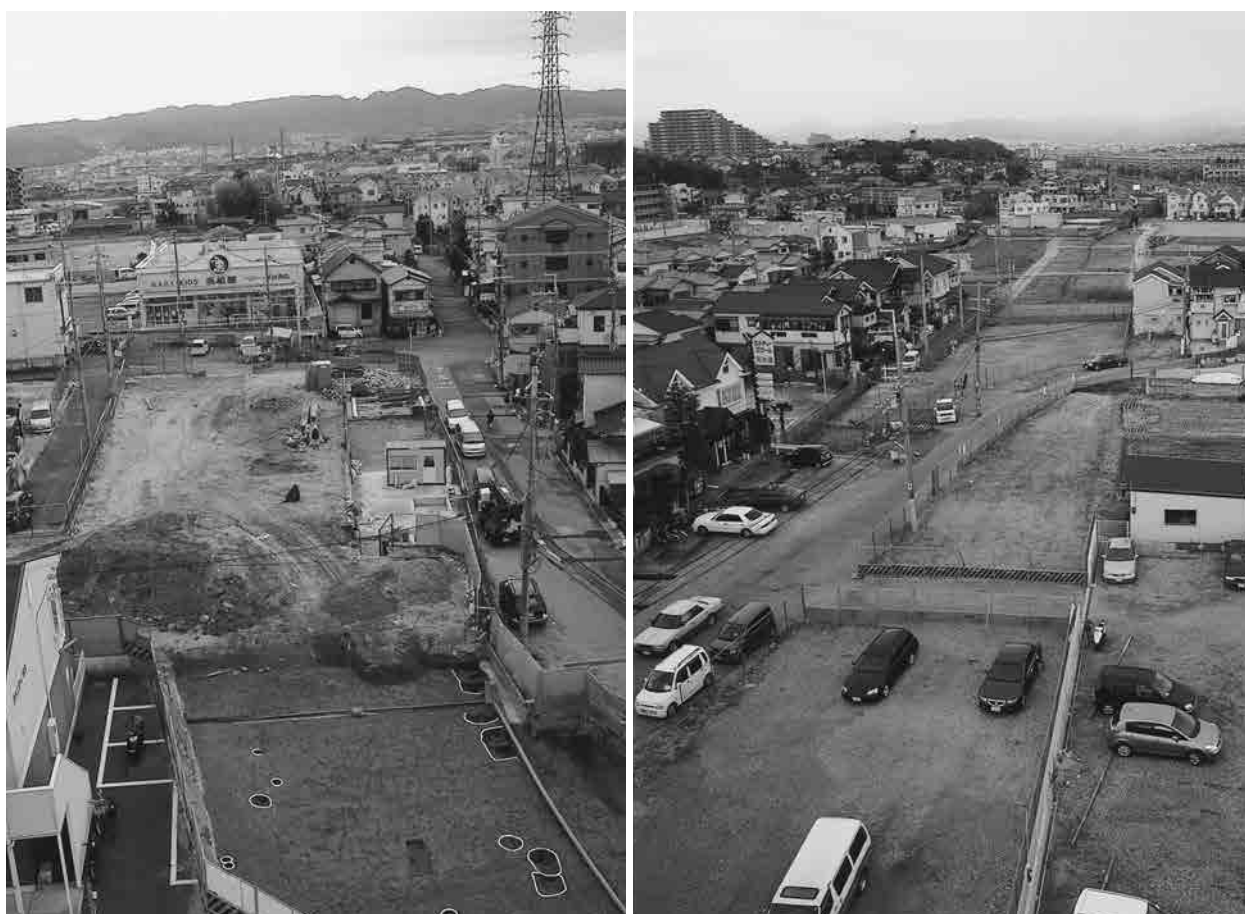




第1調査区 北部全景（縄文時代土坑群）（垂直）



1. 第1調査区 縄文土坑群全景（左：南から）（右：北東から）



2. 第1調査区からみた上の山遺跡の全景（左：南方を望む）（右：北方を望む）



1. 第1調査区 縄文時代土坑群（南東から）



2. 第1調査区 縄文時代土坑群（北から）



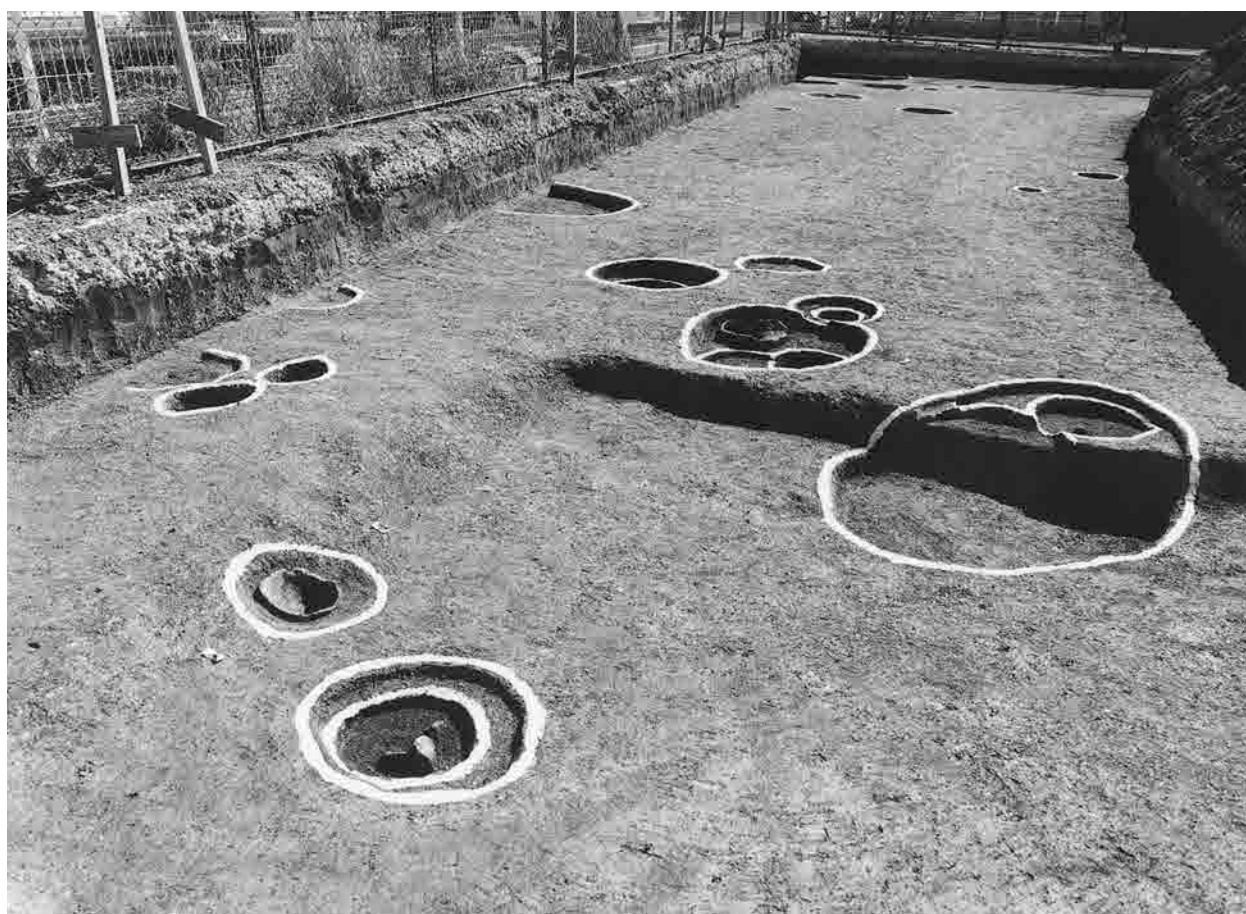
1. 第1調査区 縄文時代土坑群と竪穴住居1 (東から)



2. 第1調査区 縄文時代土坑群 (東から)



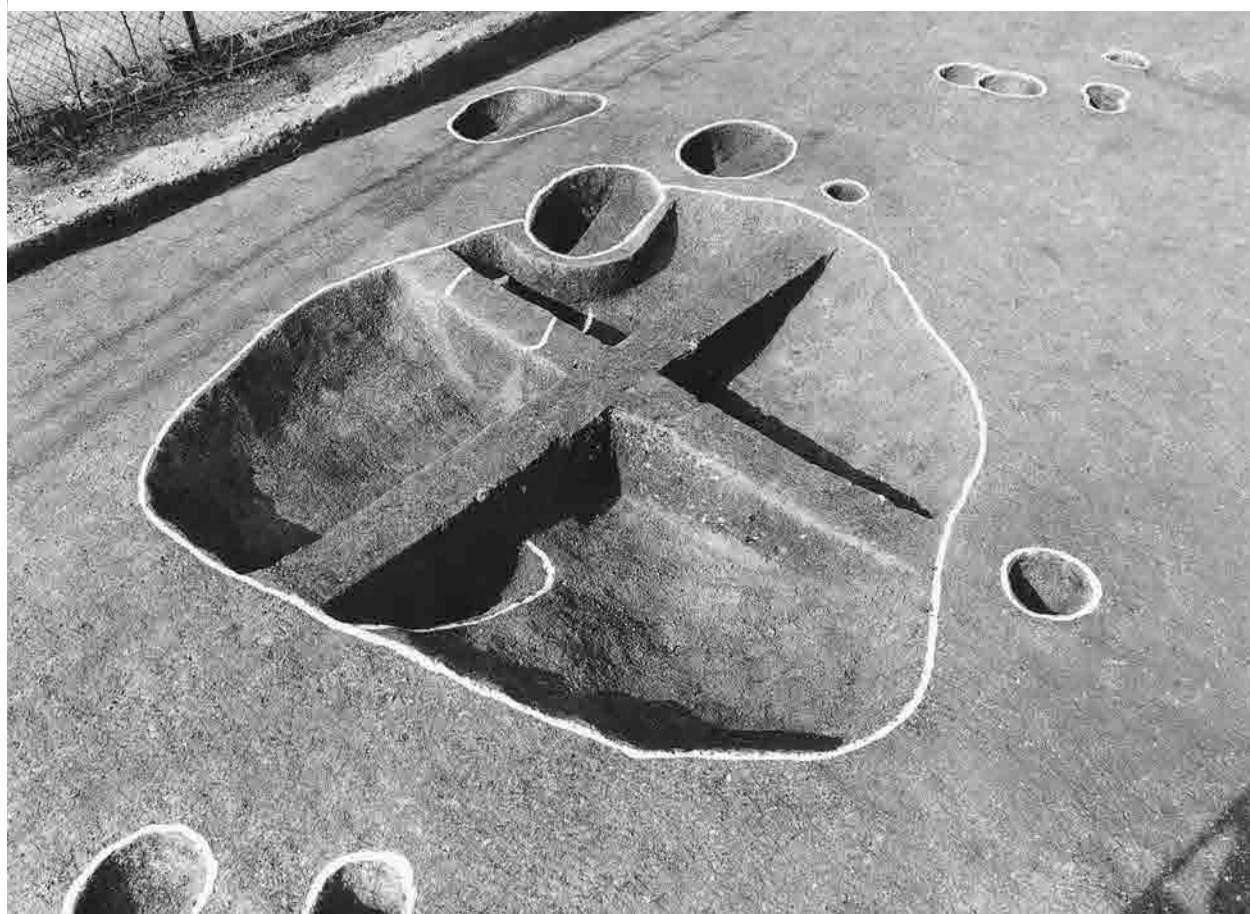
1. 第1調査区 縄文時代土坑群・41土坑周辺 (西から)



2. 第1調査区 縄文時代土坑群・41土坑周辺 (北西から)



1. 第1調査区 縄文時代土坑群・111土坑周辺（南東から）



2. 第1調査区 78土坑周辺（南東から）





1. 第1調査区 段丘縁辺で検出された縄文時代土坑（西から）



2. 第1調査区 段丘縁辺で検出された縄文時代土坑（北西から）



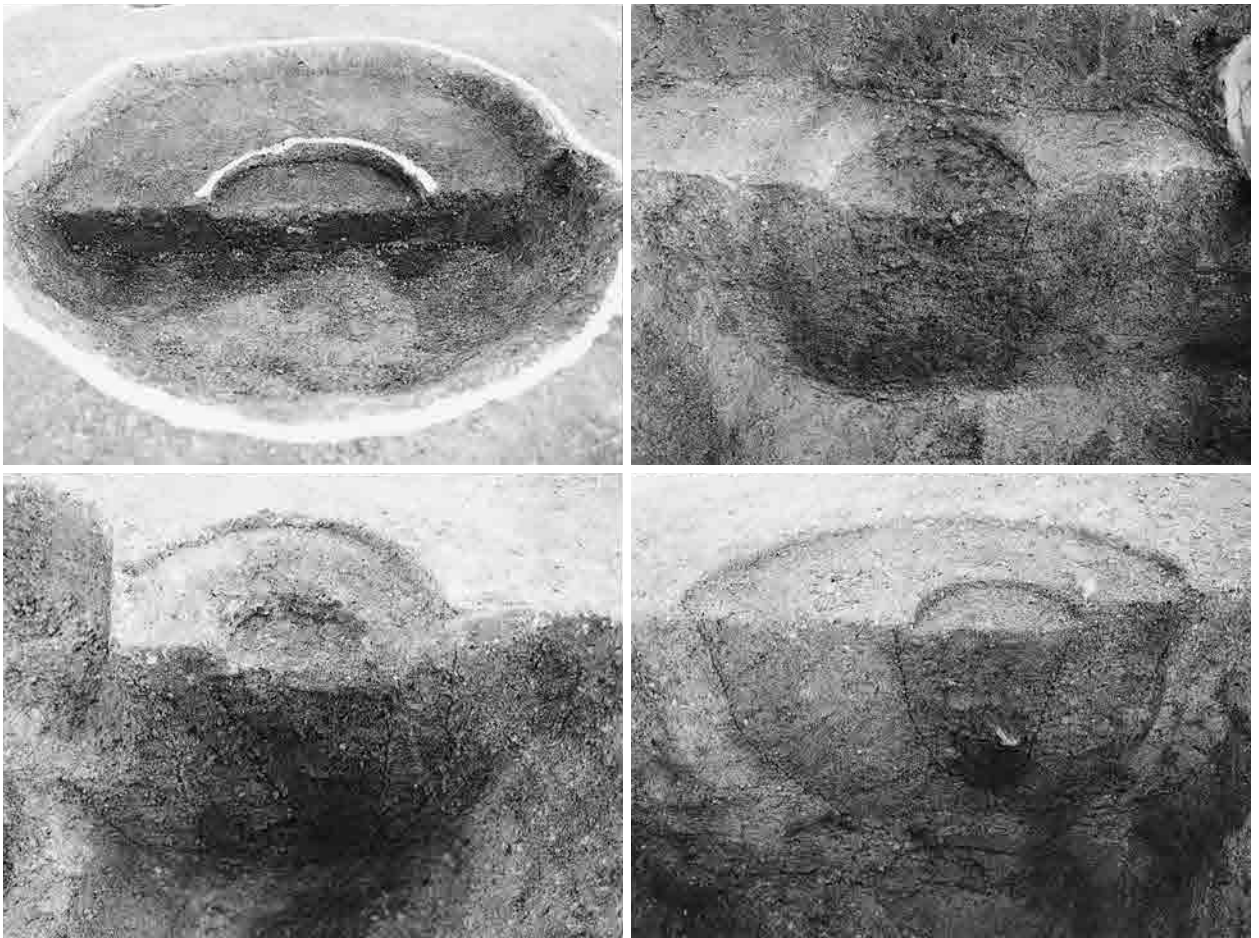
1. 第1調査区 43土坑・63土坑（埋甕遺構）（西から）



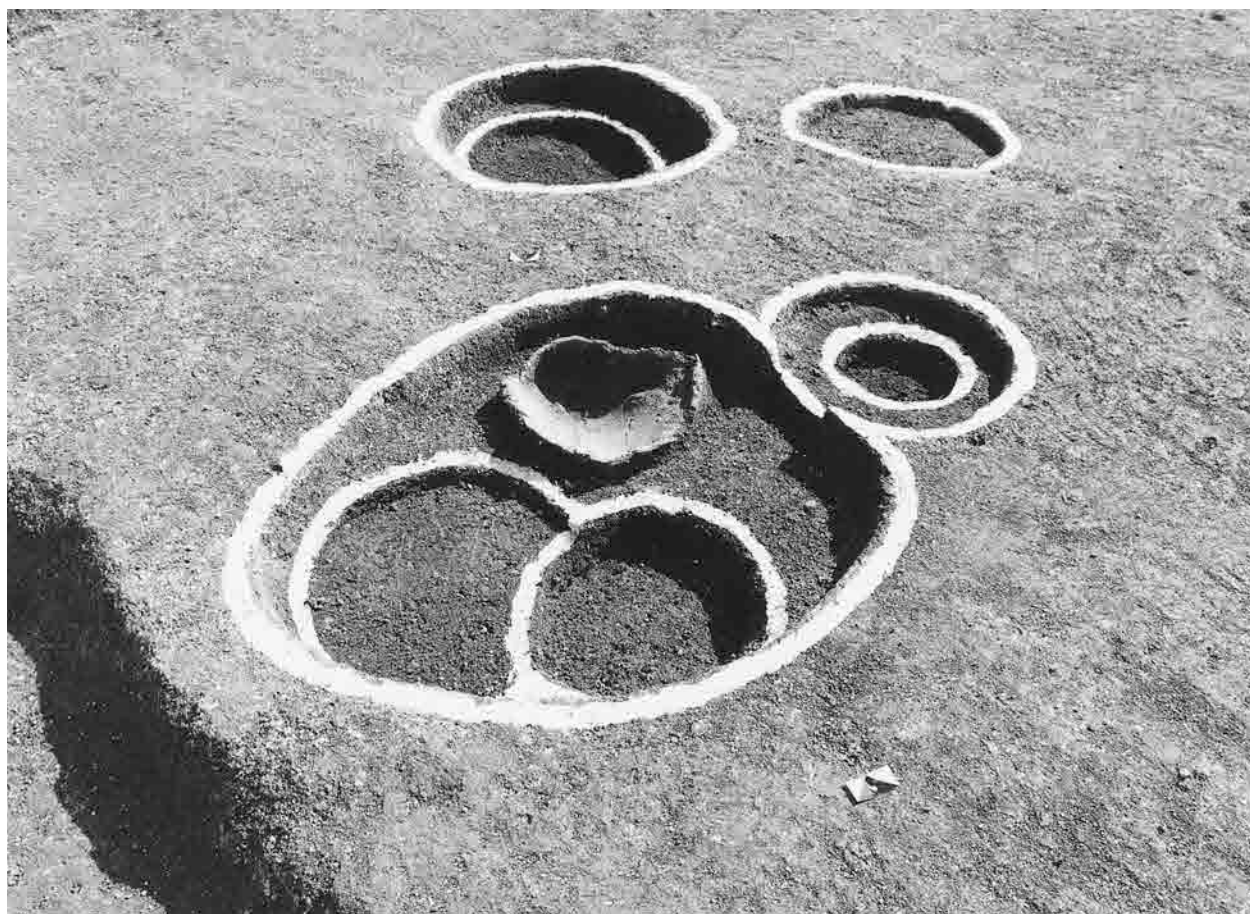
2. 第1調査区 22土坑（南から）



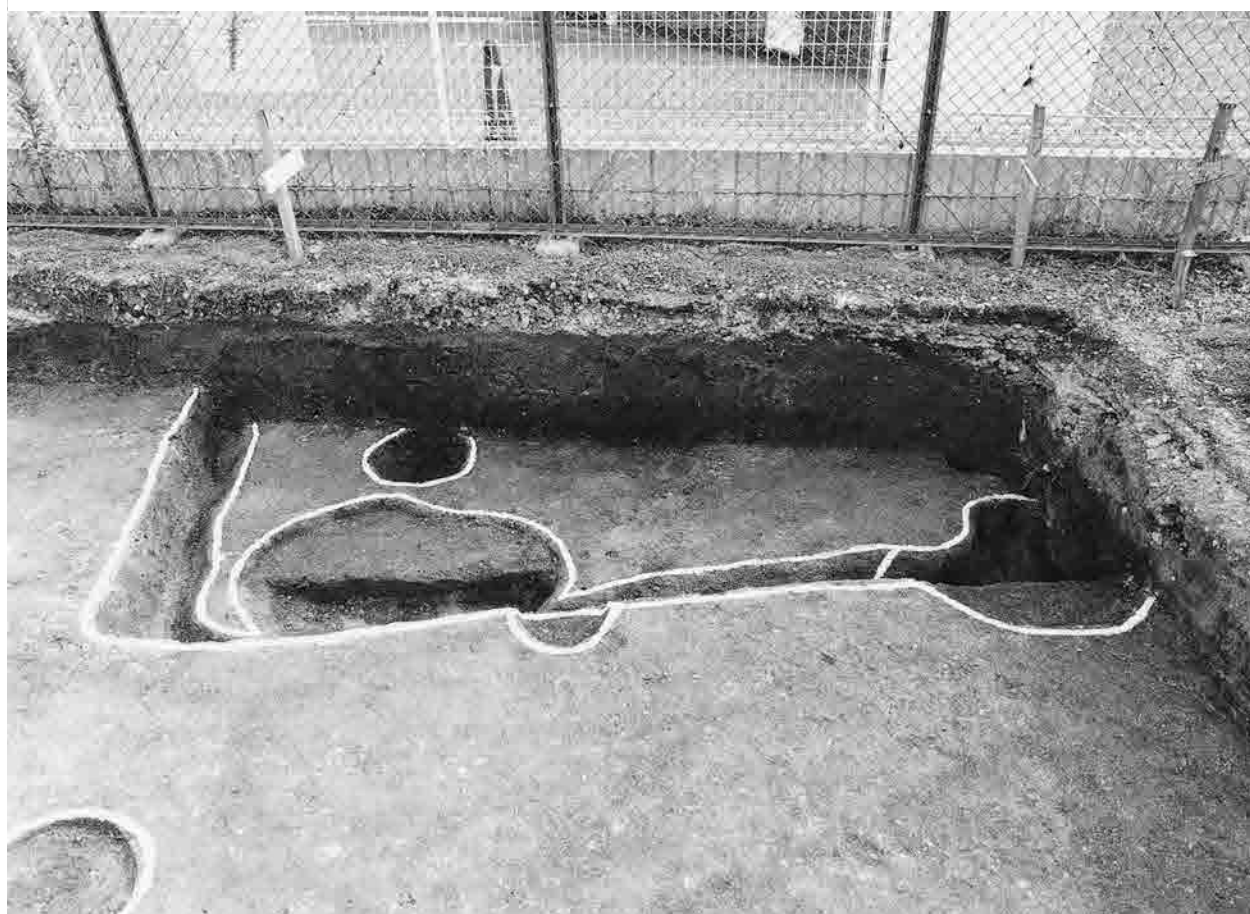
1. 第1調査区 172土坑（東から）



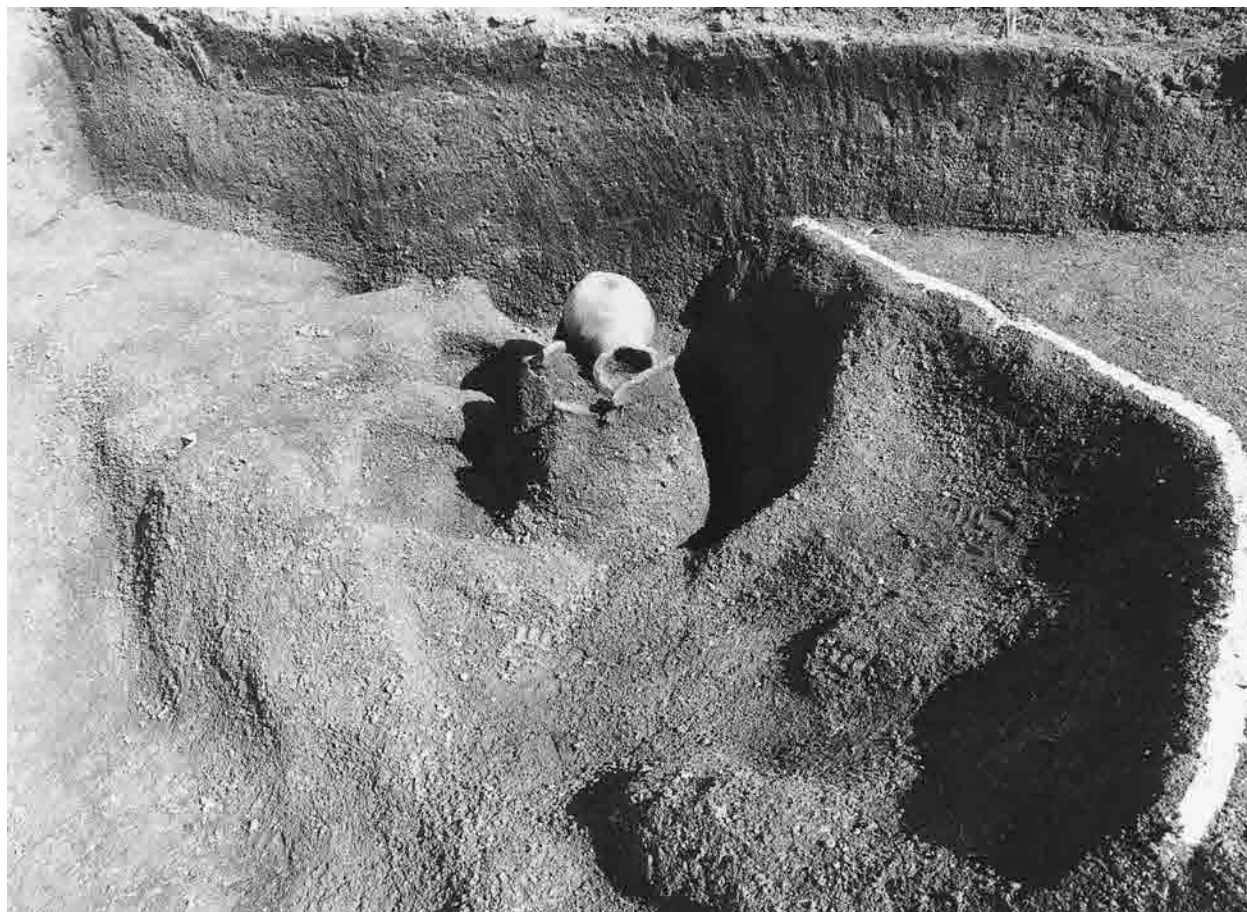
2. 第1調査区 23土坑（左上）、43土坑（右上）、44土坑（左下）、53土坑（右下）



1. 第1調査区 41土坑（埋甕遺構）（西から）



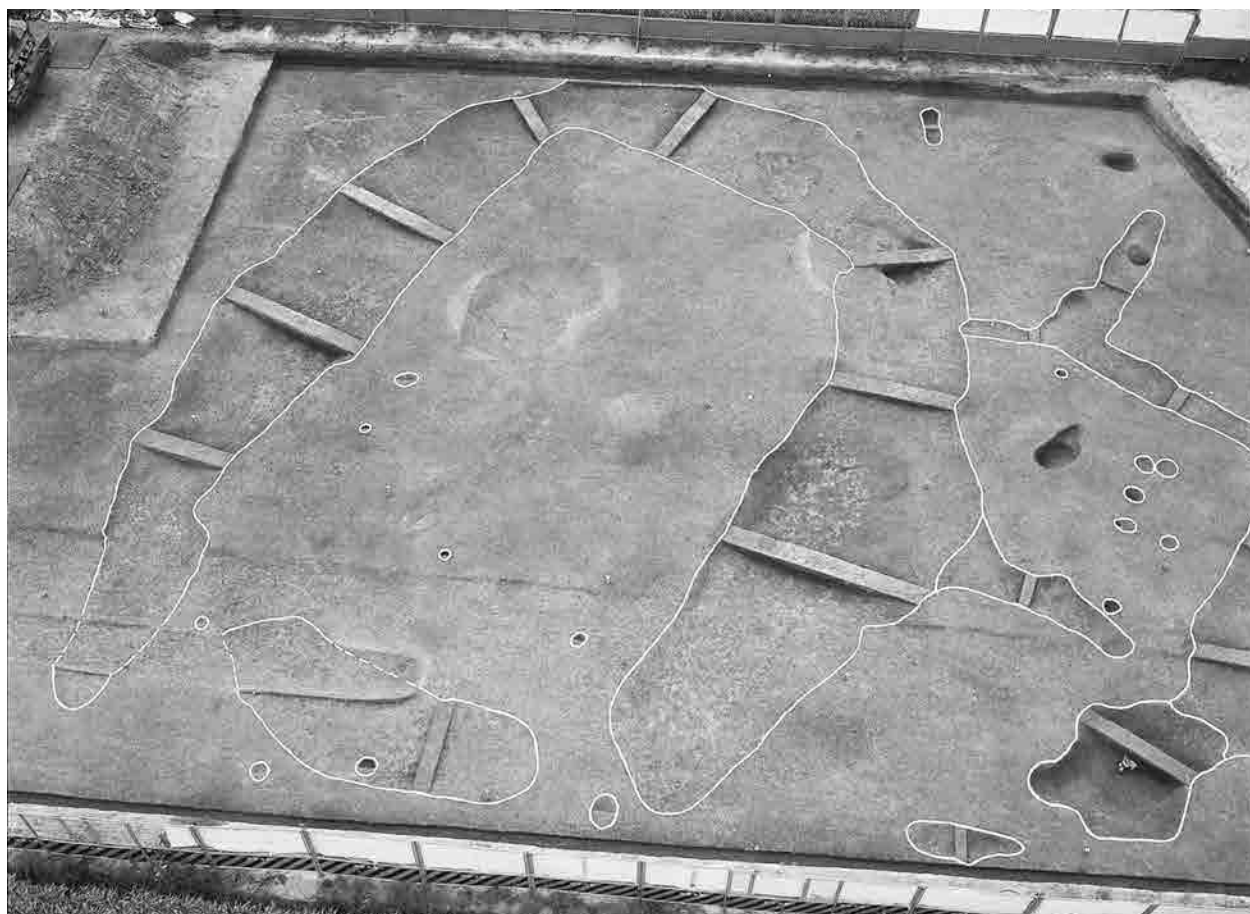
2. 第1調査区 竪穴住居1（北から）



1. 第1調査区 74溝土器出土状況（南西から）



2. 第1調査区 170溝（東から）



1. 第5調査区 方形周溝墓1全景（東から）



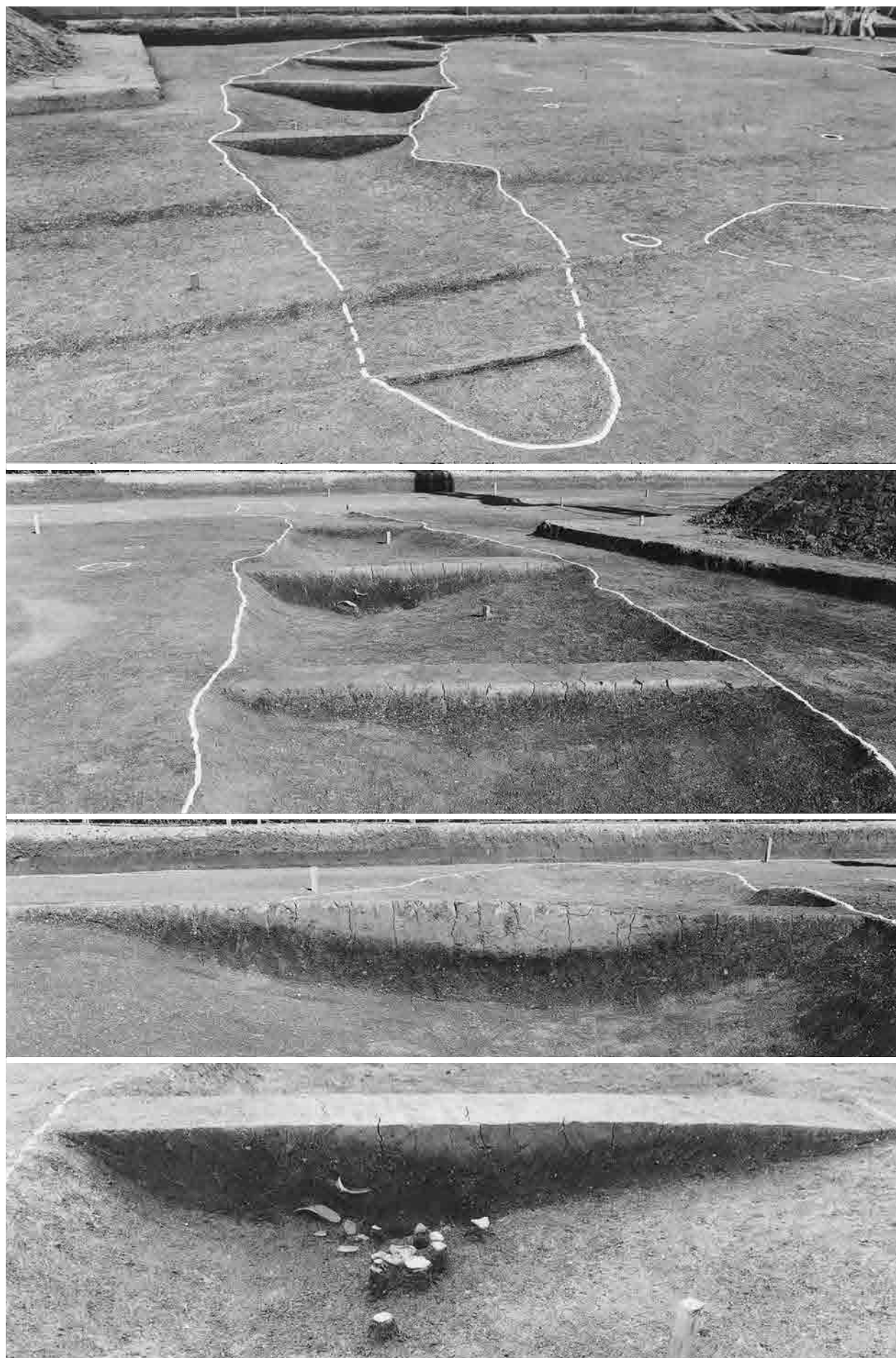
2. 第5調査区 方形周溝墓1全景（垂直）



1. 第5調査区 方形周溝墓1全景（北西から）



2. 第5調査区 方形周溝墓1全景（南西から）



第5調査区 方形周溝墓1 周溝（1溝）断面





1. 第5調査区 方形周溝墓群全景（北西から）



2. 第5調査区 方形周溝墓群・5溝周辺（北から）



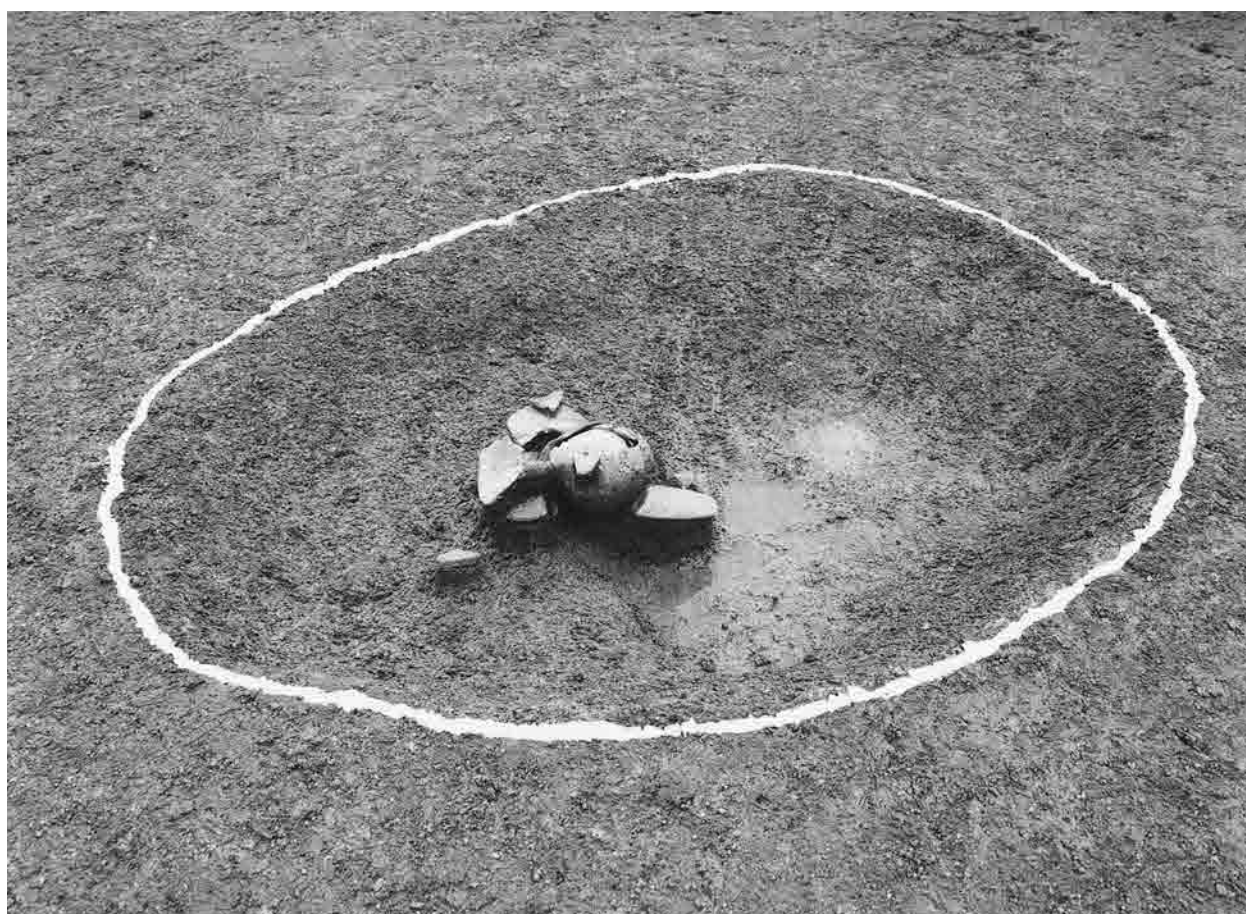
1. 第5調査区 方形周溝墓群・4溝周辺（北西から）



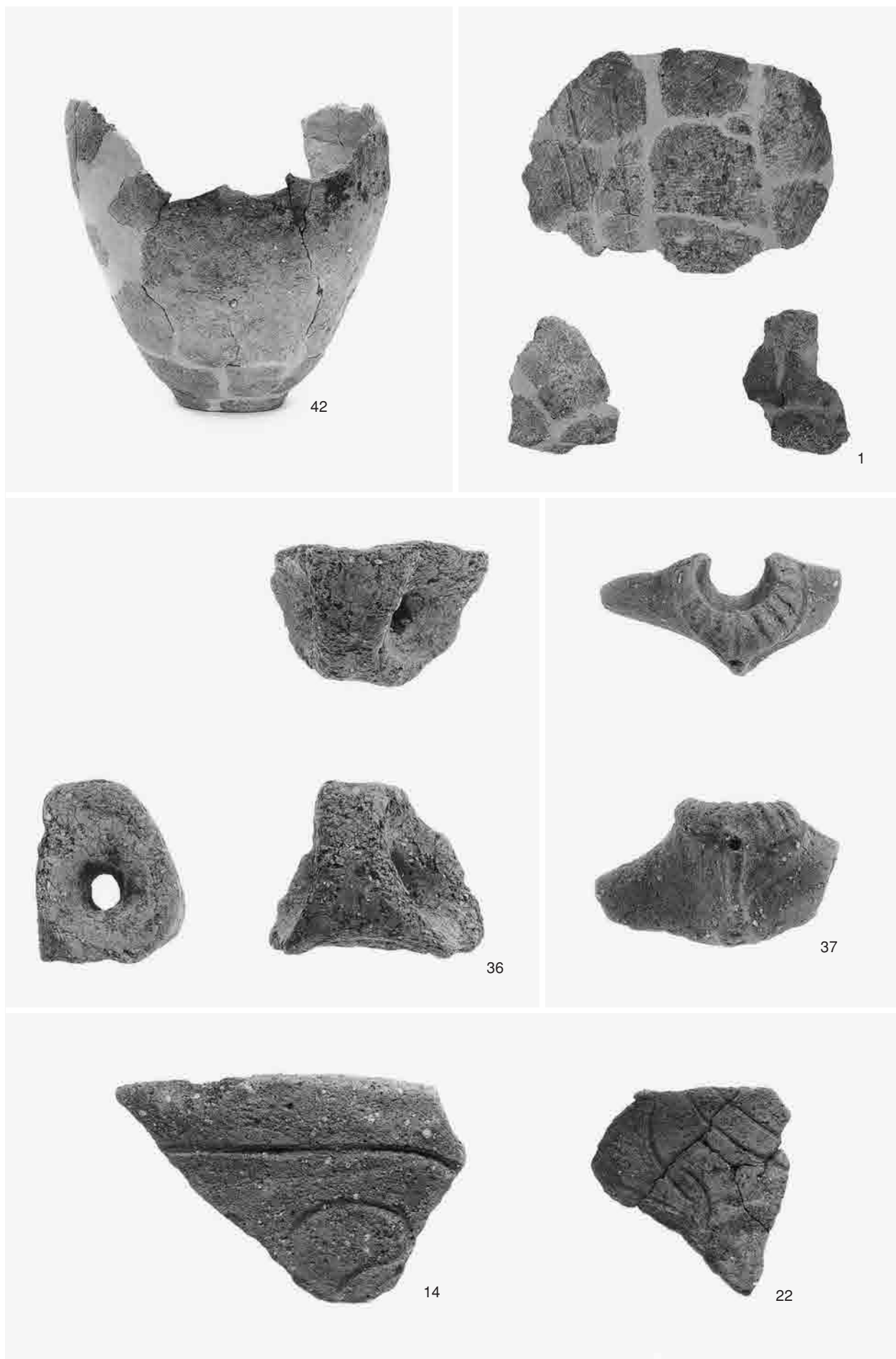
2. 第5調査区 方形周溝墓群・4溝土器出土状況（南東から）



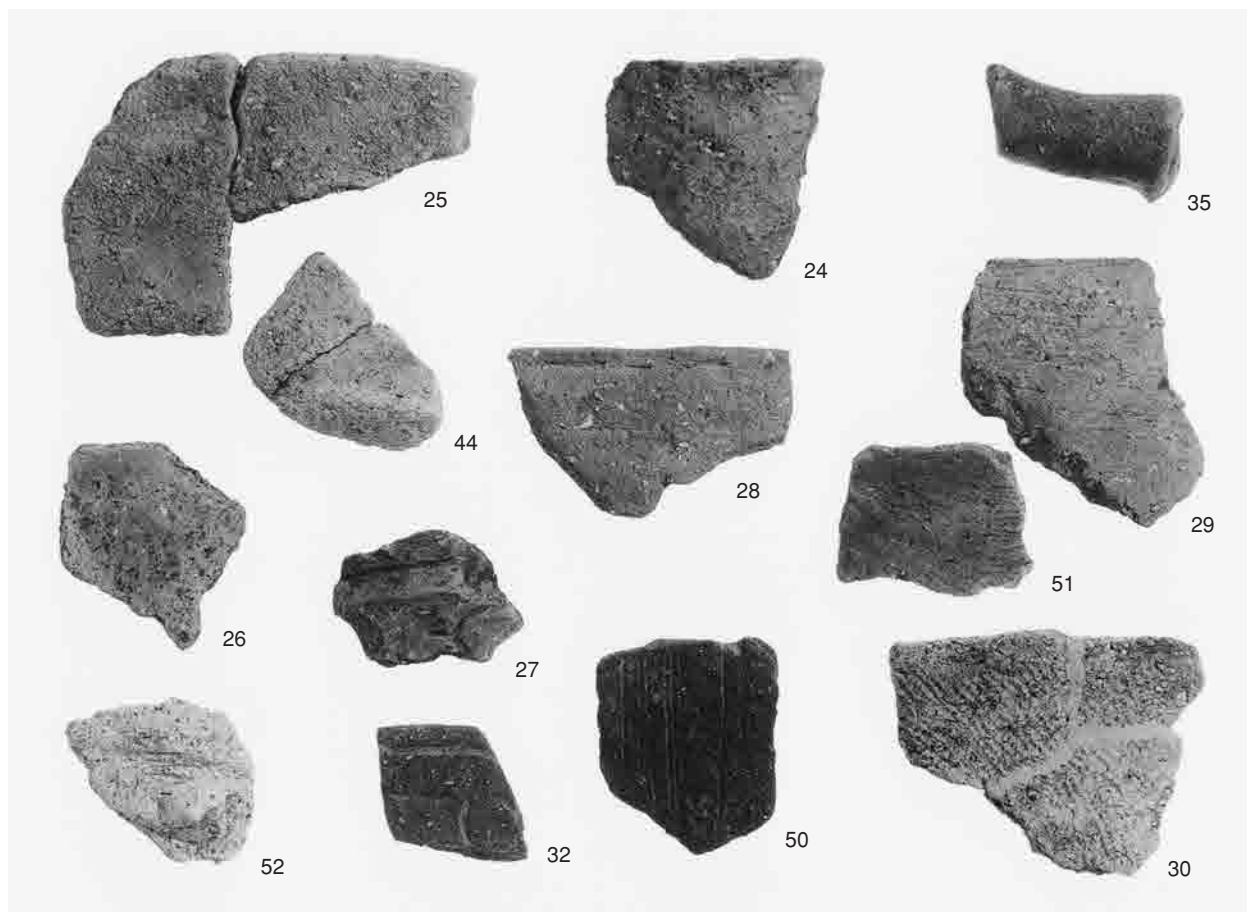
1. 第5調査区 調査区北部全景（南から）



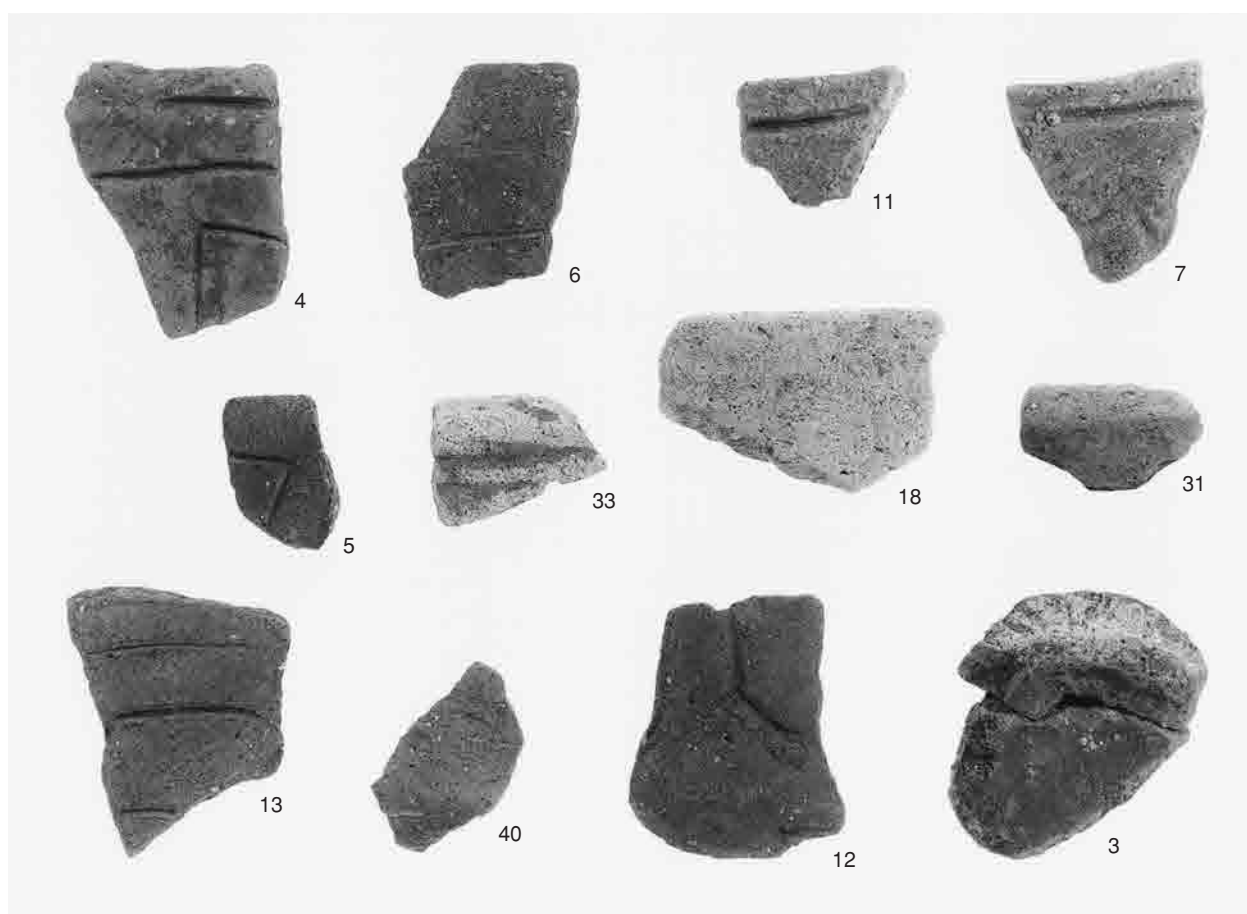
2. 第5調査区 7土坑土器出土状況（北から）



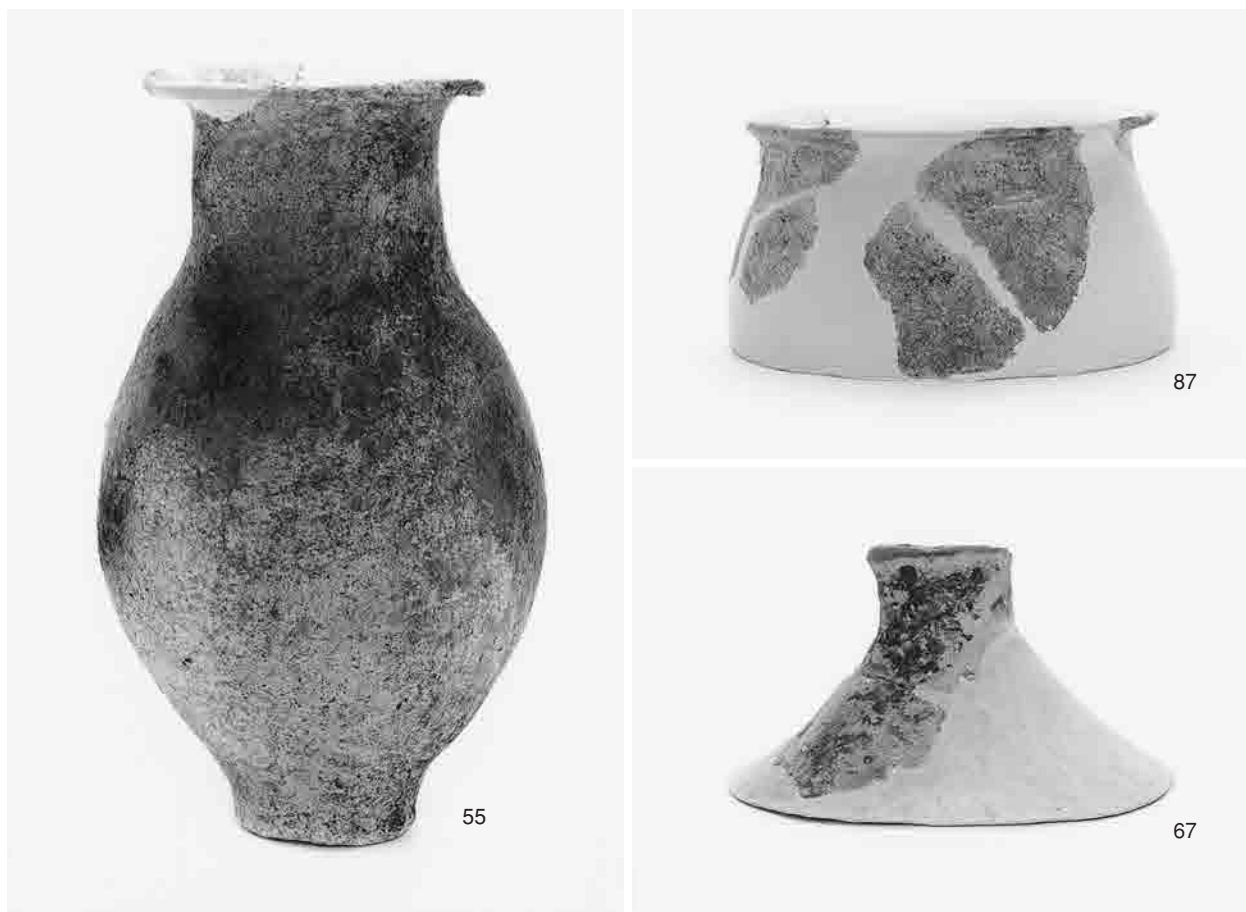
第1調査区出土 縄文土器



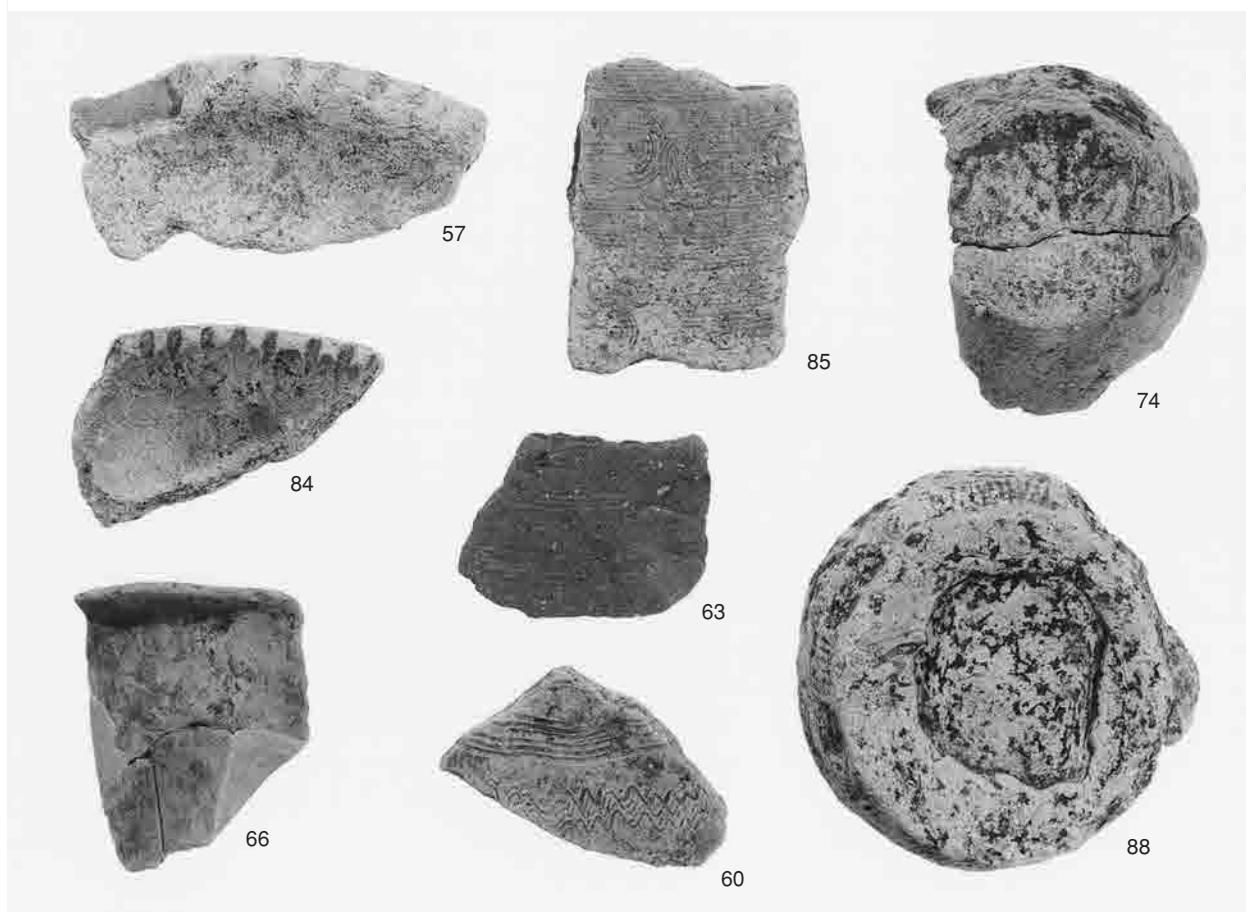
1. 第1調査区出土 縄文土器



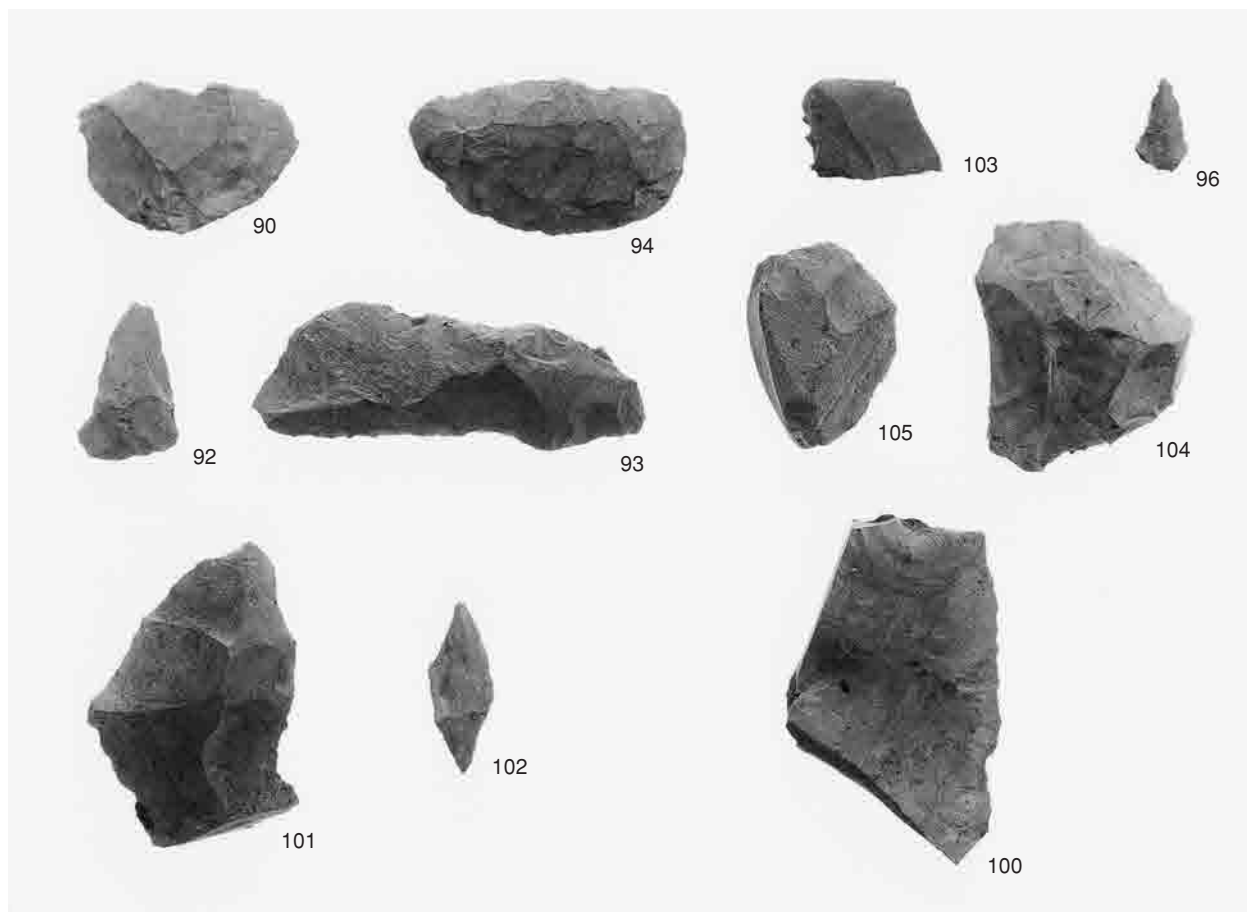
2. 第1調査区出土 縄文土器



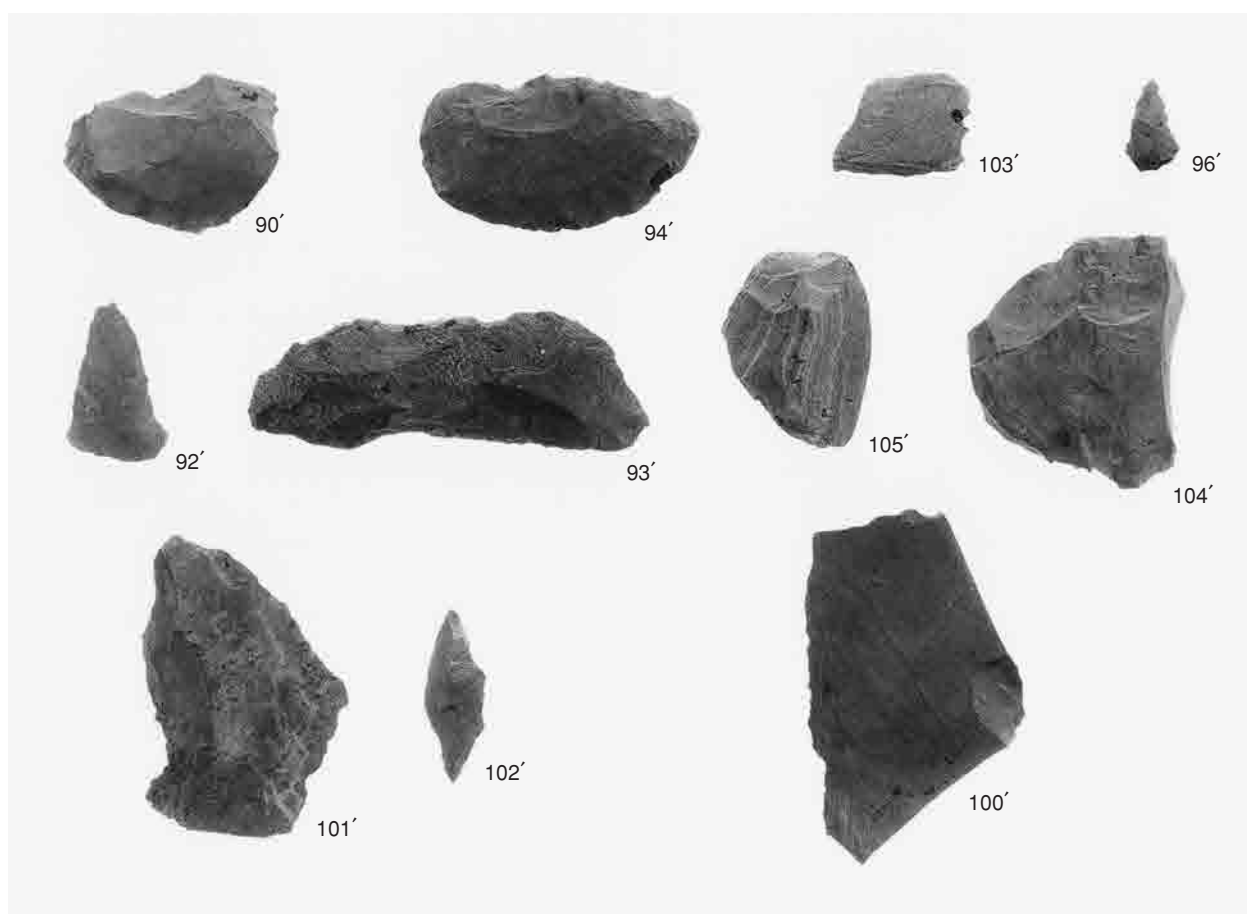
1. 第1調査区出土 弥生土器



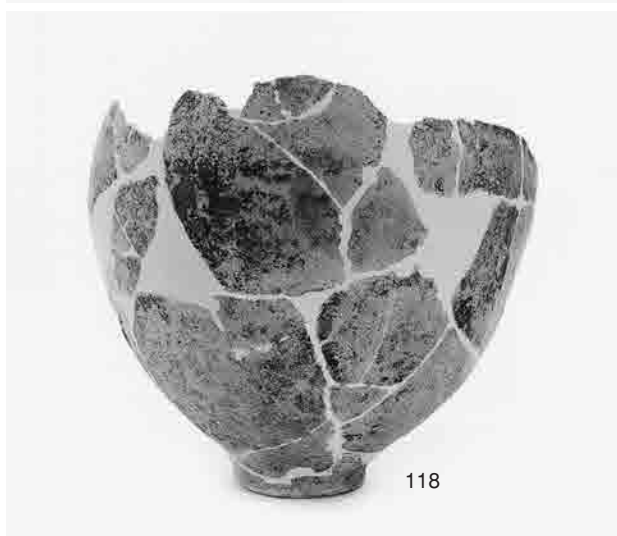
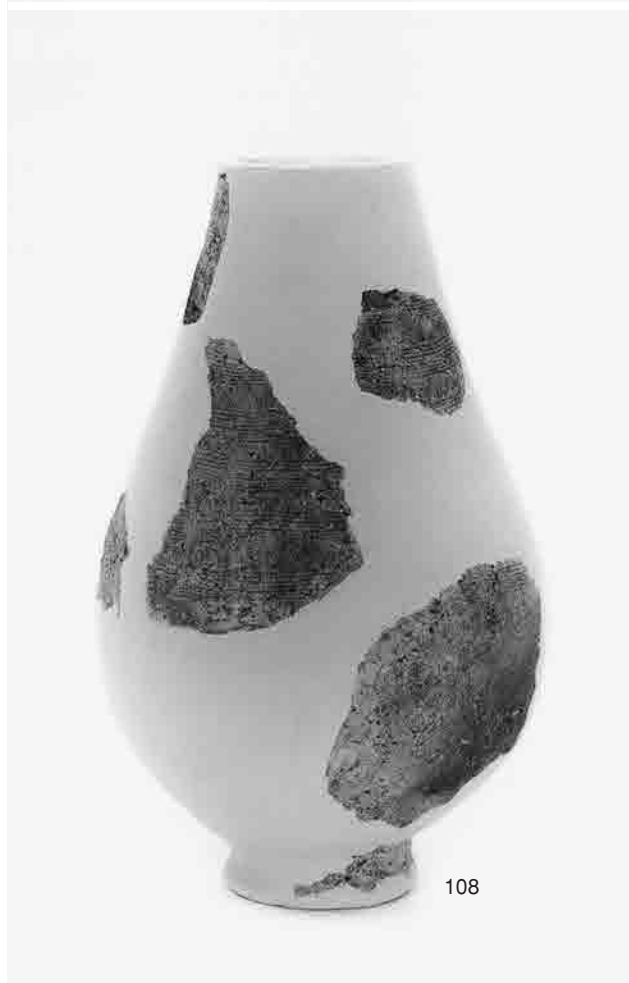
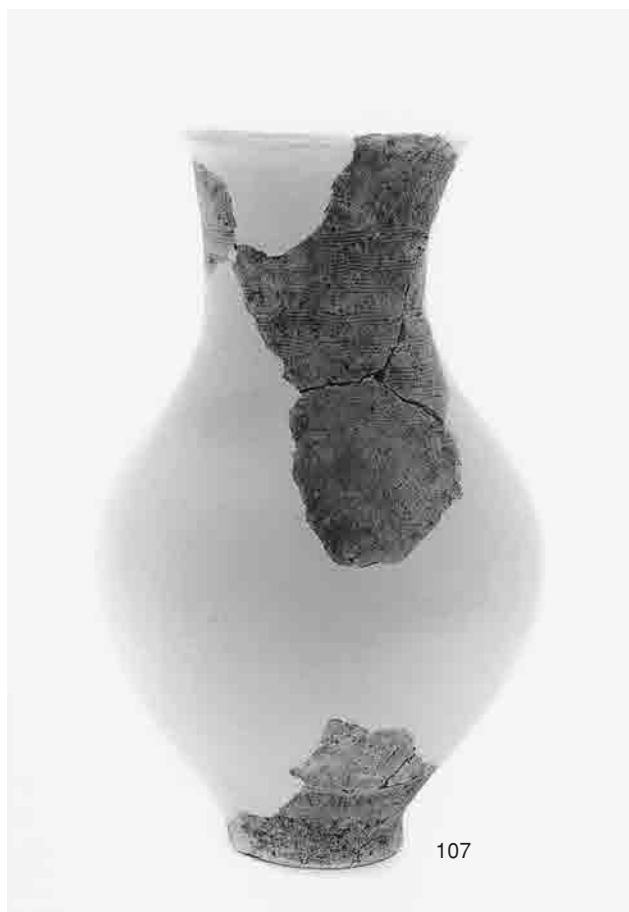
2. 第1調査区出土 弥生土器



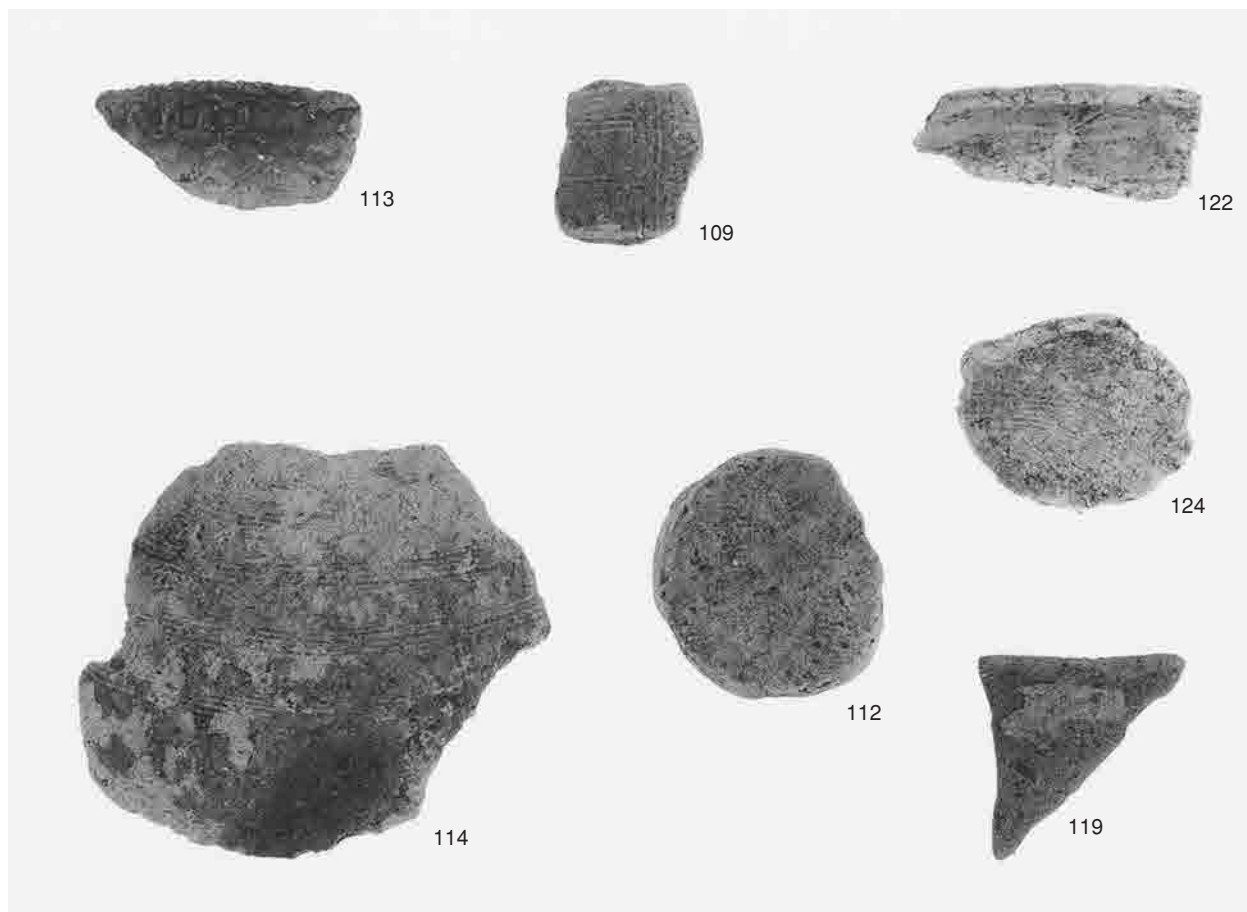
1. 第1調査区出土 石器 (表面)



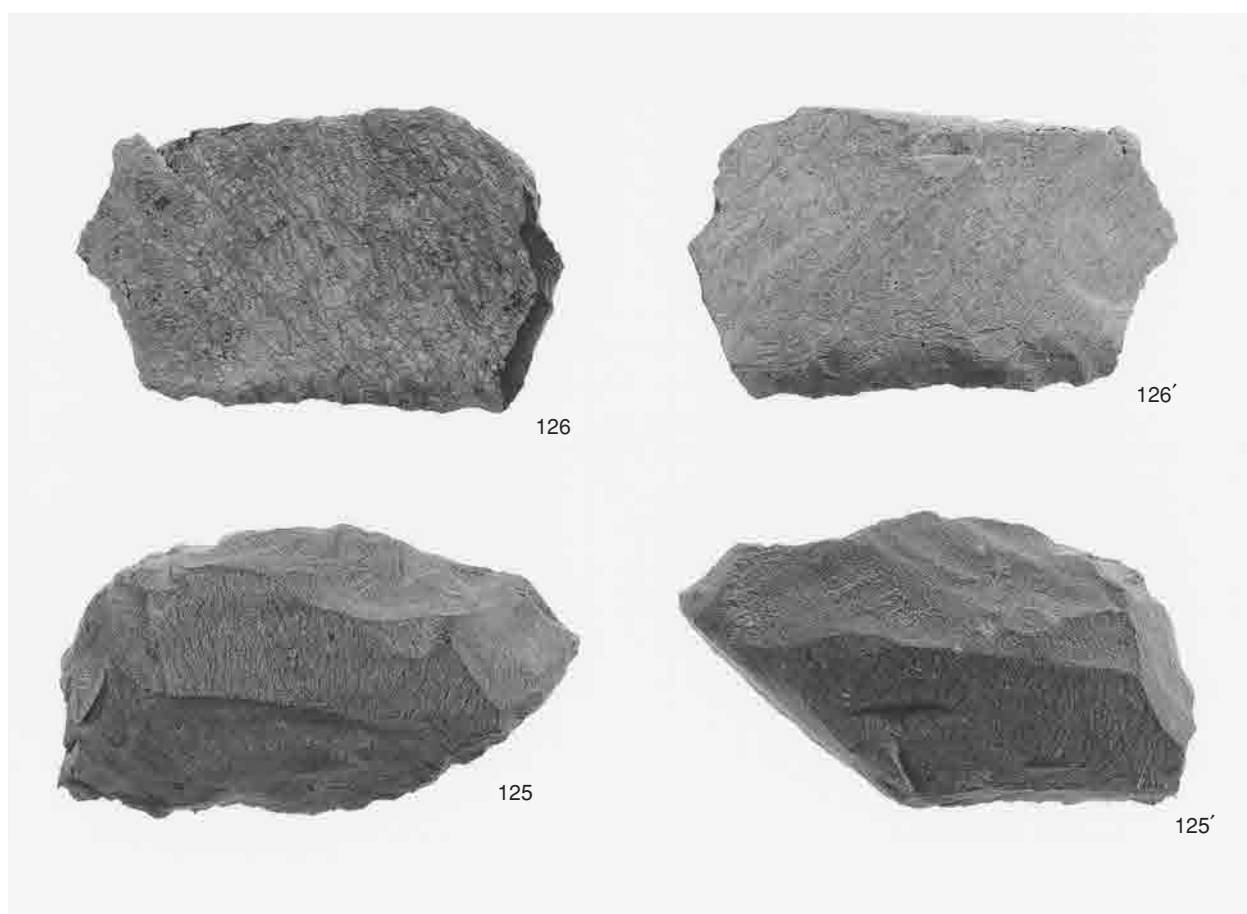
2. 第1調査区出土 石器 (裏面)







1. 第5調査区出土 弥生土器



2. 第5調査区出土 石器

## 報告書抄録

ふりがな	うえのやまいせきⅢ							
書名	上の山遺跡Ⅲ							
副書名	一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第171集							
編著者名	小林義孝・西川寿勝・森井貞雄・日野祥子・和田大作・吉田綾子・館邦典							
編集機関	（財）大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階 TEL072-299-8791							
発行年月日	2008年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえのやまいせき 上の山遺跡	かたのしきさべにし4ちょうめ 交野市私部西4丁目	27230	65	34° 46′ 52″	135° 40′ 21″	平成17年7月1日 ～ 平成20年2月29日	約5200㎡	一般国道168号（都市 計画道路枚方大和高田 線、天の川磐船線）他 道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上の山遺跡	集落・墓域	縄文時代中期～後期 弥生時代中期	土坑・埋甕遺構 方形周溝墓	縄文土器・石器 弥生土器・石器		・柱痕の遺存した縄文時代後 期の土坑群 ・16m×11mの墳丘をもつ方 形周溝墓		
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・200基近くの縄文時代の土坑群を検出。多くの土坑に柱痕が見られ、土坑は環状に配置されていた可能性がある。</li> <li>・16m×11mの墳丘規模をもつ弥生時代第Ⅱ期の大型方形周溝墓を検出。</li> </ul>							



(財)大阪府文化財センター調査報告書 第171集

## 上 の 山 遺 跡 Ⅲ

一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）他道路整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2008年 2月29日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台 3丁21番 4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南 2丁目 6番 8号

